岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第161集

中　切　上　野　遺　跡
（第１分冊）

２０２４
岐阜県文化財保護センター

中切上野遺跡
（第１分冊）

２０２４

岐阜県文化財保護センター

平成 29 年度発掘区遠景（北から）

平成 30 年度発掘区遠景（北東から）

SK684・SI32 出土の縄文土器

ST15 出土の弥生土器

序

岐阜県北部の飛騨地方は、豊かな山林と山あいを流れる数々の清流によって育まれた美しい自然のなかにあります。飛騨地方は岐阜県の中でも北陸や中部高地との関わりが深く、古くから各地との交流を盛んにもちつつ豊かな文化を育み続けてきました。遺跡の所在する高山盆地北西部は、牧ケ洞断層などの影響で南西から北東方向に直線的に伸びる丘陵が特徴であり、眼下に川上川が流れ、市街から続く宮川との合流点も望むことができます。

このたび、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い、高山市中切町にある中切上野遺跡と中切上野５号古墳の発掘調査を実施しました。今回の調査では、縄文時代前期から中期後葉までの竪穴建物や土坑墓などを確認し、長い時期にわたり生活域として利用されていたことが分かりました。特に、縄文時代前期の竪穴建物は傾斜地に連なるように形成され、それに寄り添うように土坑墓があるなど、飛騨地域の丘陵部における集落の様相を知る上での重要な成果となりました。また、遺跡内に位置する中切上野５号古墳の他、弥生時代中期の土坑墓１基や弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓１基や古墳時代後期の土坑墓を確認し、弥生時代以降は墓域として利用されていたことが分かりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、高山市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和６年３月

岐阜県文化財保護センター
所長　岡田　知也

例　言

1　本書は、岐阜県高山市中切町に所在する中切上野遺跡（岐阜県遺跡番号 21203-00440）・中切上野5号古墳(岐阜県遺跡番号 21203-00445)の発掘調査報告書である。

2　本調査は、中部縦貫自動車道高山清見道路に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　泉拓良京都大学名誉教授の指導のもとに、発掘作業は平成29・30年度、整理等作業は令和2・3年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括して掲載した。

5　本書の執筆は、第1章から第3章第2節までと5章を三島誠、第4章を林宏昌、第3章第3節から第6節は三島と林と中野真吾が分担して行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は、株式会社イビソクに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社岐阜営業所・株式会社吉田建設見附支店に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

網谷克彦、泉拓良、岩田崇、大石崇史、長田友也、佐藤亮太、鈴木康二、関根慎二、髙橋浩二、田嶋正憲、田中彰、寺﨑裕助、馬場伸一郎、藤森英二、町田賢一、三好清超、高山市教育委員会

9　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

10　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

11　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次　（第１分冊）

序
例言
第１章　調査の経緯……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の方法と経過……2
第２章　遺跡の環境……9
　第１節　地理的環境……9
　第２節　歴史的環境……11
　第３節　過去の調査……15
第３章　調査の成果……17
　第１節　遺跡の基本層序……17
　第２節　遺構・遺物の概要……19
　第３節　縄文時代の遺構・遺物……33
報告書抄録

第２分冊目次

第３章　調査の成果
　第３節　縄文時代の遺構・遺物
　第４節　弥生時代から古墳時代の遺構・遺物
　第５節　古代の遺構・遺物
　第６節　遺構外出土遺物
　発掘区全域図分割図
　遺構一覧表
　遺物観察表
第４章　自然科学分析
　第１節　分析の概要
　第２節　炭化材樹種同定
　第３節　放射性炭素年代測定

第３分冊目次

第５章　総括
　第１節　縄文時代の集落について
　第２節　中切上野５号古墳及び方形周溝墓（SZ１）について
　第３節　土地利用の変遷について
引用・参考文献
写真図版

挿図目次

図1　遺跡位置図 …… 1
図2　試掘調査抗、本発掘調査範囲 …… 2
図3　発掘区地区割り図 …… 3
図4　発掘区周辺地形図 …… 9
図5　中切上野遺跡周辺の地形と地質 …… 10
図6　周辺遺跡位置図 …… 13
図7　高山市調査及びセンター調査の発掘区 …… 15
図8　高山市調査C区・D区遺構分布図 …… 16
図9　基本層序の位置 …… 17
図10　基本層序 …… 18
図11　石鏃の基部による分類模式図 …… 26
図12　石鏃の側縁と脚部形態分類模式図 …… 26
図13　石鏃欠損部位分類模式図 …… 26
図14　打製石斧欠損部位模式図 …… 28
図15　石錘計測部位 …… 29
図16　摩石・敲石類の形状分類 …… 30
図17　ST33遺構図 …… 33
図18　ST33出土遺物 …… 34
図19　SI1遺構図（1） …… 36
図20　SI1遺構図（2） …… 37
図21　SI1遺構図（3） …… 38
図22　SI1出土遺物 …… 38
図23　SI2遺構図（1） …… 39
図24　SI2遺構図（2） …… 40
図25　SI2遺構図（3） …… 41
図26　SI2出土遺物 …… 42
図27　SI3遺構図（1） …… 43
図28　SI3遺構図（2） …… 44
図29　SI3遺構図（3） …… 45
図30　SI3出土遺物 …… 46
図31　SI4遺構図（1） …… 48
図32　SI4遺構図（2） …… 49
図33　SI4遺構図（3） …… 50
図34　SI4遺構図（4） …… 51
図35　SI4出土遺物（1） …… 52
図36　SI4出土遺物（2） …… 53
図37　SI4出土遺物（3） …… 54
図38　SI4出土遺物（4） …… 55
図39　SI4出土遺物（5） …… 56
図40　SI5遺構図（1） …… 57
図41　SI5遺構図（2） …… 58
図42　SI5遺構図（3）・出土遺物 …… 59
図43　SI6遺構図（1） …… 60
図44　SI6遺構図（2） …… 61
図45　SI6出土遺物 …… 62
図46　SI7遺構図（1） …… 62
図47　SI7遺構図（2）・出土遺物 …… 63
図48　SI8遺構図（1） …… 64
図49　SI8遺構図（2） …… 65
図50　SI8遺構図（3） …… 66
図51　SI9遺構図（1） …… 67
図52　SI9遺構図（2） …… 68
図53　SI9遺構図（3） …… 69
図54　SI9出土遺物（1） …… 70
図55　SI9出土遺物（2） …… 71
図56　SI10遺構図（1） …… 72
図57　SI10遺構図（2） …… 73
図58　SI10遺構図（3） …… 74
図59　SI10遺構図（4） …… 75
図60　SI10遺構図（5）・出土遺物（1） …… 76
図61　SI10出土遺物（2） …… 77
図62　SI10出土遺物（3） …… 78
図63　SI11遺構図（1） …… 79
図64　SI11遺構図（2） …… 80
図65　SI11遺構図（3） …… 81
図66　SI11遺構図（4） …… 82
図67　SI11遺構図（5） …… 83
図68　SI11遺構図（6）・出土遺物（1） …… 84
図69　SI11出土遺物（2） …… 85
図70　SI12遺構図（1） …… 86
図71　SI12遺構図（2） …… 87
図72　SI12遺構図（3） …… 88
図73　SI12遺構図（4） …… 89
図74　SI12出土遺物（1） …… 91
図75　SI12出土遺物（2） …… 92
図76　SI12出土遺物（3） …… 93
図77　SI12出土遺物（4） …… 94
図78　SI12出土遺物（5） …… 95
図79　SI12出土遺物（6） …… 96
図80　SI13遺構図（1） …… 98

図81　SI13遺構図（2）…… 99
図82　SI13出土遺物…… 100
図83　SI14遺構図（1）…… 101
図84　SI14遺構図（2）…… 102
図85　SI14遺構図（3）…… 103
図86　SI14出土遺物（1）…… 104
図87　SI14出土遺物（2）…… 105
図88　SI15遺構図（1）…… 107
図89　SI15遺構図（2）…… 108
図90　SI15遺構図（3）…… 109
図91　SI15遺構図（4）…… 110
図92　SI15出土遺物…… 111
図93　SI16遺構図（1）…… 112
図94　SI16遺構図（2）…… 113
図95　SI16遺構図（3）…… 114
図96　SI16遺構図（4）・出土遺物…… 115
図97　SI17遺構図（1）…… 117
図98　SI17遺構図（2）…… 118
図99　SI17遺構図（3）…… 119
図100　SI17遺構図（4）…… 120
図101　SI17出土遺物（1）…… 121
図102　SI17出土遺物（2）…… 122
図103　SI17出土遺物（3）…… 123
図104　SI21遺構図（1）…… 125
図105　SI21遺構図（2）…… 126
図106　SI21遺構図（3）…… 127
図107　SI21遺構図（4）…… 128
図108　SI21遺構図（5）…… 129
図109　SI21出土遺物…… 130
図110　SI22遺構図（1）…… 132
図111　SI22遺構図（2）…… 133
図112　SI22遺構図（3）…… 134
図113　SI22出土遺物…… 135
図114　SI23遺構図（1）…… 136
図115　SI23遺構図（2）…… 137
図116　SI23遺構図（3）…… 138
図117　SI23出土遺物…… 139
図118　SI24遺構図（1）…… 140
図119　SI24遺構図（2）…… 141
図120　SI24遺構図（3）…… 142
図121　SI24出土遺物…… 143
図122　SI28遺構図（1）…… 144
図123　SI28遺構図（2）・出土遺物…… 145
図124　SI30遺構図（1）…… 146
図125　SI30遺構図（2）・出土遺物…… 147
図126　SI31遺構図（1）…… 148
図127　SI31遺構図（2）…… 149
図128　SI31遺構図（3）・出土遺物…… 150
図129　SI36遺構図（1）…… 151
図130　SI36遺構図（2）・出土遺物…… 152
図131　SI40遺構図（1）…… 153
図132　SI40遺構図（2）…… 154
図133　SI40遺構図（3）・出土遺物…… 155
図134　SI42遺構図（1）…… 156
図135　SI42遺構図（2）…… 157
図136　SI42遺構図（3）…… 158
図137　SI42遺構図（4）…… 159
図138　SI42出土遺物…… 160
図139　SI43遺構図（1）…… 161
図140　SI43遺構図（2）・出土遺物…… 162
図141　SI44遺構図（1）…… 163
図142　SI44遺構図（2）…… 164
図143　SI44出土遺物…… 165
図144　SI45遺構図（1）…… 166
図145　SI45遺構図（2）…… 167
図146　SI45遺構図（3）・出土遺物…… 168
図147　SI47遺構図（1）…… 170
図148　SI47遺構図（2）…… 171
図149　SI47遺構図（3）・出土遺物（1）…… 172
図150　SI47出土遺物（2）…… 173
図151　SI49遺構図（1）…… 174
図152　SI49遺構図（2）…… 175
図153　SI49遺構図（3）…… 176
図154　SI49遺構図（4）…… 177
図155　SI49出土遺物…… 178
図156　SI53遺構図（1）…… 179
図157　SI53遺構図（2）…… 180
図158　SI53遺構図（3）…… 181
図159　SI53遺構図（4）・出土遺物…… 182
図160　SI54遺構図（1）…… 184
図161　SI54遺構図（2）…… 185
図162　SI54遺構図（3）…… 186
図163　SI54遺構図（4）…… 187
図164　SI54遺構図（5）…… 188
図165　SI54出土遺物（1）…… 189
図166　SI54出土遺物（2）…… 190

図 167　SI54 出土遺物（3）…… 192
図 168　SI55 遺構図（1）…… 193
図 169　SI55 遺構図（2）…… 194
図 170　SI55 遺構図（3）・出土遺物…… 195
図 171　SJ 1・SJ 2 遺構図…… 196
図 172　SJ 1・SJ 2 出土遺物…… 197
図 173　ST 1～ST 6 遺構図…… 200
図 174　ST 7～ST 9 遺構図…… 202
図 175　ST10～ST12 遺構図…… 204
図 176　ST 1～ST 5 出土遺物…… 205
図 177　ST 6～ST12 出土遺物…… 206
図 178　ST16～ST18・ST20 遺構図…… 209
図 179　ST21・ST23・ST25 遺構図…… 210
図 180　ST26・ST27 遺構図…… 211
図 181　ST28・ST30・ST31 遺構図…… 213
図 182　ST38・ST39 遺構図…… 214
図 183　ST41 遺構図…… 215
図 184　ST42・ST44・ST45 遺構図…… 216
図 185　ST16～ST18 出土遺物…… 217
図 186　ST18・ST20・ST21 出土遺物…… 218
図 187　ST23・ST25～ST27 出土遺物…… 219
図 188　ST28・ST30・ST31・ST38 出土遺物…… 220
図 189　ST38・ST39・ST41・ST42 出土遺物…… 221
図 190　ST44・ST45 出土遺物…… 222
図 191　SK 1～SK 9 遺構図…… 225
図 192　SK10～SK17 遺構図…… 228
図 193　SK18～SK21 遺構図…… 230
図 194　SK22～SK24 遺構図…… 232
図 195　SK25～SK28 遺構図…… 234
図 196　SK29・SK30 遺構図…… 235
図 197　SK 出土遺物（1）…… 236
図 198　SK 出土遺物（2）…… 237
図 199　SK 出土遺物（3）…… 238
図 200　SK372・SK393・SK397 遺構図…… 239
図 201　SK406 遺構図…… 240
図 202　SK426 遺構図…… 241
図 203　SK428 遺構図…… 242
図 204　SK488・SK491・SK521・SK524・SK540・SK547 遺構図…… 245
図 205　SK559・SK570・SK572・SK603・SK672 遺構図…… 247
図 206　SK684 遺構図（1）…… 248
図 207　SK684 遺構図（2）…… 249
図 208　SK696・SK698 遺構図…… 250
図 209　SK720 遺構図…… 251
図 210　SK 出土遺物（1）…… 251
図 211　SK 出土遺物（2）…… 252
図 212　SK 出土遺物（3）…… 253
図 213　SK 出土遺物（4）…… 254
図 214　SP 1～SP10 遺構図…… 257
図 215　SP259・SP287 遺構図…… 258
図 216　SP259・SP287 出土遺物…… 258

表目次

表 1　試掘・確認調査結果…… 2
表 2　周辺の遺跡一覧…… 14
表 3　高山市調査の主な検出遺構…… 16
表 4　検出遺構一覧表…… 19
表 5　出土遺物一覧表…… 21
表 6　器種別石材一覧表…… 31

写真図版目次

挿入写真
写真 1　表土掘削作業…… 7
写真 2　遺物包含層掘削作業…… 7
写真 3　遺構検出作業…… 7
写真 4　遺構掘削作業…… 7
写真 5　遺構実測作業…… 7
写真 6　現地見学会の様子…… 7

巻頭図版
図版 1　平成 29 年度発掘区遠景（北から）
　　平成 30 年度発掘区遠景（北東から）
図版 2　SK684・SI32 出土の縄文土器
　　ST15 出土の弥生土器

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

中切上野遺跡及び中切上野５号古墳は、岐阜県北部、飛騨地域の中心都市である高山市に所在し、市街地が広がる高山盆地の北西端に位置する（図１）。

今回の発掘調査は、国土交通省中部地方整備局高山国道事務所（以下、「事務所」という。）による中部縦貫自動車道高山清見道路の建設に伴い実施したものである。この道路は、高山市と東海北陸自動車道を結び、高速交通サービスの提供、高山市内の交通混雑の緩和、さらには沿線の文化・観光資源を活かした地場産業振興や観光リゾートとしての地域発展の支援等を目的に計画された一般国道の自動車専用道路である。

事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「中切上野遺跡」（岐阜県遺跡番号 21203－00440）と「中切上野５号古墳」（岐阜県遺跡番号 21203－00445）が所在することから、事業に先立ち事務所は試掘・確認調査を岐阜県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）に依頼し、県教育委員会は平成 26 年 11 月 27 日・28 日に実施した。試掘坑は事業予定地内に９箇所設定された（図２）。この試掘・確認調査の結果、TP１では５号古墳の墳丘盛土、TP２・４・５・６では縄文時代の竪穴建物・土坑、TP

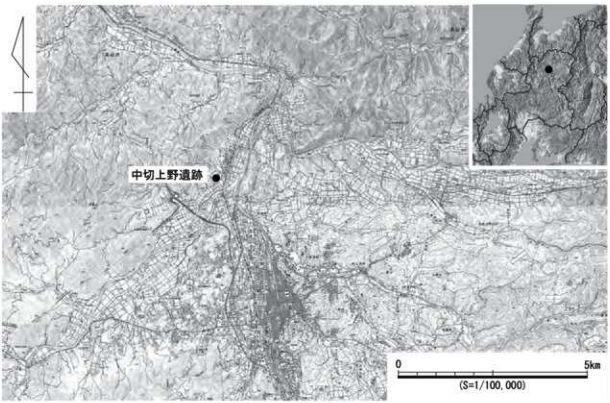


図１　遺跡位置図

（国土地理院発行２万５千分の１地形図　平成 23 年「高山」、平成 29 年「町方」、平成 30 年「飛騨古川」、令和元年「三日町」）を使用

表１　試掘・確認調査結果

試掘坑No.	検出遺構（基数）	出土遺物（点数） 縄文土器	弥生土器	須恵器	灰釉陶器	陶磁器	石器	合計
TP1	墳丘１	0	0	0	0	0	0	0
TP2	竪穴建物１、土坑１	1	0	0	0	0	0	1
TP3	なし	7	0	0	0	0	2	9
TP4	竪穴建物１	263	0	0	0	0	13	276
TP5	竪穴建物１、土坑３	0	0	0	0	0	2	2
TP6	竪穴建物１、土坑２	51	1	0	0	0	3	55
TP7	なし	0	0	0	0	0	0	0
TP8	土坑３	0	0	0	0	0	2	2
TP9	なし	0	0	0	0	0	0	0

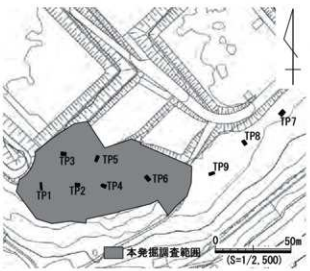


図２　試掘調査坑、本発掘調査範囲

８では時期・性格不明の土坑を確認した。TP３では遺構は確認できなかったが、縄文時代の遺物包含層を確認した。遺物はTP２・３・４～６・８で縄文土器や弥生土器や石器が出土した（表１）。その結果をもとに、平成27年11月４日に平成27年度第１回岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会が開催され、岐阜県発掘調査適用基準に基づき、TP１からTP６までの4,075㎡について、本発掘調査が必要とされた（図２）。

その後、文化財保護法第94条第１項の規定に基づき、事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）に埋蔵文化財発掘通知（平成29年３月31日付け国部整高計第148号）が提出され、同条第４項の規定に基づき、県教育長から事務所長あて発掘調査実施勧告（平成29年３月31日付け社文第64号の245）が通知された。事務所長は、発掘調査の実施を県教育長に依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成29年５月17日付け文財セ第105号、平成30年５月20日付け文財セ113号）を県教育長に提出した。

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

発掘調査は、平成29年度に1,525㎡、平成30年度に2,550㎡を対象に実施した。

発掘区には世界測地系を基に（X, Y）＝（19,220, 6,470）を原点として100m×100m四方の大グリッドA・Bを設定した。さらに、大グリッド内に５m×５mの小グリッド（以下、「グリッド」という。）を設定し、北から南へAからT、西から東へ１から20を設定した（図３）。そのため、発掘区の西隅のグリッドはAI２・AJ２、東隅のグリッドはBF３となる。

表土掘削は５号古墳の墳丘部分については大型の掘削道具を用いて人力で行ったが、これ以外は、バックホウによる重機掘削で行った。

遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削はジョレン・移植ゴテなどを用いて人力で行った。遺構掘削では、遺物の出土状況等の記録を作成しつつ、最終的に遺構埋土をすべて取り除いた。また、必要に応じて遺構断ち割り調査を実施した。遺構番号は検出順の通番とし、平成29年度はS0001番から番

号を与え、平成 30 年度は調査職員が２名体制になったため、A0001、B0001 から番号を与えた。この遺構番号は、整理等作業時に遺構種別ごとに新たな番号を付けた。

個別の遺構実測図の作成は、三次元測量・図化システムによって行ったが、遺構断面図は手測りで実測した。図面の縮尺は 20 分の１を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影は、一眼レフ 35mm カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、中判カメラ（リバーサルフィルム、モノクロフィルム）、デジタルカメラで撮影した。遺跡全景写真は、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を平成 29 年度は１回、平成 30 年度は２回（第１調査面、第２調査面）実施した。

遺物包含層から出土した遺物は、原則層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は概ね５㎝単位の人工層位もしくは、分層した層位毎に取り上げた[1]。また、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、実測あるいは出土位置を測定して取り上げた。

２　発掘作業の経過

平成 29 年度

発掘作業前（４/24～５/２）　24 日に発掘区及び排土置場の地形測量を開始した。
第１週（５/８～５/12）　８日に表土掘削を開始した。
第２週（５/15～５/19）　19 日に表土掘削を終了した。
第３週（５/22～５/26）　24 日に発掘区の南西側から表土掘削を開始した。
第４週（５/29～６/２）　29日から遺構検出・遺構掘削を開始した。
第５週（６/５～６/９）　引き続き、遺物包含層掘削・遺構検出作業・遺構掘削作業を行った。
第６週（６/12～６/16）　19日に竪穴建物（SI21）の掘削を開始した。

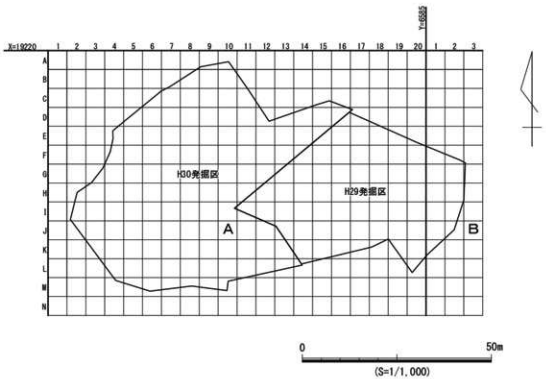


図３　発掘区地区割り図

第７週（６/19～６/23）　22日に周溝墓（SZ１）の主体部１・２及び周溝を確認し、掘削を開始した。
第８週（６/26～６/30）　遺物包含層掘削・遺構検出作業・遺構掘削作業を行った。
第９週（７/３～７/７）　引き続き、遺物包含層掘削・遺構検出作業・遺構掘削作業を行った。
第10週（７/10～７/14）　12日に竪穴建物（SI21）の掘削を終了した。
第11週（７/18～７/21）　19日に竪穴建物（SI20）の掘削を開始し、20日に床面を検出した。
第12週（７/24～７/28）　６日にタイムスリップ探検隊（飛騨）を実施し、飛騨地域を中心に小学校５・６年生とその保護者８組20名が参加した。28日に竪穴建物（SI20）の掘削を終了した。
第13週（７/31～８/４）　２日に竪穴建物（SI19）の掘削を開始した。
第14週（８/７～８/10）　７日に竪穴建物（SI23）の掘削を開始した。
第15週（８/14～８/18）　現場作業休止（８/14～８/16）。17日に竪穴建物（SI17）の掘削を開始した。
第16週（８/21～８/25）　22日に竪穴建物（SI12）の掘削を開始した。
第17週（８/28～９/１）　１日に竪穴建物（SI18）の掘削を開始し、一次整理作業を開始した。
第18週（９/４～９/８）　４日に竪穴建物（SI19）の掘削を終了した。また、竪穴建物（SI9）の掘削を開始した。４日に竪穴建物（SI17）の掘削を終了した。
第19週（９/11～９/15）　11日に竪穴建物（SI12）の掘削を終了した。12日に竪穴建物（SI23）の掘削を終了した。14日に竪穴建物（SI９）の掘削を終了した。15日に竪穴建物（SI14）の掘削を開始した。
第20週（９/19～９/22）　竪穴建物（SI18）の掘削を終了した。21日と22日に京都大学大学院特員教授泉拓良氏が来跡し指導を受けた。21日に竪穴建物（SI16）の掘削を開始した。22日に竪穴建物（SI11）の掘削を開始した。23日に竪穴建物（SI14）の掘削を終了した。
第21週（９/25～９/29）　25日に文化庁文化庁文化財部参事官（建造物担当）の大石崇史氏が来跡し指導を受けた。27日に竪穴建物（SI１・SI６）の掘削を開始した。
第22週（10/２～10/６）　３日に竪穴建物（SI11）の掘削を終了した。４日に竪穴建物（SI16）の掘削を終了し、竪穴建物（SI７）の掘削を開始した。５日に竪穴建物（SI６・SI７）の掘削を終了した。
第23週（10/10～10/13）　11日に竪穴建物（SI１）の掘削を終了した。13日に滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏が来跡し、指導を受けた。
第24週（10/16～10/20）　17日に竪穴建物（SI10・SI２）の掘削を開始した。18日に竪穴建物（SI15）の掘削を開始した。
第25週（10/23～10/28）　26日に遺物包含層掘削・遺構検出作業が終了した。27日に竪穴建物（SI２）の掘削を終了し、竪穴建物（SI８）の掘削を開始した。28日に現地見学会を開催した（参加者120名）。
第26週（10/30～11/２）　31日に竪穴建物（SI３）の掘削を開始した。１日に竪穴建物（SI８・SI10の掘削を終了し、竪穴建物（SI４・SI５）の掘削を開始した。
第27週（11/６～11/10）　９日に竪穴建物（SI３・SI15）の掘削を終了し、竪穴建物（SI13）の掘削を開始した。

第28週（11/13～11/17）　13日に竪穴建物（SI４・SI５）の掘削を終了した。16日に竪穴建物（SI13）の掘削を終了した。

第29週（11/20～11/24）　22日に遺構掘削作業が終了した。空撮前清掃作業を実施した。

第30週（11/27～12/１）　28日にラジコンヘリコプターによる景観写真撮影を実施した。

第31週（12/４～12/８）　４日に全体図校正を行い、終了した。５日から発掘区の埋め戻し作業を開始し、８日に終了した。

第32週（12/11～12/15）　15日に一次整理作業を終了した。

第33週（12/18～12/22）　20日に事業主である高山国道事務所の担当者とともに現地確認を行い、現地引渡しを行った。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、９月１日から12月15日までの期間に飛騨国府事務所で行った。

平成30年度

発掘作業前（４/16～５/２）　16・17日に発掘区の地形測量を開始した。25日に現況地形測量図を校了した。

第１週（５/７～５/11）　８日に表土掘削を開始した。

第２週（５/14～５/18）　15日に表土掘削を終了した。

第３週（５/21～５/25）　21日から古墳（SZ２）を検出した。22日から獣害対策用フェンスの西側のグリッド杭打設・表土掘削を開始した。

第４週（５/28～６/１）　28日にSZ２の周溝の掘削を開始した。

第５週（６/４～６/８）　５日にSZ２の周溝の掘削を終了した。

第６週（６/11～６/15）　11日に竪穴建物（SI35・SI47）の掘削を開始した。14日に第一調査面（墳丘部分）の景観写真撮影を実施した。

第７週（６/18～６/22）　18日に竪穴建物（SI24）の掘削を開始した。19日にSZ２の主体部を検出した。22日にSZ２の墳丘盛土の除去が完了し、墳丘下調査を開始した。

第８週（６/25～６/29）　25日に竪穴建物（SI37・SI44）の掘削を開始した。26日に竪穴建物（SI35・SI47）の掘削を終了し、竪穴建物（SI27）の掘削を開始した。

第９週（７/２～７/６）　２日に竪穴建物（SI25・SI32）の掘削を開始した。３日に竪穴建物（SI29）の掘削を開始した。

第10週（７/９～７/13）　９日に発掘区から流出する濁水に関する高山国道事務所との協議を行った。また、竪穴建物（SI34・SI46）の掘削を開始した。竪穴建物（SI25・SI32）の掘削を終了した。10日に竪穴建物（SI44・SI45）の掘削を開始し、竪穴建物（SI34）の掘削を終了した。11日に竪穴建物（SI24）の掘削を終了した。12日に竪穴建物（SI40・SI41）の掘削を開始した。13日に竪穴建物（SI46）の掘削を終了した。

第11週（７/16～７/20）　17日に竪穴建物（SI29）の掘削を終了した。18日に竪穴建物（SI33）の掘削を開始した。19日に発掘区から流出する濁水に関する高山国道事務所との協議を行った。

第12週（７/23～７/27）　23日に竪穴建物（SI26）の掘削を開始した。24日にタイムスリップ探検隊（飛騨）を実施し、飛騨地域の小学校５・６年生とその保護者９組18名が参加した。25日に

竪穴建物（SI26）の掘削を終了した。26日に竪穴建物（SI27）の掘削を終了した。27日に竪穴建物（SI41）の掘削を終了した。

第13週（７/30～８/３）　31日に竪穴建物（SI30）の掘削を開始し、竪穴建物（SI33）の掘削を終了した。１日に竪穴建物（SI42）の掘削を開始した。

第14週（８/６～８/10）　８月６日に高山市・飛騨市小学校社会科研究部会21名が来跡した。９日に竪穴建物（SI30）の掘削を終了し、B区の遺構掘削は全て終了した。

第15週（８/13～８/17）　現場作業休止（８/13～８/15）。

第16週（８/20～８/24）　20日に用地内の沈砂池の設置を完了した。23日に発掘区南側市道の道路占用許可及び道路使用許可を取得した。

第17週（８/27～８/31）　27日に市道に排水管の設置を完了した。

第18週（９/３～９/７）　３日に竪穴建物（SI45）の掘削を終了し、竪穴建物（SI36）の掘削を開始した。６日に竪穴建物（SI42）の掘削を終了した。

第19週（９/10～９/14）　10日に竪穴建物（SI36・SI45）の掘削を終了した。11日に竪穴建物（SI38・SI39）の掘削を開始した。14日に竪穴建物（SI38）の掘削を終了した。18日に竪穴建物（SI52）の掘削を開始した。19日に竪穴建物（SI39）の掘削を終了した。

第20週（９/17～９/21）　21日に飛騨国府事務所にて一次整理作業を開始した。

第21週（９/24～９/28）　27日に竪穴建物（SI37・SI40）の掘削を終了した。28日に京都大学大学院特員教授泉拓良氏が来跡し、指導を受けた。竪穴建物（SI52）の掘削を終了した。

第22週（10/１～10/５）　３日に竪穴建物（SI51）の掘削を開始した。

第23週（10/８～10/12）　引き続き、遺物包含層掘削・遺構検出作業・遺構掘削作業を行った。

第24週（10/15～10/19）　15日に竪穴建物（SI54）の掘削を開始した。19日に竪穴建物（SI51）の掘削を終了した。

第25週（10/22～10/26）　24日に竪穴建物（SI50）の掘削を開始した。27日に現地見学会を開催した（参加者97名）。

第26週（10/29～11/２）　29日に竪穴建物（SI53）の掘削を開始した。31日に竪穴建物（SI50・SI54）の掘削を終了した。２日に竪穴建物（SI28･SI48）の掘削を開始し、竪穴建物（SI53）の掘削を終了した。

第27週（11/５～11/９）　５日に竪穴建物（SI55）の掘削を開始した。７日に竪穴建物（SI23）の掘削を開始した。

第28週（11/12～11/16）　12日に竪穴建物（SI22・SI49）の掘削を開始し、竪穴建物（SI28）の掘削を終了した。14日に竪穴建物（SI23・SI48）の掘削を終了した。15日に竪穴建物（SI49）の掘削を終了し、竪穴建物（SI21・SI31）の掘削を開始した。

第29週（11/19～11/23）　19日に竪穴建物（SI55）の掘削を終了した。20日に竪穴建物（SI43）の掘削を開始し、竪穴建物（SI21）の掘削を終了した。21日に竪穴建物（SI22・SI43）の掘削を終了した。22日に竪穴建物（SI31）の掘削を終了した。

第30週（11/26～11/30）　27日に遺構掘削作業を終了した。28日にラジコンヘリコプターによる景観写真撮影を実施した。29日に全体図校正を行い、終了した。

第31週（12/３～12/７）　４日に発掘区埋め戻しを開始し、12月７日に終了した。
第32週（12/10～12/14）　14日に一次整理作業を終了した。
第33週（12/18～12/22）　19日に事業主である高山国道事務所の担当者とともに現地確認を行い、現地引渡しを行った。

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、９月 21 日から 12 月 14 日までの期間に飛騨国府事務所で行った。

写真１　表土掘削作業

写真２　遺物包含層掘削作業

写真３　遺構検出作業

写真４　遺構掘削作業

写真５　遺構実測作業

写真６　現地見学会の様子

3　整理等作業の経過

整理等作業は当センター飛騨駐在事務所において令和2年4月から令和4年3月まで実施した。令和2年10月22日に田中彰氏（高山市史編纂委員）に平成8年度に高山市教育委員会が実施した中切上野遺跡の発掘調査の成果の確認と当センターの発掘調査成果に関する指導を、11月25日・26日に藤森英二氏（長野県北相木村教育委員会）に出土した縄文時代前期の土器に関する指導を受けた。また、令和3年5月27日に岩田崇氏（郡上市教育委員会）に縄文時代中期の土器に関する指導を、12月1日・2日に網谷克彦氏に調査成果全体に関する指導を受けた。なお、出土金属製品の保存処理を令和3年度に実施した。

4　調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

センター所長	羽田能崇（平成29年度）、野村幹也（平成30年度）、森勝利（令和2年度） 岡田知也（令和3年度）
調査課長	春日井恒（平成29・30年度、令和2年度）
調査担当係長等	鷲見博史（平成29年度）、長谷川幸志（平成30年度） 三島誠（令和3年度）
担当調査職員	三島誠（平成29・30年度、令和2年度）、柳坪武志（平成30年度）、 林宏昌（令和3年度）

注

1）遺構から出土した遺物は、平成29年度の調査の8月まではすべてトータルステーションによる三次元座標の測定を行った。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

高山市市街地の北西部には見量山（997m）や三枝山（825m）などの山々が連なる。この２つの山の間には高草洞が北西から南東方向へ走り、寿美峠までの直線的で奥行きの深い谷になっている。この谷を流れる高曽洞川は両岸に狭い氾濫原を形成する。

見量山や三枝山の南西側の麓には、国府断層帯の一つである牧ケ洞断層が北東から南西方向へ直線的に延びる。見量山や三枝山は断層の影響と考えられる凹地や高まり、尾根の屈曲など特徴的な地形が認められる。また、三枝山の南西側は、断層と直交する直線的な谷が走り、細長い半島状の丘陵を形成する。この丘陵は、やせ尾根の途中でやや屈曲しながら分岐し、分岐した尾根との間に扇状の緩

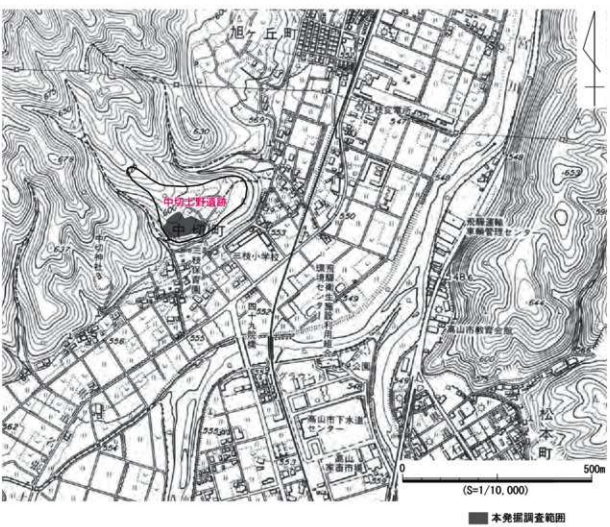


図４　発掘区周辺地形図

高山市役所発行１万分の１市街図　平成４年「高山市市街図其一」を使用。

傾斜地が広がる。中切上野遺跡は、西側の尾根及び緩傾斜地に立地する（図４）。

当遺跡の北側と南西側の丘陵下には谷が形成される。南西側の谷は北側の谷よりも奥行が深く、水量が豊富である。南東側の丘陵下は、丘陵が崩壊してできた崖錐性堆積物により、緩傾斜地を形成する。さらに南側は断層と平行する川上川が流れ、川筋を変えながら砂礫を堆積させ、河岸段丘（砂礫台地）を形成する[1]。当遺跡は河岸段丘上の中切町の集落と約 40mの比高があり、遺跡からは眼下に中切町や川上川が一望できる。

地質学的には、当遺跡の南西側の高草洞を挟んだ丘陵部の基盤は見量山山系の基盤で、濃飛流紋岩や花崗斑岩で形成される（図５）。一方、本遺跡が位置する丘陵部は三枝山の基盤で、上広瀬層や森部層のように礫岩・砂岩・凝灰岩・石灰岩・粘板岩・安山岩等で形成され、飛騨外縁帯の一部をなしている。当遺跡内で見られる自然堆積物の多くは、三枝山の基盤層に由来する褐色系の砂質シルト層であり、傾斜に沿って堆積し、緩傾斜地に厚く堆積する。

注

1）高山市教育委員会が実施した試掘確認調査では、試掘坑のほとんどで砂礫層を確認している。また、遺構面が確認されていないことから氾濫原と推定されている。

高山市教育委員会 2009「4. 中切町須恵器散布地」『高山市内遺跡発掘調査報告書』（高山市埋蔵文化財調査報告書第 30 集）

高山市教育委員会 2013「6. 中切町須恵器散布地」『高山市内遺跡発掘調査報告書』（高山市埋蔵文化財調査報告書 31 集）

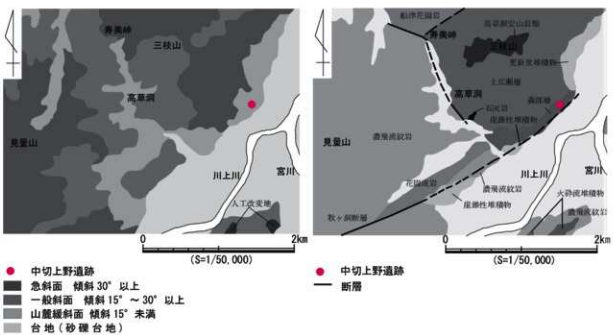


図５　中切上野遺跡周辺の地形と地質

地質図（左）は地質調査所『５万分の１地質図(1975「飛騨古川」・1982「三日町」)』を基に作成、地形分類図（右）は『岐阜県「５万分の１土地分類基本調査(地形分類図(2005「白木峰・古川」・2000「三日町」)』を基に作成した。

第２節　歴史的環境

当遺跡周辺には、川上川左岸の山麓を中心に遺跡が分布する(図６)。当遺跡周辺では数多くの発掘調査が実施されているため、本節では発掘調査報告書が刊行された遺跡を中心に記載する。文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図６・表２と一致する。

縄文時代の遺跡は、川上川と宮川両岸の丘陵地や河岸段丘上に集中する。前平山穂遺跡（110）では、平成２・３年度の高山市教育委員会（以下、「市教委」という。）の発掘調査[1]で早期の異形局部磨製石鏃が４点出土した。今回調査を行った中切上野遺跡（１）は、平成８年度の市教委の発掘調査[2]では、早期の集石遺構２基と前期の竪穴建物15軒が検出された。日焼遺跡（68）では平成27・28年度にセンターが発掘調査を実施し、早期の煙道付炉穴２基、中期の竪穴建物２軒などを検出した。ウバガ平遺跡（53）では、平成13・19年度にセンターが発掘調査を実施し、前期から中期の竪穴建物２軒を検出した。赤保木遺跡（36）では、平成３年度の市教委の発掘調査[3]では中期の竪穴建物１軒が検出され、平成16年度のセンターの発掘調査では中期の竪穴建物26軒を検出した。野内遺跡では、平成14年度から17年度にセンターが発掘調査を実施し、Ｂ地区で縄文時代中期前葉の土坑２基を検出した。

弥生時代から古墳時代初頭の遺跡の多くは、縄文時代の遺跡の立地と類似するが、墓域は丘陵尾根部分に展開する。三枝城跡（55）では、平成18・20年度にセンターが発掘調査を実施し、土坑から弥生時代前期の柴山出村系土器の壺が出土した。赤保木遺跡では、市教委の発掘調査で弥生時代中期の竪穴建物２軒が検出され、センターの発掘調査で弥生時代中期の竪穴建物２軒と古墳時代初頭の竪穴建物４軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や櫛描波状文を施す中部高地系の土器が出土した。ウバガ平遺跡では、弥生時代中期の竪穴建物３軒を検出し、内垣内式の横羽状文甕や栗林式土器の壺、榎田タイプの石斧が出土した。野内遺跡（56）では、Ｄ地区で弥生時代後期の竪穴建物１軒、Ｂ地区で弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物３軒、Ｃ地区で古墳時代初頭の竪穴建物１軒を検出した。上切寺尾古墳群（67）では、平成27・28年度にセンターが発掘調査を実施し、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の墳墓51基を検出した。現段階で、弥生時代後期後半の墳墓は、飛騨地域における最古の墳墓である。中切上野１号古墳（２）では、令和元年度にセンターが発掘調査を実施し、１号古墳は古墳時代初頭の墳墓であることが判明した。また、調査区内で古墳時代初頭の方形周溝墓１基を検出した。

古墳時代初頭を除く古墳時代の遺跡の分布は、見晴山南東部の緩斜面と、川上川左岸と宮川との合流点付近に認められる。集落跡は野内遺跡とウバガ平遺跡で確認した。野内遺跡では、Ａ地区で５世紀代の竪穴建物を54軒、Ｂ地区で古墳時代中期から終末期の竪穴建物９軒、Ｄ地区で後期の竪穴建物１軒を検出した。ウバガ平遺跡では、前期末から後期後半の竪穴建物９軒を検出した。赤保木遺跡では、中期の竪穴建物１軒を検出した。古墳は、平成４年度に市教委が赤保木ぼた上古墳群（59～65）の５号古墳（63）の範囲確認調査[4]を行い、埋葬施設が竪穴式石室であることが判明した。冬頭大塚古墳（94）では昭和45年度に市教委が発掘調査[5]を行い、５世紀後半の２段築成の円墳であることが判明した。冬頭山崎１号古墳（90）、冬頭山崎２号古墳（91）、冬頭山崎１号横穴（92）は、平成10年度にセンターが発掘調査を実施し、冬頭山崎２号古墳は５世紀末の２段築成の円墳、冬頭山崎１号

古墳は横穴式石室を主体部とする７世紀前半の古墳、冬頭山崎１号横穴は高山盆地北東部以外で初めて発掘調査した横穴で、７世紀代のものであることが判明した。与島３号古墳（47）、与島４号古墳（48）、与島６号古墳（50）は、平成９年度にセンターが発掘調査を実施し、横穴式石室を主体部とする７世紀中葉の円墳であることが判明した。

古墳時代終わり頃から平安時代にかけては、遺跡数の半分を古窯群が占め、見量山の西麓と寿美峠を越えた国府町瓜巣に分布が集中する。ウバガ平古墳群（51）では、７世紀末から８世紀初頭と考えられる終末期の円墳４基を検出した。中切上野遺跡では、市教委の発掘調査で７世紀末～８世紀初頭の竪穴建物１軒が検出された。日焼遺跡では、古墳時代終末期から奈良時代にかけて竪穴建物35軒、掘立柱建物３棟を検出した他、仏堂と考えられる10世紀後半の礎石建物１棟を検出した。野内遺跡Ｂ地区では、８世紀前半から10世紀前半の竪穴建物45軒と掘立柱建物４棟、鍛冶関連遺構30基を検出した。また、野内遺跡Ｃ地区では、古代の水田を検出した。飛騨国分寺跡（118）が昭和61年度に市教委により範囲確認調査[6]が実施され、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鬼瓦などが出土した。飛騨国分尼寺跡（101）は、昭和63年度に市教委により範囲確認調査[7]が実施され、礎石建物が確認された。三枝城跡では、９世紀前半から10世紀前半の礎石建物を検出した。古窯跡では、平成15年度の市教委による平野１号古窯跡（23）の発掘調査[8]で８世紀前半の須恵器を生産した窯であることが判明した。また、市教委による昭和48年度の赤保木古窯跡群（33）の発掘調査[9]では、６基の窯が確認された。この内１～４号窯は瓦窯で、飛騨国分寺と飛騨国分尼寺に瓦を供給していたことが明らかとなった。赤保木８号古窯跡(26)は、平成13年度の市教委の発掘調査[10]で窯跡は確認できなかったが、10世紀初頭の灰釉陶器が出土した。

中世の遺跡は、城館跡、社寺跡、集落跡がある。平野部を見下ろす尾根上に分布するのが特徴である。三枝城跡は、平成18・20年度にセンターが発掘調査を実施し、主郭西側に二重の堀切がある山城で、寿美峠方面からの進入に対する監視・防御的な性格を持つことが判明した。冬頭城跡（93）は平成10年度にセンターが発掘調査を実施し、尾根上に簡素な切岸や削平地などの防御施設を有する山城であることが判明した。野内遺跡Ｄ地区では、12世紀後半～13世紀前半の四面庇建物２軒を検出した。

注

1）高山市教育委員会 1993『前平山稜遺跡　赤保木遺跡発掘調査報告書』

2）高山市教育委員会 1999『中切上野遺跡発掘調査報告書』

3）前掲注１

4）高山市教育委員会 1995「１　赤保木５号古墳」『高山市内遺跡発掘調査報告書』

5）高山市教育委員会 1971『冬頭大塚古墳発掘調査報告書』

6）高山市教育委員会 1988『飛騨国分寺発掘調査報告書』

7）高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺発掘調査報告書』

8）高山市教育委員会 2005「10　平野遺跡・平野１号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』

9）高山市教育委員会 1975『飛騨国分寺瓦窯発掘調査報告書』

10）高山市教育委員会 2005「４　赤保木８号古窯跡」『高山市内遺跡発掘調査報告書』

図６　周辺遺跡位置図

（国土地理院発行２万５千分の１地形図　「高山」、「町方」、「飛騨古川」、「三日町」）を使用

表２　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	中切上野遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
2	中切上野１号古墳	古墳	古墳
3	中切上野２号古墳	古墳	古墳
4	中切上野３号古墳	古墳	古墳
5	中切上野４号古墳	古墳	古墳
6	中切上野５号古墳	古墳	古墳
7	中切上野６号古墳	古墳	古墳
8	瓜巣中島古窯跡	生産遺跡	白鳳
9	瓜巣小坂古窯跡	生産遺跡	白鳳
10	わせ洞石灰窯跡	生産遺跡	近世
11	瓜巣わせ洞古窯跡	生産遺跡	奈良
12	より洞遺跡	散布地	縄文
13	瓜巣大洞１号古墳	古墳	古墳
14	瓜巣大洞１号古窯跡	生産遺跡	平安
15	瓜巣大洞２号古窯跡	生産遺跡	平安
16	後洞遺跡	散布地	縄文
17	よしま１号古窯跡	生産遺跡	平安
18	よしま２号古窯跡	生産遺跡	平安
19	よしま３号古窯跡	生産遺跡	平安
20	与島Ａ地点遺跡	散布地	縄文
21	上切平野平古墳群	古墳	古墳
22	平野遺跡	散布地	縄文
23	平野１号古窯跡	生産遺跡	平安
24	平野２号古窯跡	生産遺跡	平安
25	平野３号古窯跡	生産遺跡	平安
26	赤保木８号古窯跡	生産遺跡	奈良
27	赤保木９号古窯跡	生産遺跡	奈良
28	赤保木１０号古窯跡	生産遺跡	奈良
29	赤保木１１号古窯跡	生産遺跡	奈良
30	赤保木１２号古窯跡	生産遺跡	奈良
31	下や廿尾１号古墳	古墳	古墳
32	下や廿尾２号古墳	古墳	古墳
33	赤保木古窯跡群	生産遺跡	奈良
34	真言屋敷裏山古墳	古墳	古墳
35	赤保木７号古窯跡	生産遺跡	平安
36	赤保木遺跡	集落跡	縄文
37	ミヨガ平１号古墳	古墳	古墳
38	ミヨガ平２号古墳	古墳	古墳
39	赤保木本願寺遺跡	散布地	縄文
40	川上川左岸１号古墳	古墳	古墳
41	下之切遺跡	散布地	縄文
42	山田城跡	城館跡	室町
43	狐洞遺跡	散布地	縄文・弥生
44	打越遺跡	散布地	縄文・弥生
45	与島１号古墳	古墳	古墳
46	与島２号古墳	古墳	古墳・近世
47	与島３号古墳	古墳	古墳
48	与島４号古墳	古墳	古墳
49	与島５号古墳	古墳	古墳
50	与島６号古墳	古墳	古墳
51	ウバガ平古墳群	古墳	古墳
52	与島Ｂ地点遺跡	散布地	奈良
53	ウバガ平遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安
54	与島Ｃ地点遺跡	散布地	古代
55	三枝城跡	城館跡	弥生・古代・室町
56	野内遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
57	随緑寺裏Ａ地点遺跡	散布地	縄文
58	随緑寺裏Ｂ地点遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良
59	赤保木ぼた上１号古墳	古墳	古墳
60	赤保木ぼた上２号古墳	古墳	古墳
61	赤保木ぼた上３号古墳	古墳	古墳
62	赤保木ぼた上４号古墳	古墳	古墳
63	赤保木ぼた上５号古墳	古墳	古墳
64	赤保木ぼた上６号古墳	古墳	古墳
65	赤保木ぼた上７号古墳	古墳	古墳
66	下林遺跡	散布地	弥生
67	上切寺尾古墳群	その他の墓・古墳	弥生・古墳
68	日焼遺跡	集落跡・社寺跡	縄文・弥生・奈良・平安
69	上切（桜木）遺跡	散布地	平安
70	竹ヶ洞Ａ地点遺跡	散布地	縄文
71	竹ヶ洞Ｂ地点遺跡	散布地	縄文
72	中切城跡	城館跡	中世
73	中切前平城跡	城館跡	鎌倉・室町・安土桃山
74	中切遺跡	古墳	縄文・弥生・奈良
75	大洞尾古墳	古墳	古墳
76	中山古窯跡	生産遺跡	平安
77	鍛宮田遺跡	散布地	弥生・奈良
78	西ノ山遺跡	散布地	弥生・奈良
79	下切遺跡	散布地	縄文・弥生
80	宮野Ｂ地点遺跡	散布地	縄文・弥生
81	中切宮ヶ平遺跡	散布地	縄文・古墳
82	中切王塚古墳	古墳	古墳
83	中切日焼遺跡	散布地	縄文・奈良
84	日焼（炭焼き）古窯跡	生産遺跡	奈良
85	四十九院隆寺	社寺跡	弥生・白鳳
86	上ゲ見古墳	古墳	古墳
87	東田古墳	古墳	古墳
88	冬頭遺跡	散布地	縄文・弥生
89	流れ田古墳	古墳	古墳
90	冬頭山崎１号古墳	古墳	古墳
91	冬頭山崎２号古墳	古墳	古墳
92	冬頭山崎１号横穴	横穴墓	古墳
93	冬頭城跡	城館跡	室町
94	冬頭大塚古墳	古墳	古墳
95	下岡本遺跡	散布地	奈良・平安
96	冬頭竹田の湯遺跡	散布地	平安
97	下岡本（瀬本）遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・白鳳
98	中山城跡	城館跡	室町
99	下岡本神田遺跡	散布地	平安
100	古都遺跡	散布地	平安
101	飛鰐国分尼寺跡	社寺跡	奈良
102	恵喜寮寺跡	社寺跡	縄文・室町
103	的場遺跡	散布地	奈良
104	下切弄谷遺跡	散布地	古墳
105	下切古墳	古墳	古墳
106	三川落合遺跡	散布地	縄文
107	三川越中街道	その他の遺跡	近世
108	松本上野遺跡	散布地	縄文
109	茂島古墳	古墳	古墳
110	前平山棲遺跡	散布地	縄文・弥生
111	前平古墳	古墳	古墳
112	西ヶ洞古墳	古墳	古墳
113	前平遺跡	散布地	縄文・弥生
114	上畑遺跡	散布地	縄文
115	牧ヶ洞古墳	古墳	古墳
116	馬場古墳	古墳	古墳
117	越中街道	その他の遺跡	近世
118	飛鰐国分寺跡	社寺跡	奈良
119	松ノ前遺跡	散布地	奈良

第３節　過去の調査

前節で記したとおり、当遺跡は平成８年に高山市教育委員会によって発掘調査が行われた。この発掘調査は、飛騨東部第一開拓建設事業「飛騨東部第一開拓建設事業中切団地区域」の圃場整備に伴い実施されたものである。発掘区はＡ区からＤ区（図７）に分かれているが、調査前に遺跡範囲を確認するために遺跡全体にトレンチを入れたところ、Ａ区とＢ区では出土遺物がほとんどなく、遺構も確認されなかったため、発掘調査は実施されていない。Ｃ区とＤ区は出土遺物も多く、遺構も確認されたことから発掘調査面積約2,000㎡の発掘調査が実施された。本節では、Ｃ区とＤ区の発掘調査成果について概観する。なお、この発掘調査の詳細については『中切上野遺跡発掘調査報告書』（高山市教育委員会1999）を参照されたい。

調査で検出された主な遺構は表３のとおりである。

縄文時代早期　集石遺構２基が検出されている。集石遺構内の出土土器はないが、これらの遺構周辺で早期の土器が出土したことから早期の遺構とされている。

縄文時代前期　遺構・遺物ともにこの時期のものが最も多く確認されている。当該期の遺構は竪穴建物15軒、土坑12基、ピット253基である。竪穴建物はＣ区で14軒と多い。竪穴建物の時期は前期後半で、竪穴の大きさが４ｍ～５ｍ程度、平面形が円形及び楕円形のものが多い。炉は石囲炉１基以外、すべて地床炉である。土坑はピットよりも上端径が大きく、深さがある遺構で、Ｃ区で７基、Ｄ区で５基確認されている。ピットはＤ区で180基確認されており、Ｄ区に多い。

縄文時代中期　Ｃ区で中期前葉のピットが１基確認されている[1]。

縄文時代後期　当該期の遺構は確認されていないが、Ｃ区で後期前葉の土器が出土している。

弥生時代　当該期の遺構は確認されていないが、Ｃ区とＤ区で中期の内垣内式の土器が出土している。

飛鳥時代　Ｄ区で７世紀末葉の竪穴建物が１軒確認されているが、床面が残る程度で、形状や規模は不明瞭である。

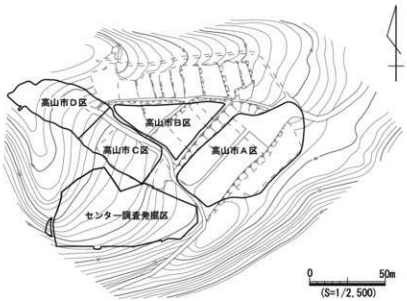


図７　高山市調査及びセンター調査の発掘区（高山市教育委員会1999『中切上野遺跡』を利用し作成）

古代以降　この時期の遺構は確認されていないが、9世紀から10世紀の灰釉陶器が出土している。遺跡周辺では灰釉陶器の蔵骨器が採集されている[2)]。

注

1）中切上野遺跡の報告書104頁の文中で縄文時代中期の遺構は確認されていないとされているが、154頁文中でP297を中期の遺構としているため、中期の遺構としてカウントした。

2）前掲注1）の報告書155頁「2　周辺墓址の遺物」で灰釉陶器の壺と壺蓋が紹介されている。

表3　高山市調査の主な検出遺構

時代	C区				D区				合計
	竪穴建物	集石遺構	土坑	ピット	竪穴建物	集石遺構	土坑	ピット	
縄文時代早期	0	0	0	0	0	2	0	0	2
縄文時代前期	14	0	7	73	1	0	5	180	280
縄文時代中期	0	0	0	1	0	0	0	0	1
飛鳥時代	0	0	0	0	1	0	0	0	1
合計	14	0	7	74	2	2	5	180	284

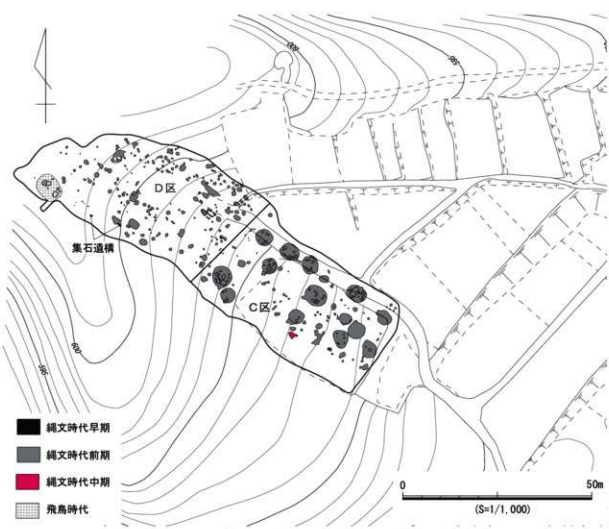


図8　高山市調査C区・D区遺構分布図（高山市教育委員会1999『中切上野遺跡』を利用し作成）

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の基本層序

発掘調査前の発掘区の土地利用状況は、山林であった。発掘区の地形は北西方向から南東方向に緩やかに下がる傾斜地で、東に下がるにつれてより緩やかになる。一方、発掘区の南側は丘陵の端部にあたるため、急傾斜になる。基本層序は、平成 27 年度に岐阜県教育委員会が実施した試掘・確認調査で確認された層序、各土層から出土した遺物、遺構の時期を検討し、今回の調査における発掘区土層を基準に設定した（図９）。以下、基本層序Ⅰ層からⅢ層までの詳細及び遺構検出面について説明する。

発掘区内の表土を一括してⅠ層とした。Ⅰ層はⅠａ層からⅠｃ層に分けた。Ⅰａ層は黒褐色のしまりや粘性がない腐植土で、発掘区のほぼ全面で確認した。Ⅰｂ層は造成土で、褐色のややしまりがあり粘性がない土で、直径１cm から 30cm の亜角礫を多く含む。ビニール片や金属片を含むことから、現代の造成土と考えられる。平成 30 年度発掘区北側で確認した。Ⅰｃ層は暗褐色や褐色の粘性やしまりがややある土である。傾斜地上方からの流出土で、発掘区全面で確認した。今回の調査では、Ⅱ層上や墳丘盛土上に堆積することを確認した。

Ⅱ層は墳丘盛土下層で確認した旧表土及び縄文時代の遺物包含層である。Ⅱ層はⅡａ層とⅡｂ層に分けた。Ⅱａ層は黒褐色でしまりや粘性がややある土で、層厚は０.２m～０.３mである。発掘区西側（基本層序１・２）や北側（基本層序８）では確認できなかったが、その他の発掘区のほぼ全面で確認した。古墳築造前の表土層で縄文時代の遺物が出土した。Ⅱｂ層は暗褐色のしまりや粘性がややある土で、層厚は０.２m～０.３mである。発掘区北側（基本層序８）では確認できなかったが、その他の発掘区のほぼ全面で確認した。縄文時代の遺物が出土した。

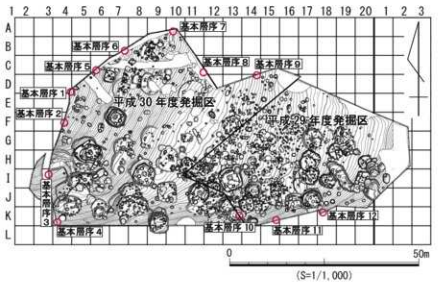


図９　基本層序の位置

Ⅲ層は基盤層で、明褐色や褐色のしまりや粘性がややある土である。この土層の上面を遺構検出面とした。

図10に、発掘区の各地点での基本層序を柱状模式図で示した。調査前は人工林で近年の人為的な地形改変はあまりなく、比較的良好にⅡ層が残存したと考えられるが、基本層序5から基本層序9にかけてⅠb層が厚く堆積する。発掘調査時においても平成30年度発掘区の北部はビニール片や金属片を含むⅢ層を掘り込む大きな溝状の攪乱があり、この周辺はⅡ層の残存状況が悪い。また、平成29年度発掘区の北側や東側壁面付近には、重機の爪跡を残す大きな攪乱があり、Ⅱ層及び遺構が消失していることから、近年の土地改変が加えられた場所と考えられる。その他の場所は、Ⅲ層の改変がないことやⅠ層・Ⅱ層が傾斜に沿って堆積することを確認したことから、近年の土地改変をあまり受けていない場所と理解できる。

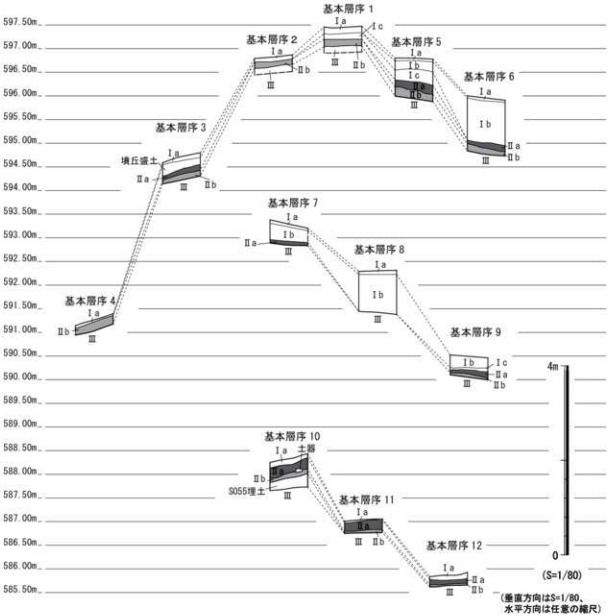


図10　基本層序

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構の概要

（１）概要

今回の調査で検出した遺構数は、表４のとおりである。縄文時代早期、縄文時代前期、縄文時代中期、弥生時代中期、弥生時代末から古墳時代、古代の６時期の遺構を確認した。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の先後関係、埋土の類似性から判断したものの、時期不明とした遺構も多い。また、遺構内から複数の時期の遺物が出土した場合は原則として新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。本報告書では、検出した遺構のうち、竪穴建物や墳墓・方形周溝墓、土坑墓はすべて掲載した。土坑や単独柱穴などは検出数が多いため、一括性の高い遺物が出土した遺構や類例の少ない遺物が出土した遺構を除いては、一覧表のみ示した。

（２）遺構の分類

報告に当たり、新たに遺構種別ごとの通番（遺構番号）を与えた。遺構の種類、遺構記号（括弧内）、分類内容は、以下のとおりである。

竪穴建物（SI）　地表を掘り下げて床面とする建物で、柱穴・炉・カマド・壁際溝・貯蔵穴・貼床など、建物を構成する要素のうち、一部又はすべてが確認できるものを本類とした。竪穴建物の床面で検出した柱穴や土坑は略号をＰとし、「SI-P●」のように表記した。また、附属する炉やカマド、壁際溝、溝、貯蔵穴は略号を用いず、「SI-炉」のように表記した。この他、竪穴建物の埋土除去後に検出した竪穴建物の掘方から外にはみ出す遺構についても、出土遺物や遺構の重複関係から竪穴建物よりも古い遺構と判断されるもの以外は竪穴建物を構成する遺構として取り扱った[1]。

墳墓・方形周溝墓（SZ）　溝によって平面形を方形に区画した遺構を本類とした。５号古墳は、溝状に掘削した掘土を利用して墳丘を構築しており、同地域の上切寺尾古墳群の「墳墓」[2]と類似することから、「墳墓」とした。５号古墳の南東側で検出した遺構（SZ２）は、傾斜地の下方を除いた部分を周溝として掘削しているが、墳丘は確認できなかった。このため、SZ２は「方形周溝墓」[3]とした。なお、周溝に囲まれた部分を「方台部」とし、方台部から検出した土坑で埋葬施設と判断したものを「主体部」と表記した。

土器埋設遺構（SJ）　土器を埋設した遺構を本類とした。

表４　検出遺構一覧表

時代	ＳＩ	ＳＺ	ＳＪ	ＳＴ	ＳＳ	ＳＤ	ＳＫ	ＳＰ	合計
縄文時代早期	0	0	0	1	0	0	0	0	1
縄文時代前期	35	0	2	30	0	2	326	108	503
縄文時代中期	20	0	1	12	0	0	89	7	129
弥生時代中期	0	0	0	1	0	0	1	0	2
弥生時代末～古墳時代	0	2	0	1	0	0	0	0	3
古代	0	0	0	0	0	0	4	0	4
不明	0	0	0	0	1	0	337	179	517
合計	55	2	3	45	1	2	757	294	1,159

土坑墓（ST）　関西縄文研究会資料[4]をもとに下記のとおり基準を設定し、これに該当するものを本類とした。

1　礫（上部配石・集石・立石・坑内配石・礫が埋土中に平面的に出土など）を用いた施設を伴う。
2　土器（完形・破片－埋土中に面的に浮上した状態や底に敷かれた状態のもの）を用いた施設を伴う。
3　1と2の複合した施設を伴う。
4　土器以外の副葬品・装飾品などを伴う。

配石遺構（SS）　1箇所に石を集めて規則的に配置した遺構で、掘方が伴わないものを本類とした。

溝状遺構（SD）　細長い平面形をもつ遺構で、上端の短軸に対して長軸が5倍以上あるものを本類とした。

土坑（SK）　上記以外の人為的な掘り込みを一括し、本類とした。

単独柱穴（SP）　柱痕跡が確認できる遺構や柱根・柱抜き取り痕・柱あたりが確認できるもの。また、これらの遺構と類似した形状や深さをもつが、規則的な配置が確認できなかったものを本類とした。

（3）遺構一覧表

検出した遺構の位置や規模などの基礎情報は、遺構の種別毎に作成した一覧表に示した。遺構の種別により一覧表の項目は異なるが、共通する基本項目は次のとおりである。

検出面　基本層序の層位名を使用し、遺構を検出した面について略号で示した。Ⅲ層上面で検出した場合「Ⅲ上」と表記した。

規模　上端及び下端での長軸長と短軸長、深さを表記し、（　）は残存長を示す。

遺構属性分類　溝状遺構や土坑や不明遺構は、以下のように表記した。

埋土　堆積状況を次のようにアルファベットと数字で表記した。

a　単層　　b1　水平堆積　　b2　中央がU字状に窪む堆積が認められるもの
b3　堆積の窪みが一方の掘方壁面に偏るもの　　b4　複数の遺構が重複した可能性があるもの
c　柱痕跡が認められるもの　　d　不明

断面形状　遺構の断面形は、下記のとおり分類して表記した。

ア：半円形（底面と壁面の境が不明瞭なもの）　　イ：方形（底面が明瞭で壁面から垂直に立ち上がるもの）　　ウ：逆三角形（壁面のみで形成され、明瞭な底面をもたないもの）　　エ：逆台形（底面が明瞭で壁面からやや開き気味に直線的に立ち上がるもの）　　オ：フラスコ状（平面の最大径が上端の平面形より大きいもの）　　カ：不定形（壁面に複数の凸凹があるもの）　　キ：不明

平面形状　上端での形状と長軸と短軸の比でAからFを表記した。

1　円形（長軸／短軸が1.2未満）　　2　楕円形（長軸／短軸が1.2以上）
3　方形（長軸／短軸が1.2未満）　　4　長方形（長軸／短軸が1.2以上）
5　不定形　　6　不明

出土遺物　以下のとおり記号化して表記した。なお、本報告書では、弥生時代末～古墳時代初頭の土器は分類上「土師器」として報告した。

J：縄文土器　Y：弥生土器　H：土師器　P：須恵器　K：灰釉陶器　T：陶磁器
S：石器・石製品類　I：金属製品

2　遺物概要

（1）概要

縄文時代から中世までの遺物が 67,282 点出土した。遺物の種類と点数は表5のとおりである。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期を検討する上で必要なものや、分類別の代表的なものを抽出して報告した。

表5　出土遺物一覧表

大別	種別	時期	接合前破片数（点）	接合後破片数割合	重量（g）	重量割合	報告書掲載数
土器類	縄文土器	早期	152	0.26%	4,035.1	1.58%	1
		前期	35,159	59.23%	418,405.6	52.69%	746
		中期	6,658	11.22%	122,078.2	41.20%	284
		不明	17,389	29.29%	55,934.2	4.53%	0
	縄文土器小計		59,358	100.00%	600,487.2	100.00%	1,031
	弥生土器・土師器		251	56.03%	8,997.0	58.33%	5
	須恵器		80	17.85%	3,491.6	22.64%	1
	灰釉陶器		111	24.78%	2,875.2	18.64%	16
	中近世陶磁器		6	1.34%	61.0	0.39%	0
	小計		448	100.00%	15,424.8	100.00%	22
土製品類			46	—	794.1	—	4
石器・石製品類			7,436	—	1,666,865.2	—	289
金属製品			1	—	136.0	—	1
合計			67,282	—	2,283,707.3	—	1,342

（2）遺物の分類

遺物の器種や時期の判断については、既存の分類や編年を参考にしたほか[5]、網谷克彦氏、泉拓良氏、岩田崇氏、大石崇史氏、鈴木康二氏、髙橋浩二氏、藤森英二氏から指導・助言をいただいた。

①土器類

縄文土器

59,358 点出土し、出土した土器の 99.3%を占める。早期から中期のものがあり、前期と中期が大部分を占める。出土量が多い前期の土器については、中津川市落合五郎遺跡で設定された土器分類[6]を参考にした。また、中期の土器については、高山市赤保木遺跡で設定された土器分類[7]を参考にした。

S群　早期の土器群

早期後葉の東海条痕文系土器群の粕畑式の深鉢1個体分を確認した。胎土に繊維が混入し、器面に条痕調整を施す。

Z群　前期の土器群

当該期では深鉢、浅鉢、鉢、ミニチュア土器を確認した。このうち、深鉢は1類から14類に細分した。その他の器種については浅鉢を15類、鉢を16類、ミニチュア土器を17類とした。

Z1群　前期前半の土器群

1類　器厚は薄く、貝殻条痕による器面調整が認められる土器。羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰ式に相当する。いずれも細片のため器形は不明であるが、口縁部がやや内湾する。

1a類　2連規則のD字形刺突文を施す土器。羽島下層Ⅱ式に相当する。

1b類　ヘラ状工具によるI字形刺突文を施す土器。北白川下層Ⅰ式に相当する。

1 c類　竹管状工具の外側でD字形刺突文を施す土器。北白川下層Ⅰa式に相当する。
1 d類　竹管状工具の内側でC字形刺突文を施す土器。北白川下層Ⅰb式に相当する。
2類　器厚は薄く、内面に指頭圧痕が認められる土器。清水ノ上Ⅱ式から上宮式に相当する。
2 a類　アナダラ属の貝殻腹縁文を施す土器。上宮式に相当する。
2 b類　先端が毛羽立ったり、二又に割れたヘラ状工具を用いた押し引き状の刺突文を施す土器。清水之上Ⅱ式に相当する。
2 c類　爪状の刺突文を施す土器。清水之上Ⅱ式に相当する。
3類　器厚は厚く、胎土に繊維を多く含む土器。黒浜式に相当する。
3 a類　コンパス文を施す。
3 b類　平行沈線文を施す。
3 c類　半截竹管による連続爪形文を施す。
4類　施文具による刺突文と集合沈線文を特徴とする土器。器厚は厚く、地文は縄文である。神ノ木式及び有尾式に相当する。
4 a類　口縁に肥厚部をもつ。
4 b類　口縁に肥厚部をもたない。
4 c類　4 a・4 b類の胴部破片。櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文で文様が構成される。
5類　口縁部に爪形・刻目連続刺突文を施す土器。2群とした清水ノ上Ⅱ式的な施文であるが、器厚は厚く、地文は縄文であることから別分類とした。堂之上Ⅰ式[8]に相当する。

Z 2群　前期後半の土器群

1類　器厚は薄く、口縁部に幅の広いC字形連続爪形文を施す土器。北白川下層Ⅱa式に相当する。
1 a類　幅広の連続爪形文を口縁と並行する方向に施す。
1 b類　幅広の連続爪形文を垂下させ施す。
2類　器厚は薄く、口縁部に幅の狭いC字連続爪形文を施す土器。北白川下層Ⅱb式に相当する。
2 a類　連続爪形文が口縁と並行方向に施す。
2 b類　連続爪形文が多様な文様図形を描く。
2 c類　2 b類の連続爪形文が省略され、平行沈線のみで施す。
3類　器厚は薄く、口縁部を中心とする部分に突帯を貼付し、素文の突帯以外に刻みや刺突や縄文を施す土器。北白川下層Ⅱc式や大麦田式に相当する。
3 a類　刻みや刺突を持つ突帯を施す。
3 a 1類　縦の短い刻みを施す。
3 a 2類　斜めのやや長い刻みを施す。
3 a 3類　半截竹管による刺突を施す。
3 b類　半截竹管による押し引きを突帯上に施す。
3 c類　突帯上に縄文を施す。
3 d類　素文の突帯を施す。
4類　器厚は薄く、口縁部を中心とする部分に突帯を貼付し、突帯上を突帯幅よりも狭い半截竹管を用いて押し引いたり、ナデ引きする土器。北白川Ⅲ式に相当する。

４ａ類　突帯上を突帯幅よりも狭い半截竹管を用いて押し引く。
４ｂ類　突帯をナデ引きする。
５類　器厚は厚く、肋骨文・幅の狭い爪形文・波状文・木葉文を施す土器。諸磯ａ式に相当する。
５ａ類　無文地に半截竹管による幅の狭い施文具による平行沈線を施す。
５ｂ類　縄文地に円形刺突を施す。
５ｃ類　半截竹管による幅の狭い施文具による平行沈線を施す。
５ｄ類　半截竹管による幅の狭い施文具による平行沈線で区画する。
５ｅ類　半截竹管による連続爪形文で文様を水平方向に施す。
５ｆ類　半截竹管による連続爪形文で区画する。
６類　器厚は厚く、幅の広い爪形文・浮線文・平行沈線を施す土器。諸磯ｂ式に相当する。
６ａ類　無文地に半截竹管による幅の広い施文具による連続爪形文を施す。
６ｂ類　ソーメン状浮線文を施文する。浮文上には斜めの刻み目が認められる。
６ｃ類　縄文地に半截竹管による施文具による平行沈線を施す。
７類　器厚は厚く、集合沈線や浮線文を施す土器。諸磯ｃ式に相当する。
７ａ類　集合沈線文を施す。
７ｂ類　集合沈線を地文としてこれに円形か短線状の浮文を貼付する。
７ｃ類　集合沈線を地文としてこれに浮線文を貼付する。
７ｄ類　集合沈線を地文としてこれにソーメン状浮線文を貼付する。
８類　前期末葉に相当する土器で結節浮線文を施す。器厚は厚く、地文に沈線文をもたないことや口縁に肥厚部をもつことから７ｃ類と分離した。
９類　前期末葉に相当する土器で集合沈線や三角印刻を施す。
９ａ類　半截竹管で集合沈線文を施す。
９ｂ類　半截竹管で集合沈線文を施文するが、この間に三角印刻する。
10類　施文具を刺突や押し引きすることで結節状沈線文を模倣する土器。
10ａ類　半截竹管で集合沈線文を施文し、その上に爪形の刺突文を連続的に施す。
10ｂ類　鋸歯状施文具を連続的に押し引くことで結節状沈線文を模倣したもの。
10ｃ類　棒状施文具の端部で刺突したもの。
11類　半截竹管状施文具による結節状沈線文を施す土器。十三菩提式に相当する。
12類　縄文のみ施す土器。縄文時代前期の遺構出土のものの他、器厚が薄いものや胎土に繊維を含むもの、羽状縄文を施すものをまとめた。
12ａ類　器厚が３～5ｍｍの薄手の土器
12ｂ類　器厚が５.１～10ｍｍで胎土中に植物繊維を含む土器
12ｃ類　器厚が５.１～10ｍｍの厚手の特徴
13類　無文の土器。縄文時代前期の遺構出土のものの他、器厚が薄いものや胎土に繊維を含むもの、条痕調整のものをまとめた。
13ａ類　器厚が３～5ｍｍの薄手の土器
13ｂ類　器厚が５.１～10ｍｍで胎土中に植物繊維を含む土器

13ｃ類　器厚が5.1～10ｍｍの厚手の土器

13ｄ類　器厚が3～5ｍｍの薄手で条痕調整が認められる土器。

14類　深鉢の底部をこの類とした。

15類　浅鉢をこの類とした。

16類　鉢をこの類とした。

17類　ミニチュア土器をこの類とした。

Ｃ群　中期の土器群

1類　東日本系の土器で、文様等によって次のように細分した。

1ａ類　結節沈線や横帯文や縦位区画文を多用する土器。中期前葉から中葉の勝坂式土器の狢沢式から井戸尻式に相当する土器で、狢沢式・新道式段階に相当するものを1ａ1類、藤内式段階に相当するものを1ａ2類、井戸尻式から曾利Ⅰ式に相当するものを1ａ3類とした。

1ｂ類　縦位条線地文と懸垂文を特徴とする土器。中期後葉の曾利式に相当する土器で、曾利Ⅱ式に相当するものを1ｂ1類、曾利Ⅲ式からⅤ式に相当するものを1ｂ2類とした。

1ｃ類　沈線及び隆線で大柄渦巻文（唐草文）を施文する土器。中期後葉の唐草文系土器に相当する土器で、唐草文系土器の第1段階に相当するものを1ｃ1類、唐草文系土器の第2段階に相当するものを1ｃ2類、唐草文系土器の第3段階に相当するものを1ｃ3類、唐草文系土器の第4段階に相当するものを1ｃ4類とした。

1ｄ類　キャリパー形の器形と剣先文付きの渦巻文を主体とする土器。中期中葉の大木式に相当する。縄文を地文とする。

1ｅ類　キャリパー形の器形と隆帯により口縁部文様帯を区画する土器。加曾利Ｅ式に相当する。縄文を地文とし垂下線を施文する。

2類　飛騨地域で出土する折衷的な土器で、文様等によって次のように細分した。

2ａ類　樽形の器形で横位にリボン状突帯文がめぐり、地文に縄文、綾杉文、条線文を施すもの。

2ｂ類　厚手で地文に縄文を施し、唐草文系土器の渦巻文などの隆帯を貼り付けるモチーフに似た文様を持つもの、折り返し口縁など唐草文系土器の特徴があるが地文に縄文を施すものがある。

2ｃ類　刻隆帯や隆帯に沿う押引、横位隆帯など文様は北陸系だが、綾杉文を施すなど、形式が折衷している要素のあるもの。

3類　北陸系の土器で、文様等によって次のように細分した。

3ａ類　半截竹管状工具により並行沈線文や蓮華文を施文する土器。中期前葉の新保・新崎式に相当する土器で、新保・新崎式の第2様式から第4様式のものを3ａ1類、第5様式から7様式のものを3ａ2類とした。

3ｂ類　器面を斜行する渦巻をもつ基本隆帯を主文様とし、それに沿って半截竹管文を曲直線で器面全体を埋める土器。中期中葉の上山田・天神山式に相当する。上山田・天神山式の第1段階・第2段階のものを3ｂ1類、第3段階・第4段階のものを3ｂ2類、第5段階のものを3ｂ3類とした。

3ｃ類　沈線による工字状文を主体とする土器。中期後葉の串田新式に相当する。

4類　東海系の土器で、文様等によって次のように細分した。

4a類　口縁部に連続爪形文を加えた数条の隆帯を巡らす土器。北裏C式から北屋敷式に相当する。

4b類　キャリパー形の器形と撚糸の地文とし、口縁部直下に横位の爪形文や隆起線、以下には隆帯により連続孤状文を施す土器。中富式から神明式に相当する。

5類　関西系の船元・里木式土器様式に相当するものをこの類とした。さらに、文様等によって次のように細分した。

5a類　器厚の薄く、口縁部と頸部の括れが明瞭である。撚りの粗く細い縄文と幅の広い爪形文を多用する土器。船元Ⅰ式に相当する。

5b類　5a類より器厚は厚く、口縁部と頸部の括れは不明瞭で緩やかな土器。船元Ⅱ式に相当する。

5c類　半截竹管状工具による平行沈線文を施す土器。船元Ⅲ式に相当する。

5d類　キャリパー形の器形で口縁部と胴部に区画された文様帯をもつ土器。里木Ⅱ式に相当する。

5e類　縄文、撚糸文を施さないもの。東海系の里木Ⅱ式に相当する。

6類　ミニチュア土器をこの類とした。

7類　地文が縄文のもの。縄文時代中期の遺構から出土したものの他、隆帯・沈線で中期に属すると判別できるものをまとめた。

8類　地文が無文のもの。縄文時代中期の遺構から出土したものの他、隆帯・沈線で中期に属すると判別できるものをまとめた。

9類　小破片や底部など、土器型式が判断できないものをこの類とした。

10類　浅鉢をこの類とした。

11類　台坏鉢をこの類とした。

12類　有孔鍔付土器をこの類とした。

弥生土器

弥生土器は中期のものが出土した。沈線による横羽状文の甕（945～947）が3個体分ST15から出土した。

土師器

古墳時代の短頸壺の口縁部1個体分（948）がSZ1－周溝から出土した。

須恵器

ST29から蓋（951）、Ⅱ層から甕1点と無台坏2点が出土した。細片のため、詳細時期は不明である。

灰釉陶器

発掘区南東側のSK333～SK336で有台碗・壺が出土した。折戸53号窯式から百代寺窯式に並行する。

②土製品類

土偶

Ⅱ層から縄文時代中期の土偶（1236）が1点出土した。

装飾品

ST14から勾玉形の首飾り（230）が1点出土した。

③石器類

器種毎の出土点数と器種別石材を表6に示す。図示した遺物は、遺構出土のものを中心に抽出した。

石鏃

鋭利な先端部を柄に装着するための基部を打ち欠きによって作出した小型の石器。

基部の形態によって4分類し、さらに数の多い1類を基部の抉りの形態からa～eに細分した（図11）。なお、石鏃一覧表（表102）には側縁部や脚部の形状、欠損部位についても、図12・13に基づいて一覧表に記載した。また、素材となった剥片の剥離面が残る部位を、片面に残る-1、両面に残る-2、なし-3と記載した。

1a類　基部の抉りが丸く浅い（0.3cm未満）もの。
1b類　基部の抉りが丸くやや深い（0.3cm以上）もの。
1c類　基部の抉りが「く」字状の浅い（0.3cm未満）もの。
1d類　基部の抉りが「く」字状の深い（0.3cm以上）もの。
1e類　基部の抉りが「U」字状のもの。
2類　基部に抉りがなく、直線的かやや外湾するもの。
3類　剥離が粗いことから、石鏃未完成品と思われるもの。
4類　基部を欠損しており、分類できないもの。

図11　石鏃の基部による分類模式図

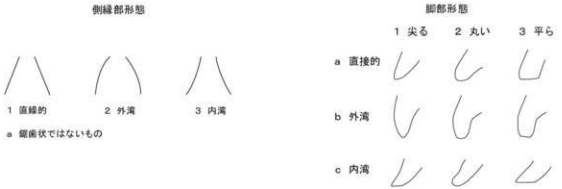


図12　石鏃の側縁と脚部形態分類模式図

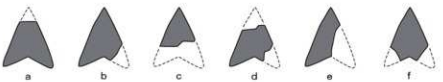


図13　石鏃欠損部位分類模式図

石錐

鋭利で細い先端部を作り出した石器。錐部と基部の形状により以下のように分類した。

１類　不定型な剥離を素材とし、その一端に簡単な調整を加えて、短い錐部を作り出したもの。なお、一部調整剥離というよりも微細な剥離痕というべきものも含む。

２類　素材となる剥片の側辺に調整を加えて錐部を作り出すことにより、平面形が概ね三角形若しくは菱形となり、錐部と基部との境が不明瞭なもの。

３類　素材となる剥片のほぼ全周に調整を加えて、細身の棒状になるもの。

４類　素材となる剥片の側辺に調整を加えて、錐部を作り出し、基部との境が明瞭なもの。

石匙

素材剥片の一部に２か所から抉り状の剥離を施すことによって、つまみ状の小突起を形成し、縁辺部に連続した剥離を施して、刃部を作り出した石器。

スクレイパー

素材剥片の縁辺部に連続した剥離を施して、刃部を作り出した石器。ただし、連続した剥離が認められても 1/2 以上の欠損があると想定されたものは、便宜的に調整剥離を施す破片（ＲＦ）に含めた。刃部の位置や形状により以下のように分類した。

１類　素材剥片の側辺に刃部を１つ作り出すもので、刃部の形状により ａ～ｂに細分した。

１ａ類　刃部が直線的なもの（直刃）。

１ｂ類　刃部が外彎するもの（円刃）。

２類　素材剥片の末端辺若しくは基辺に刃部を作り出すもので、素材剥片や刃部の形状により ａとｂに細分した。

２ａ類　縦長剥片を用い、側辺にも刃部を作り出すもの。

２ｂ類　縦長剥片を用いたもの。

３類　素材剥片の両側辺、又は末端辺と基部に刃部を作り出すもので、両側辺の位置関係により ａとｂに細分した。

３ａ類　刃部が個々に分離したもの。

３ｂ類　両側辺が末端で先端を形成するもの。

４類　素材剥片の側辺に、抉り状の刃部を作り出すもので、他の刃部を併せもつか否かで ａとｂに細分した。

４ａ類　抉り状の刃部のみをもつもの。

４ｂ類　抉り状の刃部と１類に相当する刃部を併せもつもの。

楔形石器

剥片の相対する二縁辺に、潰れ状あるいは階段状の剥離痕が発達する石器。

打製石斧

略長方形の形態で、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部を持つ石器。刃部は長軸の両端にある場合もある。この中には、打製石斧片と思われる小片についても点数に加えている。平面形態から以下のように分類した。

１類　両側縁がほぼ平行するもので、いわゆる短冊形のもの。

2類　両側縁が基部に向かって収束するもので、いわゆる撥形のもの。刃部が最大幅となる。

3類　破損のため平面形態が不明なものや打製石斧の破片と判断したもの。

なお、欠損部位については図14に基づいて、刃部形態・刃部使用痕については以下のように記号化し、基部装着痕・自然面についてはその有無を一覧表（表109）に記載した。

刃部形態

1　平らなもの（直刃）。

2　外湾するもの（円刃）。

3　中心軸に対して傾くもの（偏刃）。

刃部使用痕

磨耗

1　磨耗が確認できるもので、磨耗の程度や範囲によって次のように細分した。

1a類　表裏面や両側面に程度や範囲の差がないもの。

1b類　表裏面で程度や範囲に差があるもの。

2　磨耗を確認できないもの。

刃こぼれ状の剥離

1　刃部の調整剥離とは異なり、刃こぼれと判断したもので、その位置により次のように細分した。

1a類　刃部中央や全体的に認められるもの。

1b類　側面寄りに位置するもの。

2　刃こぼれ状の剥離を確認できないもの。

線状痕

1　線状痕が確認できるもので、刃部に対する方向で次のように細分した。

1a類　刃部と直行する方向（長軸に平行）に確認できるもの。

1b類　刃部に斜行する方向に確認できるもの。

磨製石斧

略長方形の形態で、刃部を研磨により作り出した石器。刃部形態、欠損部位。刃部の刃こぼれ状の剥離は打製石斧の刃部形態・欠損部位・刃部使用痕にしたがって、一覧表（表110・111）に記載した。

図14　打製石斧欠損部位模式図

石核

素材剥片を剥離した残核を総称して石核とした。この中には残核をスクレイパーなどに転用したものは含めていない。

調整剥離を施す剥片（ＲＦ）

素材剥片の縁辺部に二次加工を施す石器のうち、その加工が不連続な剥離や部分的な剥離であることからスクレイパーには含めなかったものを、調整剥離を施す剥片（ＲＦ）とした。

微細な剥離痕を有する剥片（ＭＦ）

縁辺を刃部として使用した結果刃こぼれ状の微細な剥離痕が生じたものと、偶発的に生じたものを区別することはできないため、微細な剥離痕を有する剥片（ＭＦ）とした。なお、ＭＦの剥離痕は、スクレイパーの刃部で観察できる連続した剥離が２㎜程度の長さをもつことから、便宜的に２㎜未満の長さのものとした。

石錘

楕円形や細長い小型の自然礫の両端に紐状のものを掛けるための抉りを作り出した石器。両端を打ち欠く打欠石錘と両端を擦って溝状の切目を入れる切目石錘がある。一覧表に記載した計測部位は、渡辺誠氏の提唱（渡辺ほか1985）を参考とした（図15）。

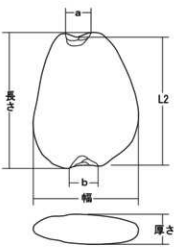


図15　石錘計測部位

磨石・敲石類

握り拳大から手の平大の大きさで、楕円形の川原石を用い、表面に磨痕や敲打痕などが観察できる石器。磨痕と敲打痕が混在する石器が多いことから、両者を含めて磨石・敲石類とした。磨石・敲石類は図16のように長さ（ａ）と幅（ｂ）の比（ｂ／ａ）、幅（ｂ）と厚さ（ｃ）の比（ｃ／ｂ）により１～４類に分けた。さらに使用痕（磨痕・敲打痕）の組み合わせと位置によって、以下のように分類した。

１群　球状の礫。長さ（ａ）と幅（ｂ）の比（ｂ／ａ）が２／３以上、幅（ｂ）と厚さ（ｃ）の比（ｃ／ｂ）が２／３以上のもの。

２群　円盤状の礫。長さ（ａ）と幅（ｂ）の比（ｂ／ａ）が２／３以上、幅（ｂ）と厚さ（ｃ）の比（ｃ／ｂ）が２／３未満のもの。

３群　小判状の礫。長さ（ａ）と幅（ｂ）の比（ｂ／ａ）が２／３未満、幅（ｂ）と厚さ（ｃ）の比（ｃ／ｂ）が２／３以上のもの。

４群　棒状の礫。長さ（ａ）と幅（ｂ）の比（ｂ／ａ）が２／３未満、幅（ｂ）と厚さ（ｃ）の比（ｃ／ｂ）が２／３未満のもの。

使用痕（磨痕・敲打痕）の組み合わせ

１類　磨痕だけが観察できるもの。

２類　敲打痕だけが観察できるもの。

３類　磨痕・敲打痕が観察できるもの。

使用痕（磨痕・敲打痕）の位置

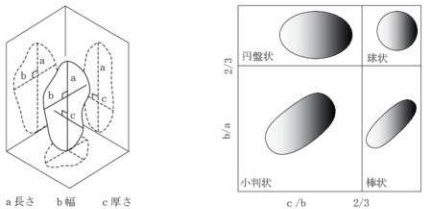


図16　磨石・敲石類の形状分類

a類　平坦面のみに使用痕が観察できるもの。

b類　側面のみに使用痕が観察できるもの。

c類　平坦面と側面に使用痕が観察できるもの。

なお、平坦面と側面の使用痕については、以下のように記号化して一覧表（表114～116）に記載した。

a　磨痕や摩滅による平滑な面、あるいは平坦な面を形成しているもの。

b1　粗い敲打の集中による凹みが平坦面や側面の中央部分に1ケ所のもの。

b2　粗い敲打の集中による凹みが片寄った位置にあるもの。

b3　粗い敲打の集中による凹みが平坦面や側面の中央部分で2つ以上重なるもの。

b4　粗い敲打の集中による凹みが2つ以上離れてあるもの。

b5　粗い敲打痕が散在するもの。

b6　粗い敲打痕が集中して面を形成するもの。

c　回転工具による漏斗状の凹みがあるもの。

石皿・台石

手の平大よりも大きい川原石の平坦面やくぼみのある面に、磨痕や敲打痕が認められる石器。平坦面と側面で確認できた使用痕は、磨石・敲石類の使用痕と同じ記号を一覧表（表117）に記載した。

砥石

平滑な面に磨痕や擦痕が明瞭に残る石器。この中には元々石皿として機能していた可能性があるものもある。また、砥面に敲打痕が確認できるものもあるが、砥面をもつものはすべて砥石とした。

石製品

玦状耳飾4点、管玉1点、丸玉2点、臼玉2点、玉類1点、玉類未製品1点が出土した。

剥片類

剥離作業によって生じた剥片や砕片のうち、二次加工や微細な剥離痕が確認できなかったもの。

④金属製品

鉄刀（952）が土坑墓（ST29）から1点出土した。

（3）遺物観察表

図示した遺物の出土位置や大きさなど基礎的な情報は、種類別に遺物観察表・一覧表に示した。遺

表6　器種別石材一覧表

出土点数 器種内石材比率%	石鏃	石錐	石匙	スクレイパー	楔形石器	打製石斧	磨製石斧	石核	RF	MF	打欠石錘	磨石・敲石類	石皿・台石	玉類	石製品	砥石	剥片類	合計点数 石材比率%
黒曜石	14	2	2	3				28	32	36							218	335
	4.4	1.5	1.0	1.5				24.1	4.2	8.1							6.8	4.5
チャート	39	34	58	59	6			24	130	90							365	805
	12.3	25.6	28.9	29.2	26.1			20.7	17.0	20.1							11.4	10.8
下呂石	255	92	118	121	16			42	556	298							2,398	3,896
	80.2	69.2	58.1	59.8	69.6			36.2	72.7	66.8							74.9	52.4
サヌカイト	1		6					1									4	12
	0.3		3.0					0.9									0.1	0.2
玉髄	8	4	2	7	1			20	29	18							138	227
	2.5	3.0	1.0	3.5	4.3			17.2	3.8	4.0							4.3	3.1
頁岩		1	9	3					3	1							7	24
		0.7	4.5	1.5					0.4	0.2							0.2	0.3
流紋岩			1															1
			0.5															0.0
安山岩				1								28	21		1		2	53
				0.5								2.2	9.9	33.3			0.1	0.7
玄武岩															1		13	14
														33.3			0.4	0.2
花崗岩									1		1							2
									0.1		0.4							0.1
緑色片岩						111	4	1	5	2	14						10	147
						69.4	5.5	0.9	0.7	0.4	5.0						0.3	2.0
透閃石岩							63							4				67
							86.3							33.3				0.9
蛇紋岩							2											2
							2.7											0.0
泥岩			1			20			2	2	15			1			30	71
			0.5			12.5			0.3	0.4	5.3			8.3			0.9	1.0
砂岩				1		12	1		1		32	25	9			12	9	102
				0.5		7.5	1.4		0.1		11.4	2.0	4.2			66.7	0.3	1.4
凝灰岩	1		5	7		17	3		5		219	1,216	182	2		6	5	1,668
	0.3		2.5	3.5		10.6	4.1		0.7		77.9	95.8	85.9	16.7		33.3	0.2	22.4
瑪瑙														4				4
														33.3				0.1
翡翠														1				1
														8.3				0.0
石英															1		3	4
															33.3		0.1	0.1
点数合計	318	133	202	202	23	160	73	116	764	447	281	1,269	212	12	3	18	3,203	7,436

物の種別により観察表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置　遺物が出土したグリッド若しくは遺構を記入した。

層位　遺構以外の遺物包含層などから出土した場合は基本層序を、遺構から出土した場合は人口層位（a・b・c）若しくは分層した土層番号（1・2・3）をアルファベットや数字で記入した。

大きさ　「口径」・「器高」・「長さ」・「幅」・「厚さ」の単位は㎝である。また石器類の質量の単位はgである。土器の口径・底径・器高のうち、（　）で示した大きさは、図上復元した際の数値である。石器・石製品の「長さ」・「幅」・「厚さ」のうち、（　）で示した大きさは、欠損した現存値である。

石材　石器・石製品については、肉眼観察により石材を判断した。

注

1）縄文時代前期の竪穴建物では、飛騨地域や富山県において竪穴建物の埋土除去後に検出した遺構で掘方よりも外側にはみ出す柱穴や貯蔵穴などの事例が、以下の文献で紹介されている。本報告書においても、掘方よりも外側にはみ出す遺構を竪穴建物の垂木尻よりも内側の遺構と捉え、竪穴建物に付属する遺構として取り扱う。

三島誠 2017「飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物について」『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第３号

金三津道子 2015「第Ⅳ章総括　１平岡遺跡の集落構造」『平岡遺跡』、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

2）岐阜県文化財保護センター2020『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 154 集）

3）類例として、中切上野１号古墳で確認した方形周溝墓（SZ２）がある。

岐阜県文化財保護センター2021『中切上野１号古墳』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第 157 集）

4）春日井恒 2000「岐阜県の縄文時代埋葬関係遺構概要」『関西の縄文墓地　－葬り・葬られた関西縄文人－』、関西縄文研究会

5）参考にした文献は以下のとおりである。

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史　別編　古代　猿投系』、愛知県

赤塚次郎 2005「第１章第３節　時期区分」『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』、愛知県

我孫子昭二 1988「勝坂式土器様式」『縄文土器大観　第２巻　中期Ⅰ』、小学館

網谷克彦 1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観　第１巻　草創期　早期　前期』、小学館

泉拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

植田真 1988「藤沢式土器様式」『縄文土器大観　第２巻　中期Ⅰ』、小学館

加藤三千雄 2008「新保・新崎式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

櫛原功一 2008「曽利式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

細纐茂・高橋健太郎 2008「中富式・神明式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

下平博行 2008「神ノ木式・有尾式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

鈴木康二 2008「北白川下層式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

関根慎二 2008「諸磯式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

高橋浩二 2000「古墳出現期における越中の土器様相－弥生時代後期から古墳時代前期前半土器の編年的位置付け」『庄内式土器研究』ＸＸⅡ、庄内式土器研究会

谷口康浩 1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観　第１巻　草創期　早期　前期』、小学館

末木健 1988「曽利式土器様式」『縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ』、小学館

三上徹也 1988「唐草文系土器様式」『縄文土器大観　第３巻　中期Ⅱ』、小学館

山下勝利 2008「清水ノ上Ⅱ式・上の坊式土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

吉川金利 2008「唐草文系土器」『総覧　縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

渡邊博人 2008「美濃須恵窯について」『日本考古学 2008 愛知県大会研究発表資料集』、日本考古学協会 2008 年度愛知大会実行委員会

6）河野典夫 1988「第５章第１節　縄文土器」『落合五郎遺跡発掘調査報告書』、中津川市教育委員会

7）岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『赤保木遺跡』（岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書第 105 集）

8）戸田哲也ほか 1997『堂之上遺跡』、久々野町教育委員会。報告書第Ⅱ章の「第 18 号住居址」の文中で「堂之上Ｚ式土器は口縁部の清水ノ上Ⅱ式的な施文を特徴とし、神之木式的器形と縄文施文を合わせ持つ折衷的な地域様相を示す」土器として説明している。

第３節　縄文時代の遺構・遺物

１　縄文時代早期の遺構

縄文時代早期の遺構として、土坑墓１基を確認した。

（１）土坑墓

ST33（図 17・18）

検出状況　AI５・AJ５グリッド、SI42 床面で検出した。SI42-貯蔵穴と重複関係があり、SI42-貯蔵穴より古い。平面形は、西辺が直線的で不定な形状である。

礫・遺物出土状況　埋土は暗褐色土が４層堆積するが、１・２層は別の遺構であった可能性がある。３層は土器内の堆積土である。２・４層には炭化物、１～４層には褐色土ブロックを含む。縄文土器の深鉢（１）１個体分が完形の状態で口縁部を下にしてやや斜位に設置されていた。その他、縄文土器・石器が１・２層に散在した状態で出土した。

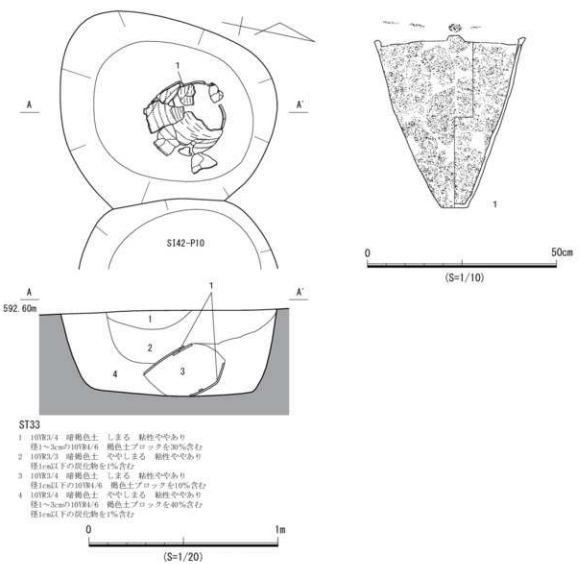


図 17　ST33 遺構図

出土遺物　1はS群で東海系の粕畑式土器の深鉢である。胎土中に長石や繊維を含む。器厚は5㎜程度である。内外面にアナダラ属の貝殻による横方向の条痕調整を密に施す。口縁部の外面に縄文を施す。口唇部に刻みを施し、盃状突起が付く。口縁部は部分的に欠損しているが、残存する3つの盃状突起の位置から、本来は4単位の波長部に盃状突起が付くものと考えられる。胴部から底部にかけて窄まる砲弾型に近い形状である。底部は小型の平底になる。口縁部から胴部にかけての外面に斜め方向の短い刺突による横方向の列点文を4条施す。

時期　遺構の重複関係は、前期後葉のSI42-貯蔵穴よりも古い。1から早期後半の遺構と判断した。

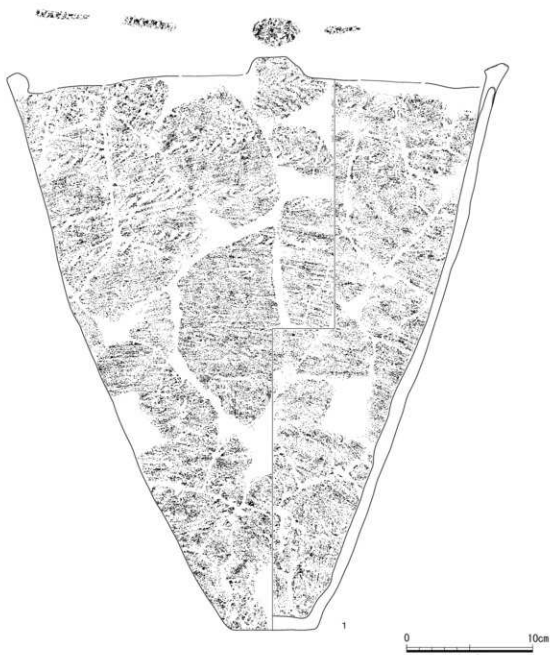


図18　ST33出土遺物

２　縄文時代前期の遺構

竪穴建物 35 軒、土器埋設遺構２基、溝状遺構２条、土坑墓 30 基、土坑 326 基、単独柱穴 108 基を確認した。

（１）竪穴建物

SI１（図 19～図 22）

検出状況　AF18～AG19 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。南側で SI２・SI３と重複関係があり、SI２・SI３よりも新しい。また、平面形は北辺と東辺は丸みをもつが、西辺と南辺は直線的であるため不定な形状である。検出時に SI１のプランの一部を別遺構と考え、先行して掘削してしまったため、南部の２層と考えられる土層の記録を残すことができなかった。

埋土　暗褐色土が４層堆積する。埋土中に褐色土ブロックやにぶい赤褐色土ブロックや炭化物を含む。北壁際に４層、中央から南部にかけて１層から３層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で 0.13m である。

床面　ほぼ平滑であるが、東方向に傾斜する。建物の中央に貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 31 基、壁際溝１条である。竪穴建物の掘方にかかる P12・P26・P28・P30 はすり鉢状の竪穴建物壁面に掘削され、上面が削平されたと考えられる。ほぼ等間隔で環状に配置される P１・P３・P11・P15・P30 を SI１の主柱穴としたが、P５～P７、P16・P20・P21・P24・P27・P30 では柱痕跡を確認した。壁際溝は北西部で１条確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　確認できなかったが、床面中央で検出した P23 の埋土１層に焼土ブロックを含むことから、炉との関係が考えられる。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　竪穴建物の埋土ａ・１・２層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。土器は前期中葉から後葉のものが出土したが、主体は後葉のもので中葉のものと比較して破片が大きい。

出土遺物　２～８は前期中葉から後葉の縄文土器である。２・３はＺ１群１ａ類である。２は内外面を貝殻による条痕調整後、外面に「３」字状の刺突文を施す。口縁部の内面は肥厚する。３は内外面を貝殻による条痕調整後、外面に「３」字状の刺突文を密に施す。４はＺ２群２ｃ類で外面に半截竹管状施文具による平行沈線を施す。外面に赤彩が認められる。５はＺ２群３ｃ類で外面に１条の突帯とその上に縄文を施す。口縁部はやや内湾し、内面に指頭厚痕が残る。６はＺ２群６ａ類で外面に口縁部と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文を３条、内面に条痕調整を施す。口縁端部に半截竹管状施文具による刺突文が認められる。７・８はＺ２群 15 類である。７は口縁端部が折れ曲がり、この屈曲部外面に沈線を施し、沈線内に多孔円孔が巡る。沈線内に赤彩が認められる。８は口縁端部が短く折れ曲がり、この屈曲部外面に沈線を施す。口縁部外面に半截竹管状施文具より平行沈線で木葉文を施す。

時期　遺構の重複関係は前期後葉以前の SI２・SI３よりも新しい。竪穴建物の埋土から出土した土器は、前期中葉から後葉のもので、主体は後葉である。また、P４から前期後葉の浅鉢（７）が出土したことから、前期後葉の竪穴建物と判断した。

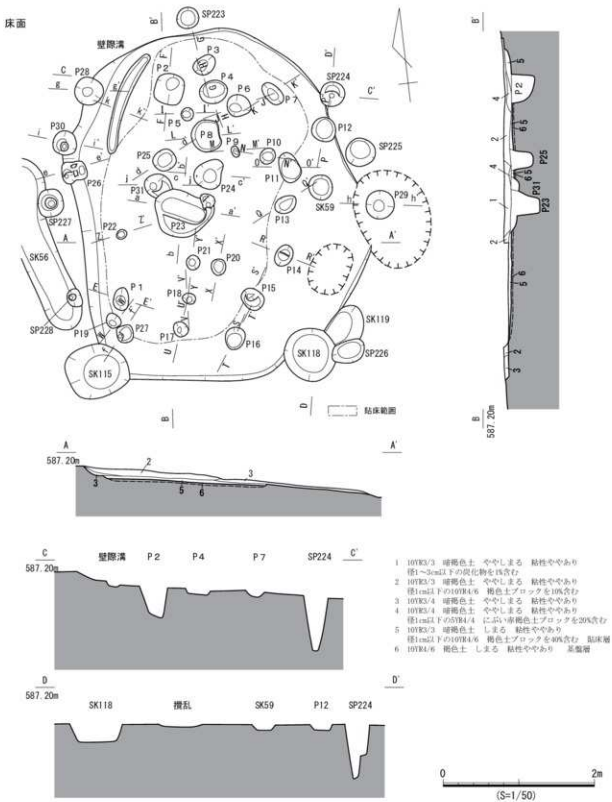

床面
壁際溝
SP223
SP224
SP225
SP227
SP228
SK56
SK115
SK118
SK119
SK59
SP226
P1
P2
P3
P4
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
貼床範囲
587.20m
壁際溝
SK118
撹乱
SK59
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　φ1～3cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　φ1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを10%含む
3　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
4　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　φ1cm以下の5YR4/4　にぶい赤褐色土ブロックを20%含む
5　10YR3/3　暗褐色土　しまる　粘性ややあり
　φ1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む　貼床層
6　10YR4/6　褐色土　しまる　粘性ややあり　基盤層
0
2m
(S=1/50)

図19　SI1遺構図（1）

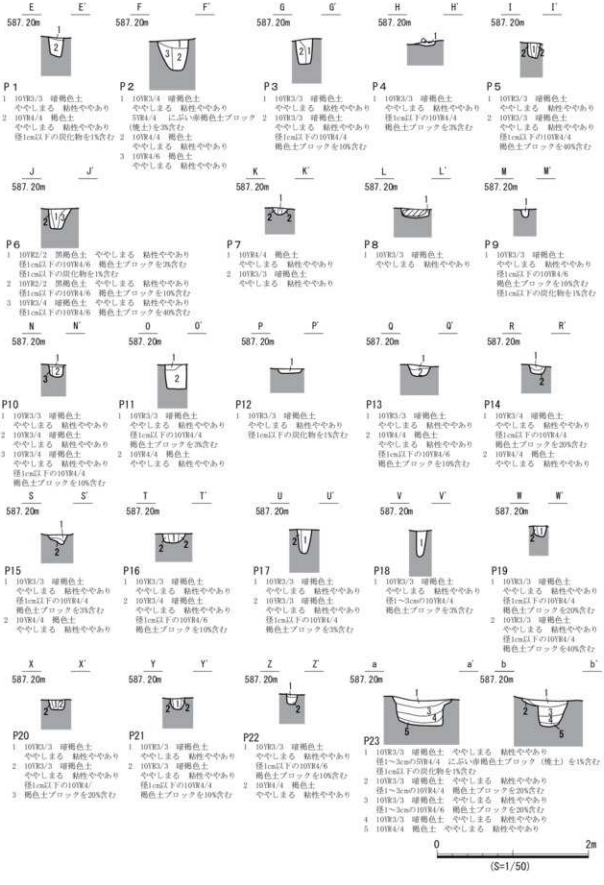

E E' 587.20m
P1
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の炭化物を1%含む
F F' 587.20m
P2
1 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 5YR4/4 にぶい赤褐色ブロック（地土）を3%含む
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
3 10YR4/6 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
G G' 587.20m
P3
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを10%含む
H H' 587.20m
P4
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを3%含む
I I' 587.20m
P5
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを40%含む
J J' 587.20m
P6
1 10YR2/2 黒褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを3%含む 径1cm以下の炭化物を1%含む
2 10YR2/2 黒褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む
3 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを40%含む
K K' 587.20m
P7
1 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
L L' 587.20m
P8
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
M M' 587.20m
P9
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む 径1cm以下の炭化物を1%含む
N N' 587.20m
P10
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
3 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを10%含む
O O' 587.20m
P11
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを3%含む
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
P P' 587.20m
P12
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の炭化物を1%含む
Q Q' 587.20m
P13
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む
R R' 587.20m
P14
1 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを20%含む
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
S S' 587.20m
P15
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを3%含む
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
T T' 587.20m
P16
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/4 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む
U U' 587.20m
P17
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを3%含む
V V' 587.20m
P18
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1～2cmの10YR4/4 褐色土ブロックを3%含む
W W' 587.20m
P19
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを20%含む
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを40%含む
X X' 587.20m
P20
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/
3 褐色土ブロックを20%含む
Y Y' 587.20m
P21
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/4 褐色土ブロックを10%含む
Z Z' 587.20m
P22
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを10%含む
2 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
a a' 587.20m
b b' 587.20m
P23
1 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1～3cmの5YR4/4 にぶい赤褐色土ブロック（地土）を1%含む 径1cm以下の炭化物を1%含む
2 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1～3cmの10YR4/4 褐色土ブロックを20%含む
3 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり 径1～3cmの10YR4/6 褐色土ブロックを20%含む
4 10YR3/3 暗褐色土 やや しまる 粘性やや あり
5 10YR4/4 褐色土 やや しまる 粘性やや あり
0 2m
(S=1/50)

図20　SI1遺構図（2）

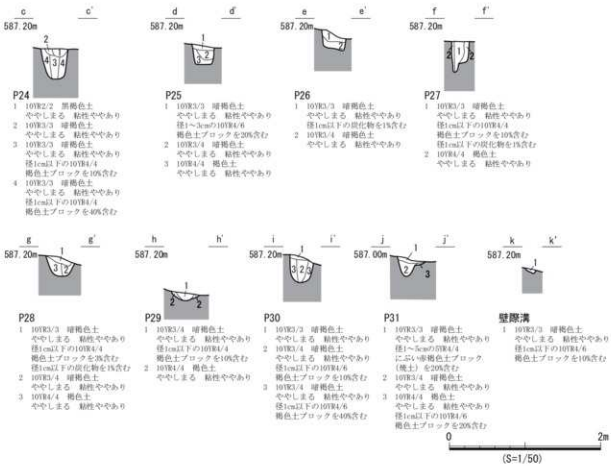


図 21　SI１遺構図（３）

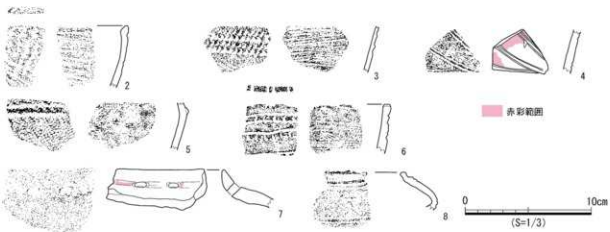


図 22　SI１出土遺物

SI２（図 23～図 26）

検出状況　AG18～AH18 グリッド、Ⅲ層上面及び SI３埋土上面で検出した。北側で SI１、西側で SI３、南側で SK123 と重複関係があり、SI１・SK123 よりも古く、SI３よりも新しい。平面形は各辺が直線的な方形に近い形状をとる。

埋土　黒褐色土と暗褐色土が３層堆積する。中央が窪むように１層が堆積し、壁際に２層がやや傾斜して堆積する。１層以外の埋土には褐色土ブロックを含む。また、２層の埋土に炭化物を含む。

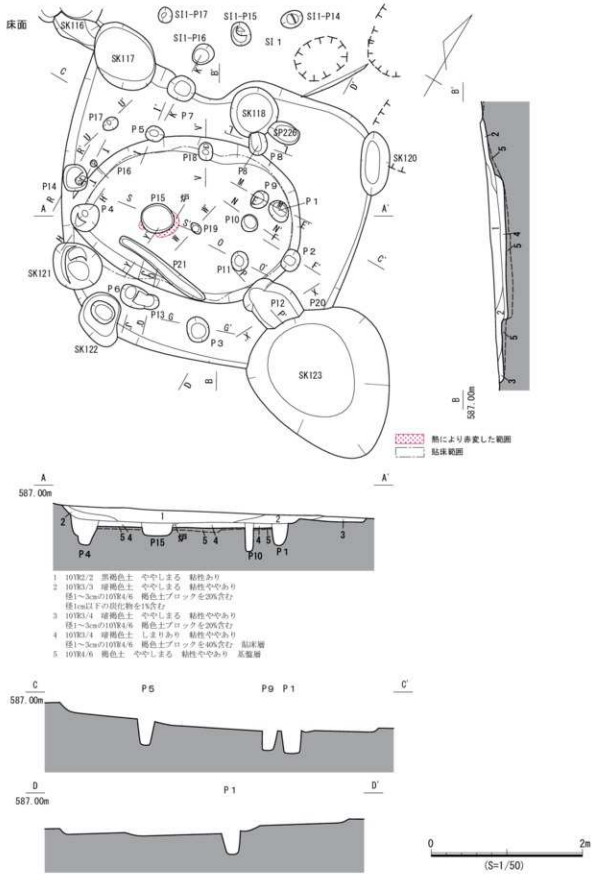

床面
SK116
SI1-P17
SI1-P15
SI1-P14
SI1-P16
SI 1
SK117
SK118
SP226
SK120
SK121
SK122
SK123
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
587.00m
熱により赤変した範囲
貼床範囲
1　10YR2/2　黒褐色土　ややしまる　粘性あり
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
3　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
4　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり
径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む　掘方埋
5　10YR4/6　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　基盤層
0
2m
(S=1/50)

図23　SI2遺構図（１）

壁　Ⅲ層及びSI３の埋土を掘り込む。壁面は緩やかに立ち上がる。壁の残存高は最大で0.28mである。

床面　竪穴中央が皿状に窪み、この部分に貼床（４層）がある。貼床は暗褐色土が主体で、褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑21基、炉１基である。竪穴内の位置関係からＰ１～Ｐ６をSI２の主柱穴としたが、Ｐ１～Ｐ４・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ18では柱痕跡を確認した。また、Ｐ９・Ｐ18ではＰ１とＰ５を結ぶライン上にあることから、建物の上部構造に関連する柱穴の可能性がある。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　建物床面ほぼ中央部西寄りで炉を検出した。Ｐ15に切られるため、形状は不明である。焼土は堆積しているのではなく、熱により床面が赤変したものであり、掘り込みはない。Ｐ15は炉よりも新しい掘り込みであるが、埋土に焼土ブロックがなく、底面に熱による赤変がないため、性格は不明である。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　ａ～ｄ層・１・２層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。土器は前期中葉から後葉のものが出土したが、主体は後葉のもので中葉のものより破片は大きい。

出土遺物　９～18は前期中葉から後葉の土器である。９はＺ１群１ｃ類で外面に羽状縄文を施し、その上に爪形文を施す。10はＺ１群２ａ類で外面に細かなジグザクの腹縁をもつ貝殻による貝殻腹縁文を施す。口唇部には棒状施文具による刺突文を施す。内面に指頭圧痕が残る。11はＺ１群３ｂ類で外面に葉脈状の平行沈線文を施す。12はＺ２群２ａ類で上部外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を５条施す。胴部が括れる部分の直下に半截竹管状施文具による刺突文を２条施す。胴部の下端にはわずかに地文としての縄文を施す。内面に指頭圧痕が残る。13はＺ２群２ｂ類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で三角形のモチーフを描く。連続爪形文以外の部分に赤彩が認められる。14はＺ２群３ａ１類で外面に細い突帯を貼り付け、その上を先端の細い施文具で刻む。15はＺ２群３ｄ類で外面に断面が三角形に近い細い突帯を貼り付ける。16はＺ２群12ａ類で外面に羽状縄文を施す。内面に指頭圧痕が残る。12と接合関係はないが、出土位置や層位が同じであることや胎土や器厚が類似することから同一個体の可能性がある。17はＺ２群12ｃ類で外面に羽状縄文を施す。18はＺ２群14類で底部外面端部が突出する。

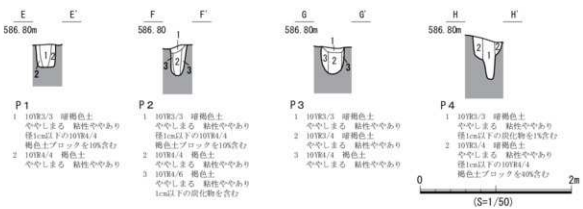


図24　SI２遺構図（２）

時期　重複関係はSI３よりも新しく、SI１よりも古い。竪穴建物の埋土から前期中葉から後葉のものが出土したが、主体は後葉のものである。SI１は前期後葉、SI３は前期後葉以前であることから、前期後葉以前と判断した。

図25　SI２遺構図（３）

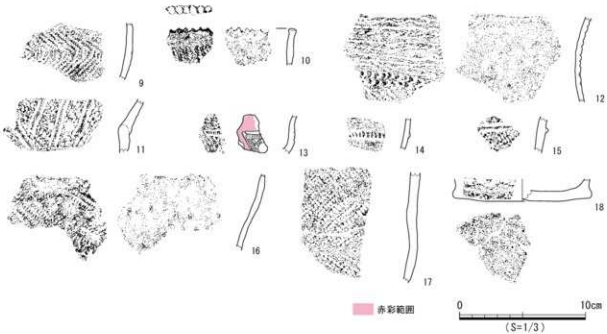


図 26　SI２出土遺物

SI３（図 27～図 30）

検出状況　AG18～AH19 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。重複関係はＳＩ１及びSI２より古い。平面形は東部の形状が不明であるが、掘方及び壁際溝から円形に近い形状と考えられる。

埋土　暗褐色土が５層堆積する。１層は円礫・亜角礫を含み、２層・４層・５層は褐色土ブロックを含む。北から東にかけての壁際に３層～５層、中央から南部にかけて１層・２層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込む。壁面は北壁・南壁が大きく開く。西壁は直立し、掘方の上半が開く。東壁はSI２に切られるため不明である。壁の残存高は最大で 0.38ｍである。

床面　ほぼ平滑であるが、南方向に傾斜する。竪穴掘方底面の中央に貼床（６層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 24 基、壁際溝１条である。少し歪ではあるが、竪穴内の位置関係や一定の深さがあることからＰ１～Ｐ４をSI３の主柱穴とした。また、SI２の床面で検出したSI2－P14 は竪穴内の位置関係からSI３の主柱穴の可能性がある。Ｐ４・Ｐ９では柱痕跡を確認した。竪穴建物の掘方外側でＰ22 からＰ24 を検出した。これらの遺構は掘方に沿ってほぼ等間隔に配置されていることから、竪穴建物の上部構造に関連する遺構の可能性がある。

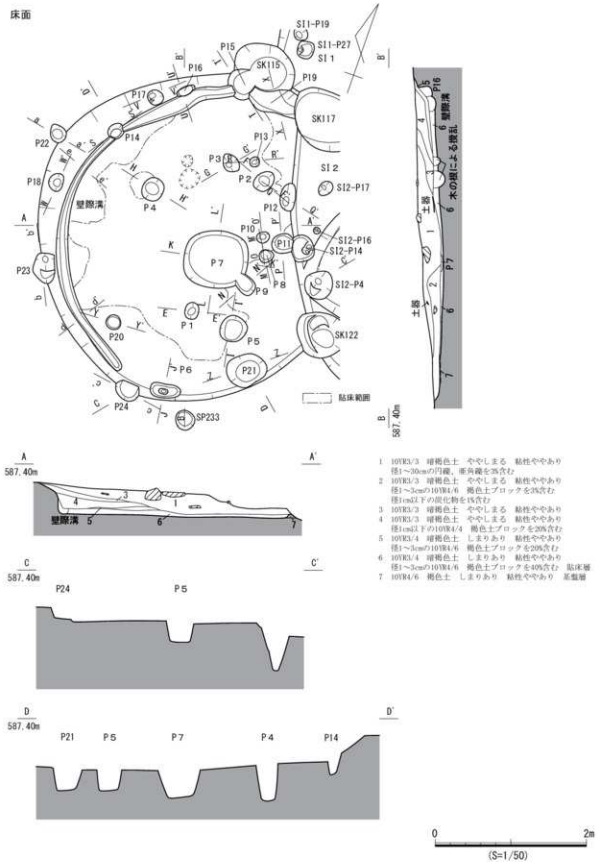
貯蔵穴　確認できなかった。

炉　確認できなかった。竪穴掘方底面中央で平面形が方形の土坑Ｐ７を検出した。埋土は暗褐色土の単層で、焼土や焼土面は確認できなかったことや埋土中の円礫・亜角礫が熱による赤変は認められなかったことから、炉としなかった。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　建物床面のほぼ中央の１層中で縄文土器１個体分（23）がまとまって出土した（図 29）。23 以外は比較的上層（ａ・ｂ・ｃ・１層）のものが多く、縄文土器・石器が散在した状況で出土した。

出土遺物　19～28 は前期前葉から後葉の土器である。19 はＺ１群１ｃ類で外面に幅広の「D」字状爪



1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1～30cmの円礫，亜角礫を3%含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
　径1cm以下の炭化物を1%含む
3　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
4　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを20%含む
5　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
6　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む　貼床層
7　10YR4/6　褐色土　しまりあり　粘性ややあり　基盤層

図27　SI３遺構図（１）

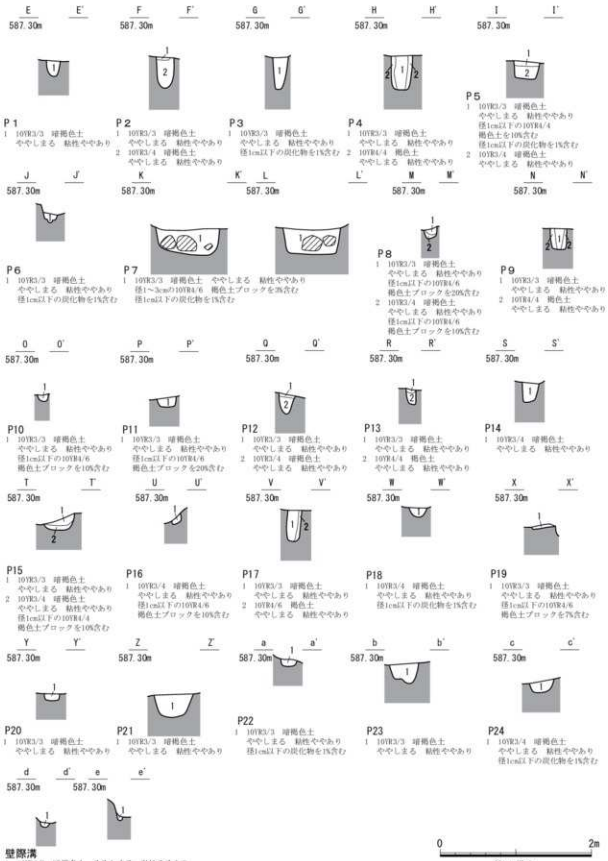

E E'
587.30m
F F'
587.30m
G G'
587.30m
H H'
587.30m
I I'
587.30m
P1
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P2
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P3
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
P4
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR4/4 褐色土
やしまる 粘性やあり
P5
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土を10%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
2 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
J J'
587.30m
K K'
587.30m
L L'
587.30m
M M'
587.30m
N N'
587.30m
P6
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
P7
1 10YR3/3 暗褐色土 やしまる 粘性やあり
径1～3cmの10YR4/6 褐色土ブロックを3%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
P8
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを20%含む
2 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを10%含む
P9
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR4/4 褐色土
やしまる 粘性やあり
O O'
587.30m
P P'
587.30m
Q Q'
587.30m
R R'
587.30m
S S'
587.30m
P10
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを10%含む
P11
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを20%含む
P12
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P13
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR4/4 褐色土
やしまる 粘性やあり
P14
1 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
T T'
587.30m
U U'
587.30m
V V'
587.30m
W W'
587.30m
X X'
587.30m
P15
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを10%含む
P16
1 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを10%含む
P17
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
2 10YR4/6 褐色土
やしまる 粘性やあり
P18
1 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
P19
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを5%含む
Y Y'
587.30m
Z Z'
587.30m
a a'
587.30m
b b'
587.30m
c c'
587.30m
P20
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P21
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P22
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
P23
1 10YR3/3 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
P24
1 10YR3/4 暗褐色土
やしまる 粘性やあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
d d' e e'
587.30m
壁際溝
1 10YR3/3 暗褐色土 やしまる 粘性やあり
0 2m
(S=1/50)

図28　SI3遺構図（2）

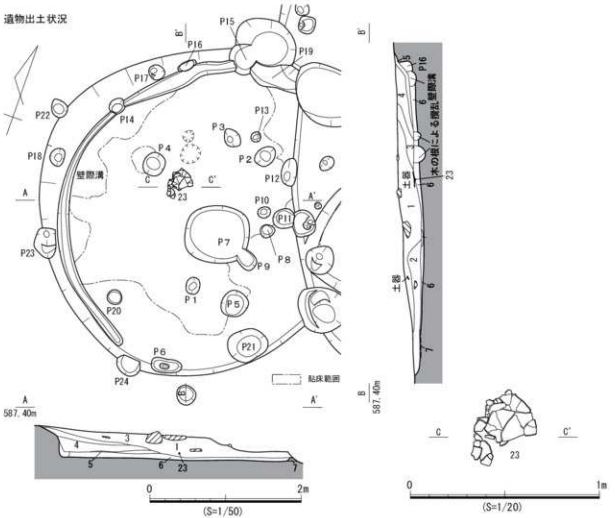


図29　SI３遺構図（３）

形文を施す。20・21はＺ１群２ｂ類で外面に先端がけば立った棒状の施文具で押し引きながら刺突文を施す。22はＺ１群３ａ類で胎土に繊維を含む。外面に半截竹管状施文具による平行沈線文とコンパス文を施す。23はＺ１群５類である。器厚の厚い土器で胎土に繊維と長石を含む。波状口縁で頸部は括れ外反する。口縁部外面に幅広の半截竹管状施文具による連続爪形文を６条施す。頸部外面の括れより下は地文として縄文を施す。底部は平底である。24はＺ２群５ｃ類で口縁部が外反する。口縁部外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を２条施し、頸部外面より下は地文として無節の縄文を施す。25はＺ２群６ｃ類で頸部外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を施す。26はＺ２群12ｃ類である。26は胴部下半の破片で外面に縦位の縄文を施す。27はＺ２群14類である。平底で胴部外面に先端がけば立った棒状の施文具による刺突文を施す。28はＺ２群15類で胴部が大きく屈曲する。外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で入組木葉文を施す。29は磨石・敲石類で表裏面に磨痕・敲打痕、側面・下面に敲打痕を残す。

時期　縄文土器（23）は１個体分出土しているが、１層出土であり、竪穴建物の時期を特定できない。竪穴建物の埋土から前期前葉から後葉のものが出土したが、主体は諸磯ａ式以前である。また、重複関係がSI１・SI２よりも古く、SI１は前期後葉、SI２は前期後葉以前であることから、前期後葉以前の竪穴建物と判断した。

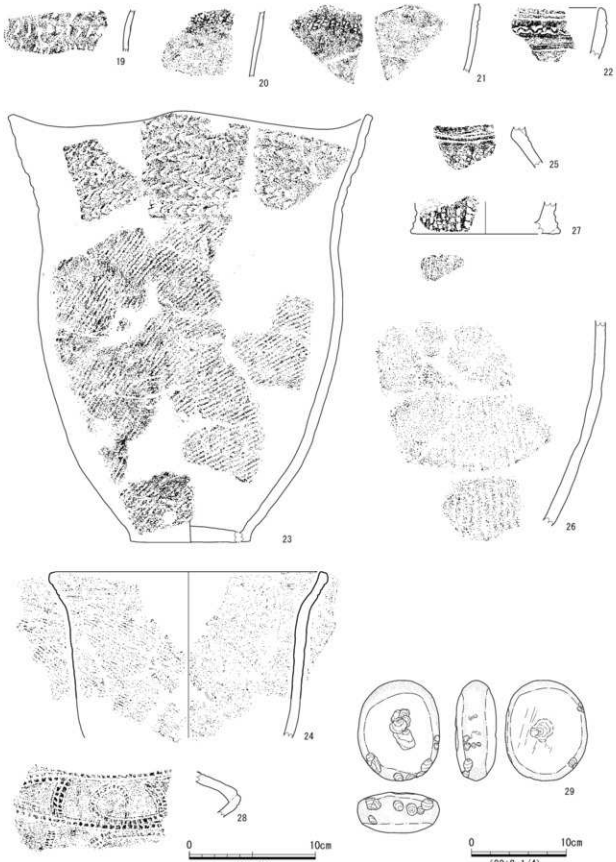


図30　SI3出土遺物

SI４（図31～図39）

検出状況　AF17～AG18 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は西と南の辺は直線的であるが、北と東の辺は丸みがある不定な形状をとる。

埋土　黒褐色土と暗褐色土が７層堆積する。埋土中に礫・褐色土ブロック・炭化物を含む。

壁　Ⅲ層を掘り込む。壁面は開き、北壁は途中で緩やかになりながら皿状に開くため２段になる。壁の残存高は最大で0.58mである。

床面　ほぼ平滑で、南東方向に傾斜する。掘方底面中央に貼床（10 層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で、褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 25 基、炉１基、貯蔵穴１基である。壁際溝は確認できなかった。竪穴内の位置関係や掘方の形状からＰ１～Ｐ５を主柱穴と判断したが、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ７・Ｐ11・Ｐ16・Ｐ17では柱痕跡を確認した。Ｐ11・Ｐ16・Ｐ17は竪穴壁際に配されることから、竪穴壁を保護する板材を固定するための柱穴の可能性がある。また、竪穴建物の掘方に沿うようにＰ22～Ｐ24 を検出した。これらの遺構は竪穴建物の掘方に沿って等間隔に設置されることから竪穴建物の上部構造に関連する遺構の可能性がある。

貯蔵穴　建物南部で土坑を検出した。平面形は不定形である。竪穴建物内の床面で検出した遺構の中では大きく深い遺構であること、主柱穴の間に配置される[1]ことから貯蔵穴と判断した。暗褐色土と褐色土が３層堆積する。

炉　建物ほぼ中央部東側で地床炉を検出した。平面形は円形若しくは隅丸方形である。竪穴掘方掘削時に炉穴を掘り窪めており、底面には貼床が認められる。埋土は暗褐色土の単層で褐色土ブロック・炭化物を含む。底面中央は熱により赤変していた。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　竪穴建物の埋土ａ～ｄ層、１～４層から縄文土器や石器が散在した状況で出土した。また、Ｐ７から土器１個体分（56）が横位で、貯蔵穴から前期後葉の土器（36・45）が、Ｐ18から前期後葉の土器（43・46・47）が出土した。

出土遺物　30・31はＺ１群１ｃ類である。30は外面に半截竹管状施文具による刺突文を２条施す。内面は条痕調整を行う。31は外面を横方向の条痕調整後、棒状施文具により刺突文を２条施す。内面に指頭圧痕を残す。32・33はＺ１群４ｃ類である。32は外面に櫛歯状施文具による刺突文と平行沈線文を施す。33は平底の底部で胴部外面に先端がけば立った棒状の施文具で刺突文を施す。34はＺ２群１ａ類である。器厚が薄く、外面に半截竹管状施文具により幅広の連続爪形文を施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため、列点状になる。35はＺ２群２ａ類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を３条施す。36・37はＺ２群２ｃ類である。36は外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で渦巻状や弧状のモチーフを描く。内面の口縁端部の部分に赤彩が認められる。37は外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を口縁部と頸部の括れた部分に施す。38はＺ２群３ａ１類で外面に細い突帯上に先端の細い施文具で刻みを施す。39はＺ２群３ａ２類で外面に突帯上に斜めの刻みを鋸歯状に施す。40～42はＺ２群３ｄ類である。40は直立する波状口縁の外面に２条の突帯を貼り付け、括れよりも上に縦位や斜位の突帯を貼り付ける。41は外反する波状口縁外面の括れる部分に２条の突帯を貼り付け、括れよりも上に縦位や斜位の突帯を貼り付ける。42は内湾する口縁外面に渦巻状や弧状の突帯を貼り付ける。43～47はＺ２群６ｃ類である。43・44・46は内湾する口縁外面に半截竹管状施

文具による平行沈線文を施す。45 は内屈する波状口縁外面に半截竹管状施文具による多条の平行沈線文を施す。また、波頂部に円形の浮文を貼り付ける。47 は頸部外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を施す。48 はＺ２群７a 類で外面に半截竹管状施文具による集合沈線文で縦方向に区画し、その間に斜め方向の鋸歯状の集合沈線文を施す。49～51 はＺ２群７ｃ類である。49・50 は外面に半截竹管状施文具により集合沈線文を施し、その上に浮線文を貼り付ける。51 は外面に半截竹管状施文具により集合沈線文を施し、その上に口縁に平行する浮線文を貼り付ける。52・53 はＺ２群 12ａ類である。52 は外面に粒の細い縄文を横位に施す。53 は外面に粒の細い縄文を横位に施す。52 と 53 は器厚や縄文が類似し、出土位置も同じことから同一個体の可能性が高い。54・55 はＺ２群 12ｃ類である。54

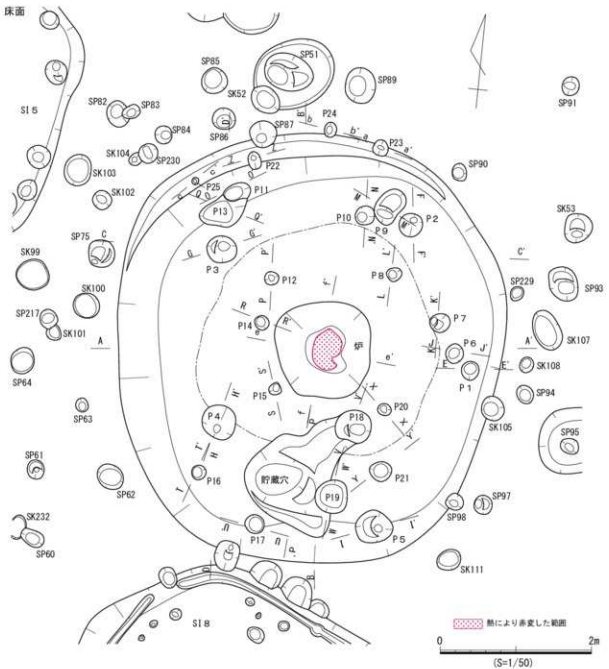
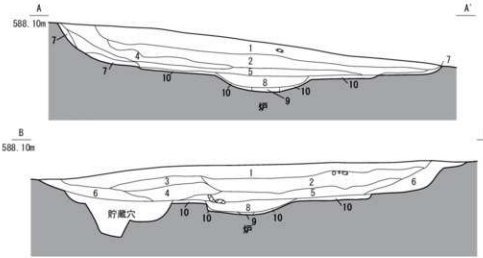
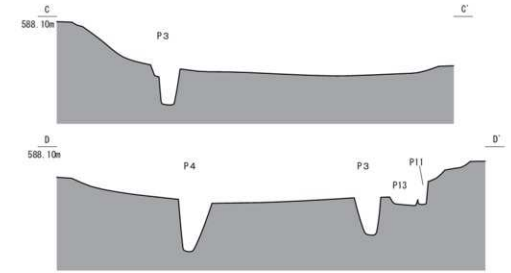
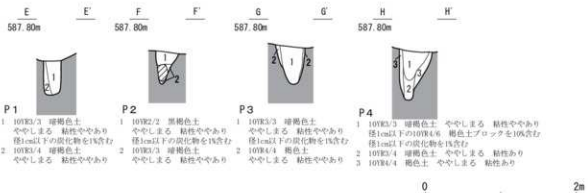


図31　SI４遺構図（１）



1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径5～20cmの円礫、角礫を3%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径10～20cmの亜角礫を3%含む　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む　径1cm以下の炭化物を2%含む
3　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の炭化物を1%含む
4　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1～3cm内の10YR4/6　褐色土ブロックを10%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
5　10YR2/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径5～20cmの亜角礫を5%含む
6　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1～3cm内の10YR4/6　褐色土ブロックを7%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
7　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり
8　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1～3cm内の10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む　炉の埋土
9　10YR3/3　暗褐色土　しまる　粘性ややあり　径1～3cm内の5YR4/4　赤褐色土ブロックを40%含む　貼床層が赤変した部分
10　10YR3/3　暗褐色土　しまる　粘性ややあり　径1～3cm内の10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む　貼床層





P1
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり

P2
1　10YR2/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり

P3
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり

P4
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを10%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性あり
3　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性あり

図32　SI4遺構図（2）

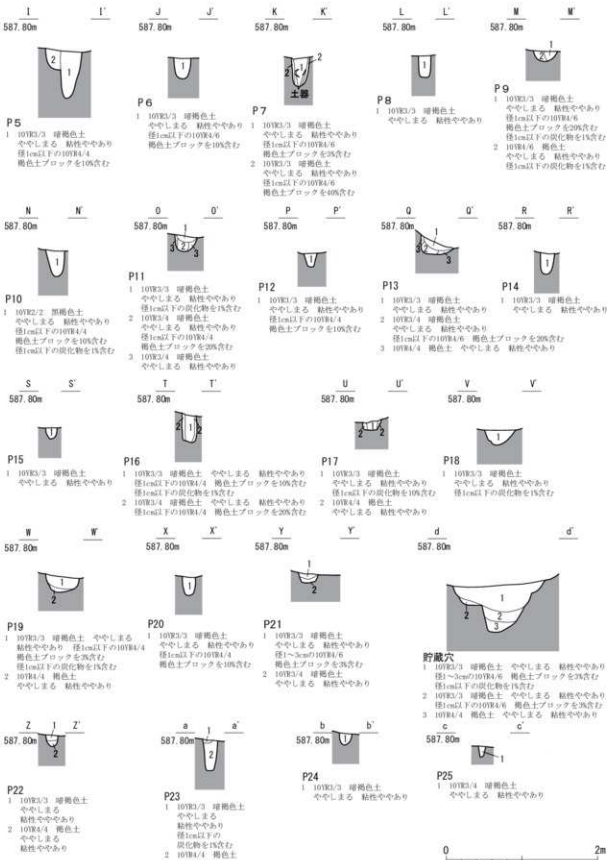
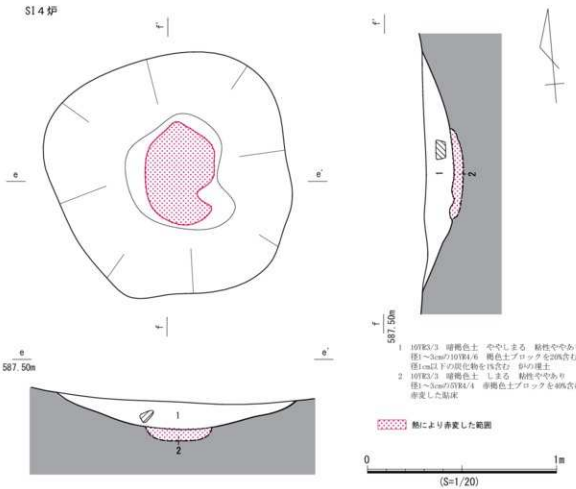

I　I'
587.80m
P5
1　10YR3/3　暗褐色土
やしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
J　J'
587.80m
P6
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを10%含む
K　K'
587.80m
土器
P7
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを3%含む
2　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを40%含む
L　L'
587.80m
P8
1　10YR3/3　暗褐色土
やしまる　粘性ややあり
M　M'
587.80m
P9
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを20%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR4/6　褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
N　N'
587.80m
P10
1　10YR2/2　黒褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
O　O'
587.80m
P11
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/4　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
3　10YR3/4　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
P　P'
587.80m
P12
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
Q　Q'
587.80m
P13
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
2　10YR3/4　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
3　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり
R　R'
587.80m
P14
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
S　S'
587.80m
P15
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
T　T'
587.80m
P16
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを10%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/4　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを20%含む
U　U'
587.80m
P17
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の炭化物を10%含む
2　10YR4/4　褐色土
ややしまる　粘性ややあり
V　V'
587.80m
P18
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の炭化物を1%含む
W　W'
587.80m
P19
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる
粘性ややあり　径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを2%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR4/4　褐色土
ややしまる　粘性ややあり
X　X'
587.80m
P20
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
Y　Y'
587.80m
P21
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
径1～3cmの10YR4/6
褐色土ブロックを3%含む
2　10YR3/4　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
d　d'
587.80m
貯蔵穴
1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
3　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり
Z　Z'
587.80m
P22
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる
粘性ややあり
2　10YR4/4　褐色土
ややしまる
粘性ややあり
a　a'
587.80m
P23
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる
粘性ややあり
径1cm以下の
炭化物を1%含む
2　10YR3/4　褐色土
ややしまる
粘性ややあり
b　b'
587.80m
P24
1　10YR3/3　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
c　c'
587.80m
P25
1　10YR3/4　暗褐色土
ややしまる　粘性ややあり
0　2m
(S=1/50)

図33　SI4遺構図（3）


SI４炉
e
e'
f
f'
587.50m
1
2
10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1～3cm程の10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む　SIの埋土
10YR3/3　暗褐色土　しまる　粘性ややあり
径1～3cm程の5YR4/4　赤褐色土ブロックを40%含む
赤変した粘床
熱により赤変した範囲
0
1m
(S=1/20)

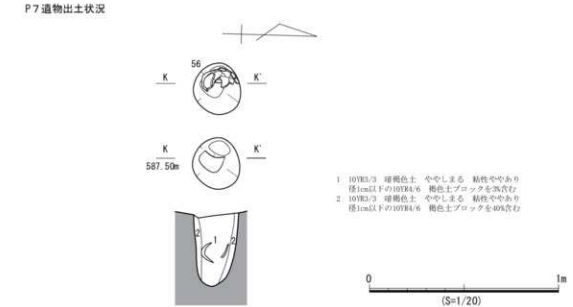

P７遺物出土状況
K
K'
56
587.50m
1
2
10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを2%含む
10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む
0
1m
(S=1/20)

図34　SI４遺構図（４）

は外面に羽状縄文に施す。55は口縁部がやや内湾する。外面に縄文を施す。56はZ2群13c類で口縁が内湾する。内外面に横方向のナデ調整を施す。57はZ2群13b類で器厚が厚く、胎土に繊維を含む。58・59はZ2群14類である。58は底部外面の接地部分がわずかに張り出す。59は底部外面の接地部分の張り出しがない。60～68はZ2群15類である。60は底部外面の接地部分が大きく張り出す。61は内湾浅鉢で胴部が内湾する。口縁部外面に棒状施文具による沈線を施し、それより下には半截竹管状施文具による平行沈線文を施す。62は有稜浅鉢で口縁部が大きく屈曲し、口縁部外面に穿孔が認められる。63は外反浅鉢で外面に突帯を横方向に貼り付け、それより上には先端の細い施文具で曲線を描く。64は複段内湾浅鉢で頸部が短く内屈する。頸部外面に棒状施文具による沈線を施し、屈曲部より下には半截竹管状施文具による平行沈線文を施す。65は複段内湾浅鉢で頸部が括れる。外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を施し、破片の中央部に赤彩が認められる。内面に横方向のナデ調整を施す。66は複段内湾浅鉢で底部外面に張り出しが有段となる。67は外面に半截竹管状施文具による平行沈線文を施し、一部に赤彩が認められる。68は胴部が内湾する。外面は無文である。胎土に雲母を多く含む。69・70はZ2群17類である。69は平底で接地部が外に張り出す。外面は無文である。70は平底で胴部が外傾する。外面は無文である。71～73は石匙である。71・73は横長の剥片を素材とし、縁辺上部に直線的な刃部を作り出す。72は横長の剥片を素材とし、縁辺下部に外湾する刃部を作り出す。74はスクレイパー3a類で横長な剥片の縁辺左部・右部を折り取り、上部は直線的、下部は外湾する刃部を作り出す。75は打欠石錘で扁平円礫の長軸両端に打ち欠く。76～80は磨石・敲石類である。76は石鹸形で全面に磨痕を残す。左側面を除く部分に敲打痕を残す。77は表裏面・側面に敲打痕・磨痕を残す。下面は潰れた敲打痕も認められることから、敲打を繰り返すことで磨面が形成されたと考えられる。78は表面に磨痕を残す。右側面に磨痕を残すが、潰れた敲打痕も認められることから、敲打を繰り返すことで磨面が形成されたと考えられる。79は左側面に磨痕を残す。80は左側面に磨痕・敲打痕を残す。78と同様に潰れた敲打痕も認められることから、敲打を繰り返すことで磨面が形成されたと考えられる。81・82は石皿で、81は有縁、82は平板である。83は砥石で板状の礫の表裏面に磨痕・線状痕を残す。

時期　竪穴建物の埋土から出土した土器は、上層・下層ともに、大半は前期後葉である。また、貯蔵穴から出土した土器（36・45）が前期後葉であることから、前期後葉の竪穴建物と判断した。

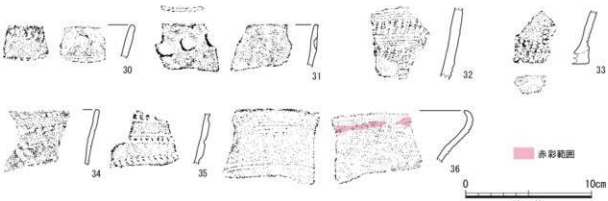


図35　SI4出土遺物（1）

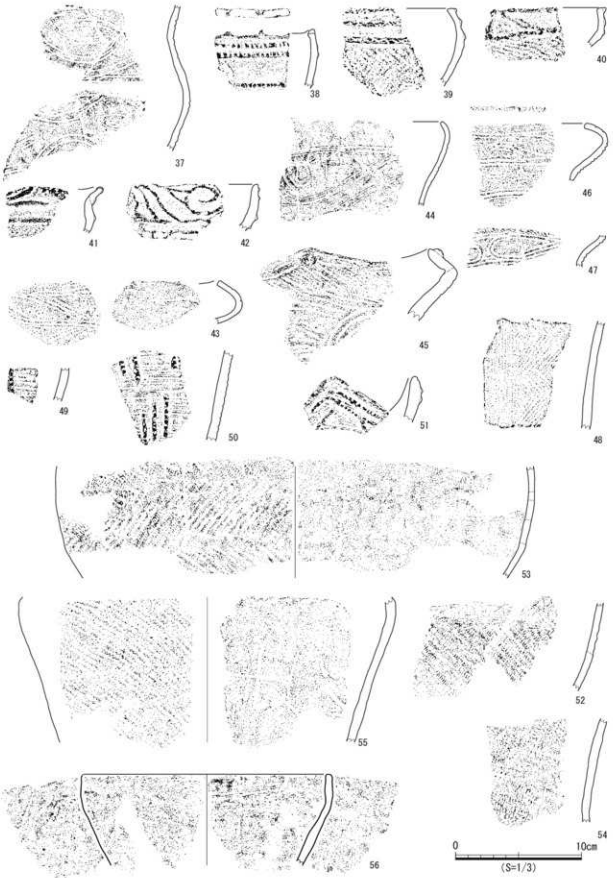


図36　SI４出土遺物（２）

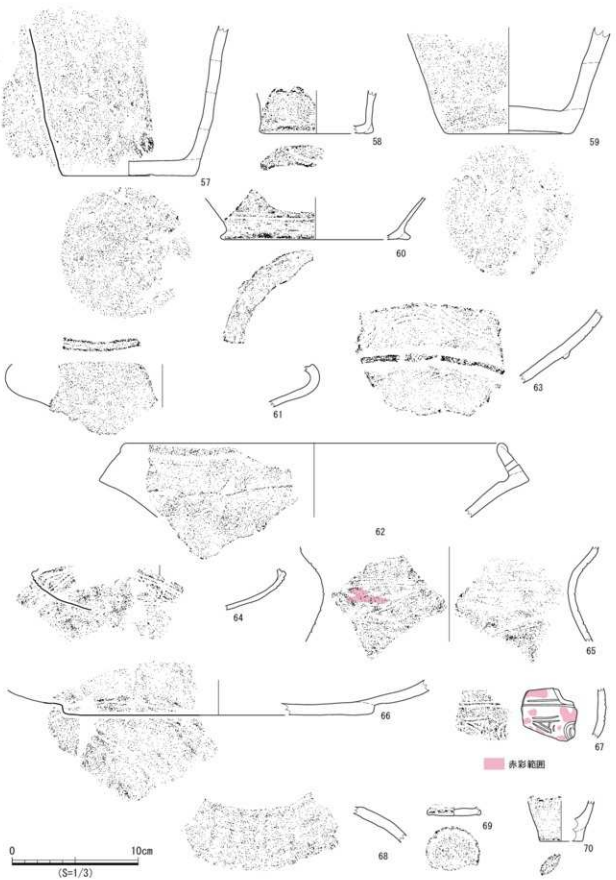


図37　SI4出土遺物（3）

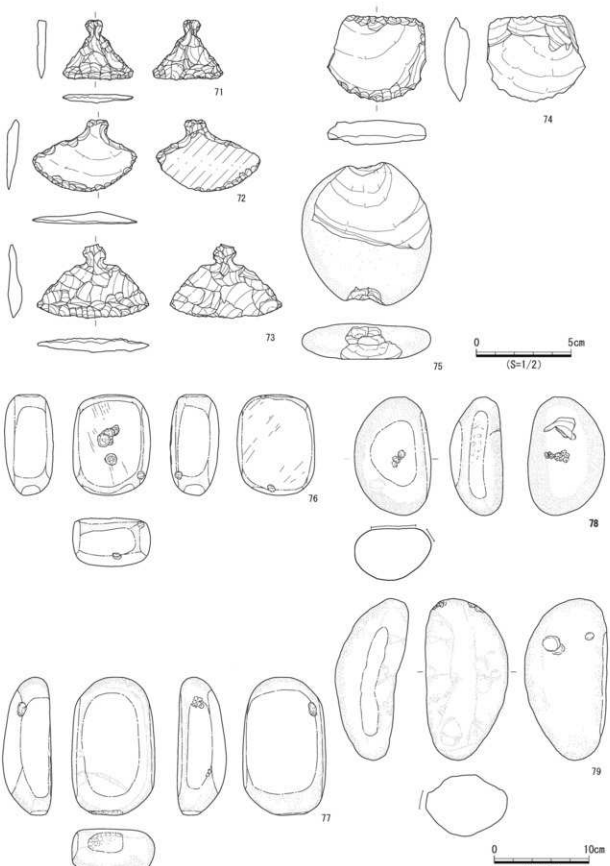


図38　SI4出土遺物（4）

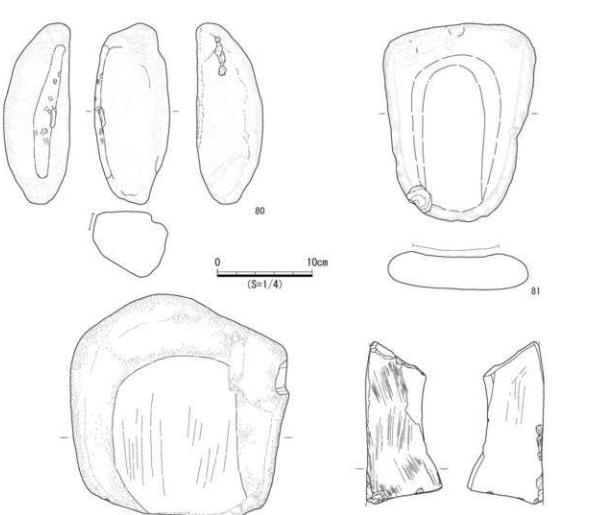


図39　SI4出土遺物（5）

SI5（図40～図42）

検出状況　AF16～AF17グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は各辺が直線的で台形に近い形状である。

埋土　暗褐色土が2層堆積する。埋土中に亜角礫や褐色土ブロックや炭化物を含む。壁際に2層、中央に1層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面は大きく開く。壁の残存高は最大で0.22mである。

床面　ほぼ平滑であるが東方向に傾斜する。掘方底面中央に貼床（3層）が残る。貼床は褐色土が主体でやや明るい褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑18基である。壁際溝・炉は確認できなかった。竪穴内の位置関係や掘方の形状からP1～P4を主柱穴としたが、このうちP1・P3で柱痕跡を確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　炉は確認できなかったが、中央の床面やや南寄りで暗褐色土と黒褐色土が４層堆積する方形のＰ18を検出した。埋土２層に１～３㎝の比較的大きな炭化物が堆積する層が認められるが、焼土を含まない。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　掘方の南西部の１層から縄文土器１個体分（91）が外面を上にした状態で出土した（図42）。91以外は上層（ａ・１）出土のものが多く、縄文土器・石器が散在した状態で出土した。土器は時期が特定できるものは前期後葉のものである。この他、93はＰ７の埋土上層から出土した。

出土遺物　84・85はＺ２群２ａ類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を２条施す。86・87はＺ２群２ｃ類で外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で直線や曲線を描く。88はＺ２群３ａ１類で外面に扁平な突帯上にヘラ状の施文具により縦に短い刻みを入れる。89はＺ２群３ａ２類で外面は縄文地で細く扁平な突帯を貼り付け、突帯上に斜めの刻みを入れる。90・91はＺ２群３ｄ類である。90は外面に扁平な突帯を貼り付ける。波頂部には渦巻状に突帯を貼り付ける。91は口縁部が短く内湾する。外面は縄文地で口縁部に平行する２条の突帯を貼り付ける。92はＺ２群５ｄ類で外面は縄文地で半截竹管状施文具による平行沈線文を施す。内面は横方向のナデを施す。93はＺ２群12ｃ類で外面

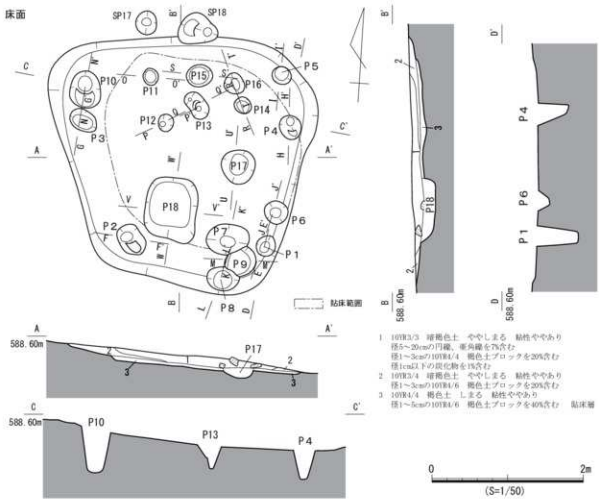


図40　SI５遺構図（１）

に無節の縄文を施す。94はZ2群14類で底部外面の接地部が外側に張り出す。95は有縁の石皿である。

時期　竪穴建物の埋土から出土した土器は、時期判別可能なものはすべて前期後葉のものである。また、P7から出土した土器（93）も前期後葉であることから前期後葉の竪穴建物と判断した。

図41　SI5遺構図（2）

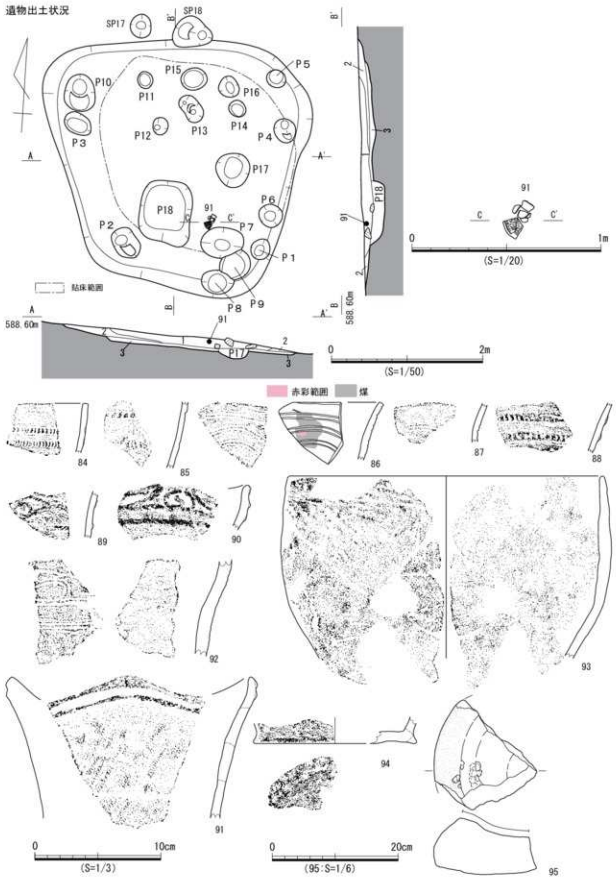


図42　SI５遺構図（３）・出土遺物

ＳＩ６（図 43～図 45）

検出状況　AH20 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK331・SK328 と重複関係があり、SK331・SK328 より古い。全体に丸みのある平面形であるが、西辺や南辺は直線的である。

埋土　黒褐色土と暗褐色土が４層堆積する。４層は西壁際、３層は全体、１層・２層は中央に認められる。埋土中に褐色土ブロックや炭化物を含む。

壁　Ⅲ層を掘り込む南西側と北東側の壁面は直立し、北西側の壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.64ｍである。

床面　ほぼ平滑である。貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 17 基、壁際溝２条である。掘方の形状からＰ１～Ｐ３を主柱穴とした。また、Ｐ４は掘方が浅いものの、ＳＩ６と同時期の掘要川町尾元遺跡ＳＢ４（岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003）のように中央に１本と周囲に３本の主柱穴を配置する事例に類似することから、主柱穴の可能性がある。なお、Ｐ１・Ｐ16 で柱痕跡を確認した。Ｐ５～Ｐ８・Ｐ10・Ｐ11・

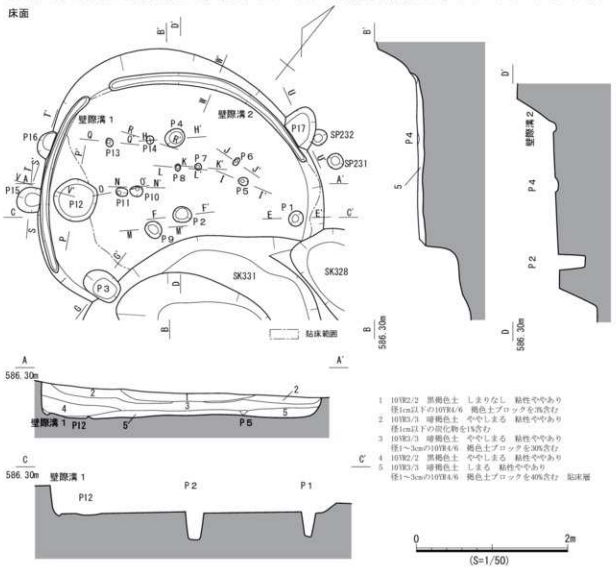


図 43　ＳＩ６遺構図（１）

P13・P14 は性格不明土坑としたが、浅いものや規模が小さいものが大半であることから木の根のような痕跡を誤認したとも考えられる。また、竪穴建物の掘方にかかるように検出したP15～P17は、一見 SI6 と重複する遺構のように見えるが、掘方の周囲に配置されることから竪穴建物と関連する遺構として掲載した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　確認できなかった。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

図44　SI6遺構図（2）

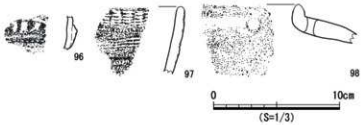


図 45　SI６出土遺物

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。上層（ｂ・１）出土のものが多い。時期が特定できる土器は前期中葉のもの（96・97）と諸磯ｂ式の浅鉢（98）である。

出土遺物　96 はＺ１群２ａ類で外面の肥厚させた部分に細かなジグザクの腹縁をもつ貝殻による２条の貝殻腹縁文を施す。97 はＺ１群４ｂ類で外面に櫛歯状施文具による押し引き状の刺突文・刺突文・集合沈線文を施す。98 はＺ２群 15 群の複段内湾浅鉢で口唇部は短く屈曲し、直立する。屈曲部に沈線を施し、沈線内を穿孔する。

時期　竪穴建物の埋土から出土した土器のうち、時期を特定できるものは前期中葉と後葉のものであることから、前期後葉以前の竪穴建物と判断した。

SI７（図 46・図 47）

検出状況　AI20 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。遺存状態は悪いが、北辺と西辺が直線的であることから、平面形は方形の可能性がある。SK326・SK331・SKSK333～SK335 と重複関係があり、いずれよりも古い。

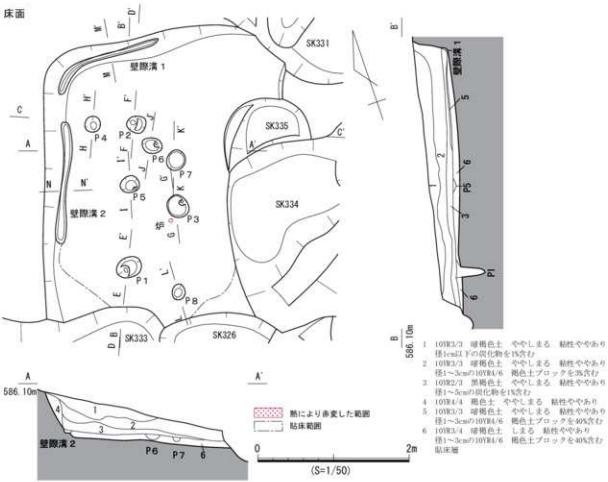


図 46　SI７遺構図（１）

埋土　暗褐色・黒褐色土が５層堆積する。５層は掘方の北部に堆積し、他の堆積より褐色土ブロックを多く含む。４層は西壁際、１層～３層は掘方全体に堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開くが直立に近い。壁の残存高は最大で０.75mである。

床面　ほぼ平滑であるが、南方向に傾斜する。貼床（６層）は残存する掘方底面全体に残るが、南部にはない部分も認められる。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑８基、壁際溝２条、炉１基である。竪穴内の位置関係や柱穴状の掘方の形状からＰ１・Ｐ２を主柱穴と判断した。壁際溝は北辺と西辺で２条確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　建物の中央部南側に貼床の一部に赤変があり、この部分が炉の残欠と考えられる。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。土器は時期が特定できる土器は前期中葉から後葉のものである。

出土遺物　99はＺ１群４ｂ類で口縁部外面が肥厚する。外面に櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文を施す。

時期　竪穴建物の埋土から出土した土器から前期後葉以前の竪穴建物と判断した。

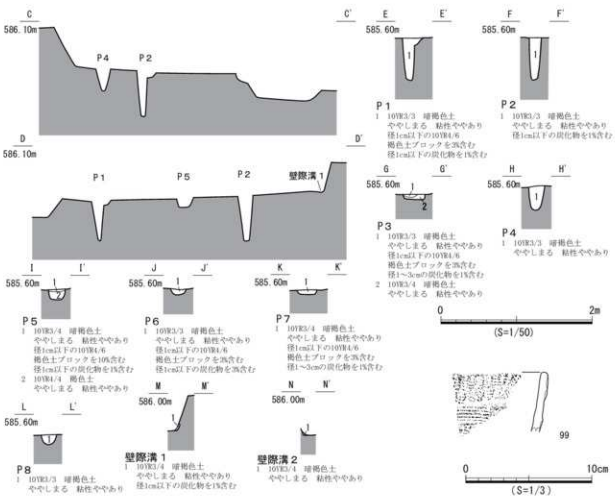


図47　SI７遺構図（２）・出土遺物

SI８（図 48～図 50）

検出状況　AH17～AH18 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。南側で SI９と重複関係があるが、検出時に重複関係を確認しないまま同時に SI９として掘削を進めてしまった。最終的に土層観察用畔から SI８が SI９より古いと判断した。平面形は残存する掘方の３辺が直線的であることから方形に近い形状と考える。

埋土　黒褐色土と暗褐色土などが４層堆積する。東壁際に４層、残存する北部・東部に１層～３層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面は直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で 0.58m である。

床面　ほぼ平滑であるが、南東方向に傾斜する。貼床層はない。残存する床面で検出した遺構は土坑

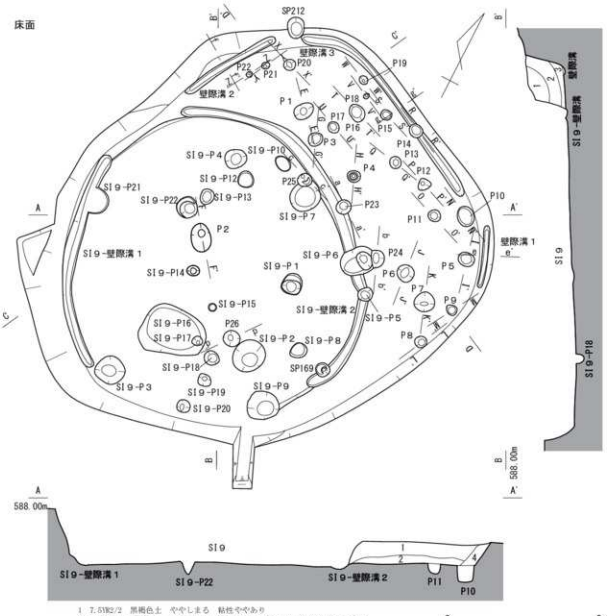


図 48　SI８遺構図（１）

23基、壁際溝３条である。この他にSI９の貼床除去後に検出したＰ２・P25・Ｐ26をSI８に関連する遺構として掲載した。これらの内、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ26は掘方の規模や形状が類似することから主柱穴の可能性があり、このうちＰ26で柱痕跡を確認した。また、Ｐ７は皿状の浅い掘方であるが、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ26を主柱穴とした場合、竪穴建物の掘方中央を中心に同心円上に配置されることから主柱穴と考える。壁際溝は北部と東部で３条確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　確認できなかった。

床下　貼床がないため、床下の調査は実施していない。

遺物出土状況　検出状況でも触れたように、SI９との重複関係が分からず掘削し取り上げたため、すべてSI９の項に掲載した。なお、B断面より東側で出土した土器は前期中葉から後葉のものがあるが、主体は中葉である。

時期　SI９との先後関係から前期後葉以前の遺構と判断した。

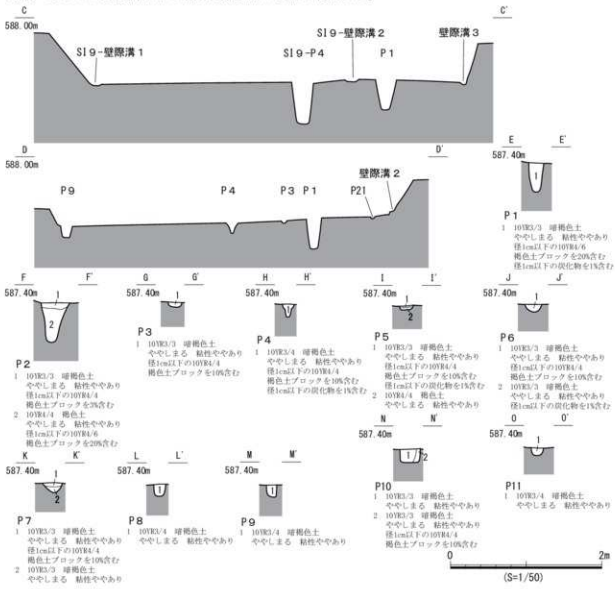


図49　SI８遺構図（２）

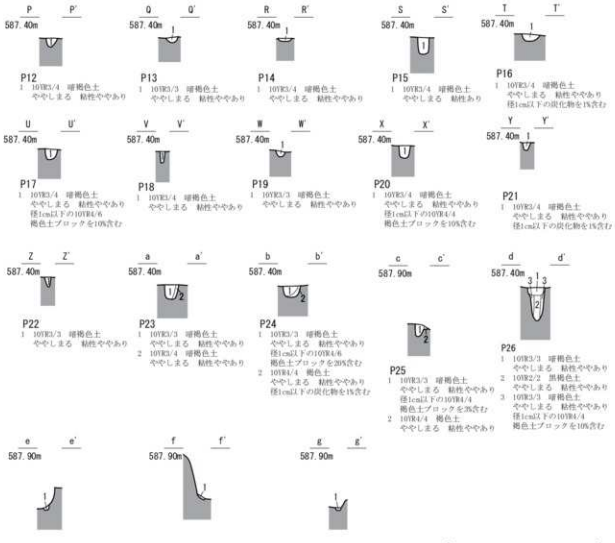


図50　SI８遺構図（３）

SI９（図51～図55）

検出状況　AH17・AH18・AI17グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北側でSI８と重複関係があるが、重複関係を確認しないまま同時に掘削を進めてしまったため、東壁・東壁の状況が不明である。最終的には土層観察用畔からSI９がSI８より新しいと判断した。平面形は壁際溝から円形に近い形状と考えられる。

埋土　黒褐色土と暗褐色と褐色土がほぼ水平に堆積し、壁際はやや傾斜して堆積する。１層はSI８・SI９の埋没過程で落ち込んだ部分の堆積である。６層は西壁際、２層・５層は掘方全体、３層・４層は西壁際から南壁際にかけて堆積し、２層・５層・６層に比べ褐色土ブロックを多く含む。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開くが、直線的に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.75mである。

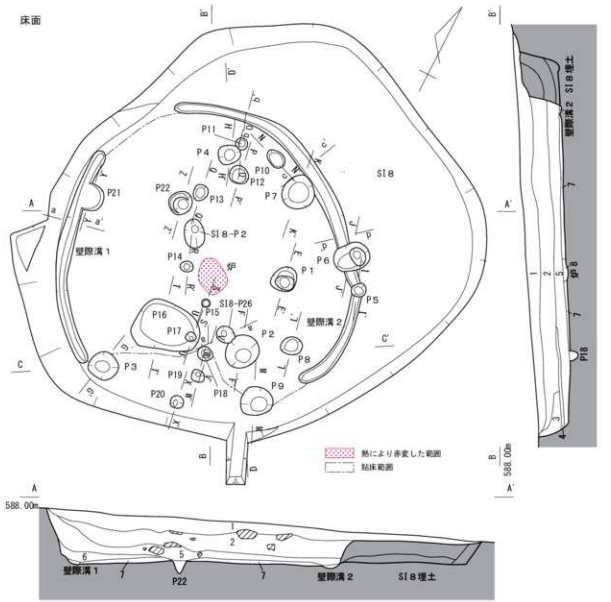
床面　ほぼ平滑であるが、南東方向にやや傾斜する。掘方の底面と考えられる範囲のうち、南部を除く床面に貼床（７層）が残る。貼床は褐色土が主体で、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑22基、壁際溝２条、炉１基である。掘方の形状・規模が類似し、建物掘方や西寄りを中心にほぼ同心円上

に配置されるＰ１～Ｐ４を主柱穴と判断したが、このうちＰ２・Ｐ３で柱痕跡を確認した。Ｐ１とＰ２の中間、Ｐ３とＰ４の中間を結んだラインを中心とした相対的な配置の可能性がある。このほかＰ９で柱痕跡を確認した。壁際溝は２条確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　建物床面のほぼ中央部に貼床の一部が赤変した部分があり、この部分を地床炉とした。

床下　床下で土坑３基を検出した。ＳＩ９より古いＳＩ８の主柱穴とした。



1　10YR3/3　暗褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを2%含む
　径1cm以下の炭化物を1%含む　包含層Ⅱ層
2　7.5YR3/2　黒褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径1～20cmの軟石礫を3%含む
　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
　径1cm以下の炭化物を1%含む
3　7.5YR3/2　黒褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを10%含む
4　10YR3/2　黒褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
5　7.5YR2/2　黒褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径11cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
6　10YR4/4　褐色土　やや しまる　粘性ややあり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを3%含む
7　10YR4/4　褐色土　しまる　粘性ややあり　貼床層
8　5YR4/4　にぶい赤褐色土　しまる　粘性ややあり
　熱により赤変した部分　炉

図51　ＳＩ９遺構図（１）

遺物出土状況　検出状況でも触れたように、SI８との重複関係が分からず掘削し取り上げたため、SI８のものを含めてSI９に掲載する。大半がSI９の埋土と思われるB断面より西側で出土した土器は、下層出土（g・h・５層）のものが多い。また、A断面・B断面の土層観察用畦のSI９の埋土で出土した土器は、１・２・５層から出土した。いずれも前期中葉から後葉のものが出土したが、大半は後葉である。この他にＰ４から前期中葉の土器（101）が出土した。

出土遺物　100はＺ１群３ｂ類で胎土に繊維を含む。波頂部には突起が付き、外面に棒状施文具による肋骨文を描く。内面は口唇部が肥厚する。101はＺ１群４ｃ類で櫛歯状施文具による刺突を施す。102はＺ２群１ａ類である。器厚が薄く、口縁部から括れる頸部にかけての破片で外面上半に幅の広い半

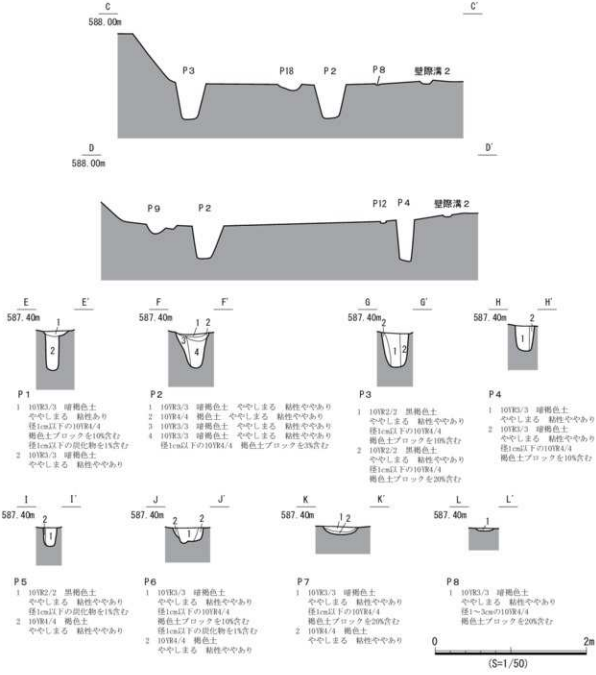


図52　SI９遺構図（２）

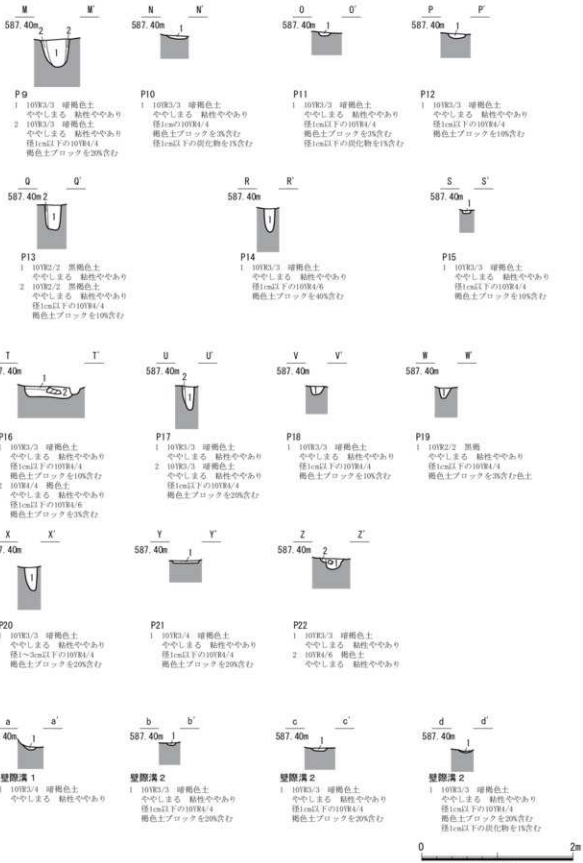

M
M'
587.40m
P9
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
2 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
N
N'
587.40m
P10
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cmの10YR4/4
褐色土ブロックを3%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
O
O'
587.40m
P11
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを3%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
P
P'
587.40m
P12
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
Q
Q'
587.40m
P13
1 10YR2/2 黒褐色土
ややしまる 粘性ややあり
2 10YR2/2 黒褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
R
R'
587.40m
P14
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを40%含む
S
S'
587.40m
P15
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
T
T'
587.40m
P16
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
2 10YR4/4 褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/6
褐色土ブロックを3%含む
U
U'
587.40m
P17
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
2 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
V
V'
587.40m
P18
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを10%含む
W
W'
587.40m
P19
1 10YR2/2 黒褐
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを3%含む色土
X
X'
587.40m
P20
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1～3cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
Y
Y'
587.40m
P21
1 10YR3/4 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
Z
Z'
587.40m
P22
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
2 10YR4/6 褐色土
ややしまる 粘性ややあり
a
a'
587.40m
壁際溝 1
1 10YR3/4 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
b
b'
587.40m
壁際溝 2
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
c
c'
587.40m
壁際溝 2
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
d
d'
587.40m
壁際溝 2
1 10YR3/3 暗褐色土
ややしまる 粘性ややあり
径1cm以下の10YR4/4
褐色土ブロックを20%含む
径1cm以下の炭化物を1%含む
0
2m
(S=1/50)

図53　SI9遺構図（3）

竹管状施文具による連続爪形文を施す。また、外面下半に縄文が認められる。103・104はZ２群２ａ類で、外面に幅の狭い半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。また、爪形文の下には羽状縄文を施す。105はZ２群５ｃ類で外面は縄文地で半截竹管状施文具による平行沈線を施す。106・107はZ２群５ｅ類である。106は外面に半截竹管状施文具による肋骨文を描く。肋骨文は連続爪形文で描かれているが、１条のみコンパス文に近いものがある。107はやや内湾する口縁部片で外面に半截竹管状施文具による肋骨文を描く。108はZ１群３ｃ類で胎土に繊維を含む。外面に半截竹管状施文具による多

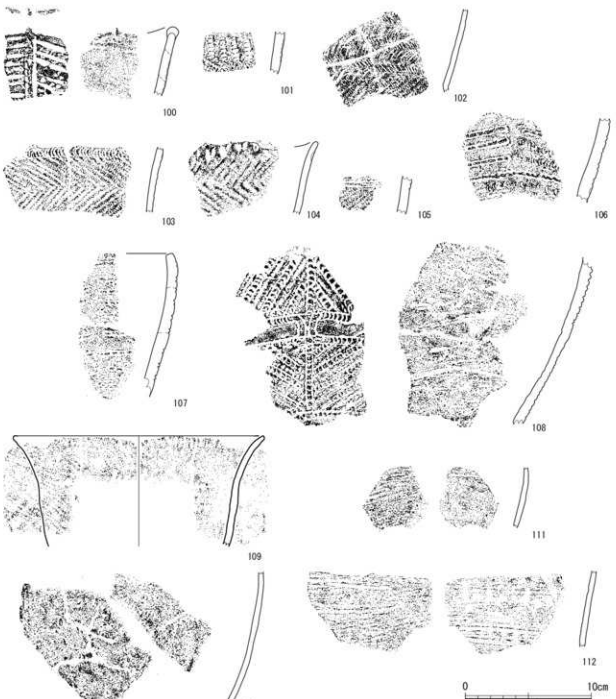


図54　SI９出土遺物（１）

重米字文を描く。内面は横方向のナデ調整を施す。109・110はＺ２群12ａ類である。109は器厚の薄い口縁部から胴部にかけての破片で口縁部が緩やかに外反する。外面には節の細かい縄文、口縁部内側に半截竹管による刻みを施す。110は胴部片で丸みをもつ。外面にナデ調整が認められる。111・112はＺ２群13ｄ類である。111は外面に横方向の条痕調整が認められる。112は内外面に貝殻腹縁による横方向の条痕調整を施す。113～115は磨石・敲石類である。113は扁平な面の一方に敲打痕が集中し、凹部を形成する。114は石鏃形で表裏面や両側面や下面に磨痕を残す。また、表面に線状痕と敲打痕、裏面と左側面と上面に敲打痕を残す。115は左側面に敲打痕や磨痕を残す。116は平板の石皿で表面に磨痕を残す。117は玦状耳飾で、切り込み部分は直線的である。

時期　Ｐ４から前期中葉の土器（101）が出土しているが、Ｂ断面よりも西側で出土した土器は前期後葉が大半であることから前期後葉の竪穴建物と判断した。

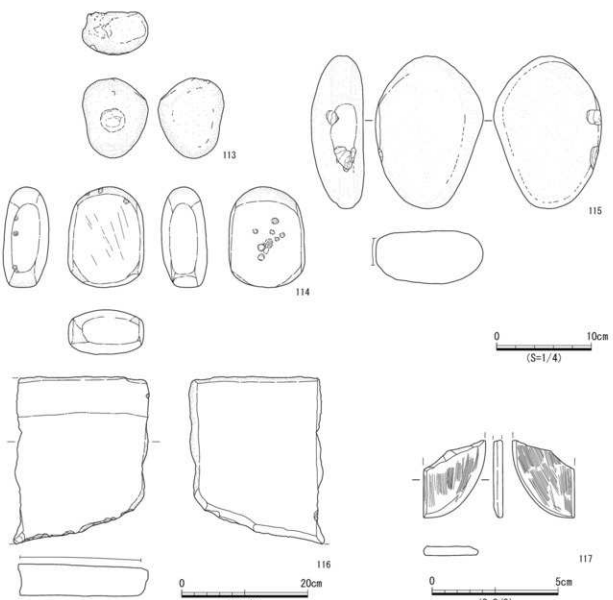


図55　SI９出土遺物（２）

SI10（図 56～図 62）

検出状況　AI18・AI19 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北東側で古代の遺構である SK333 と重複関係があり、SK333 より古い。平面形は東辺・南辺が直線的で北辺・西辺には丸みがあるため、不定な形状である。

埋土　暗褐色土が 2 層堆積する。2 層は南西の壁際付近に堆積し、褐色土ブロックや炭化物を含む。

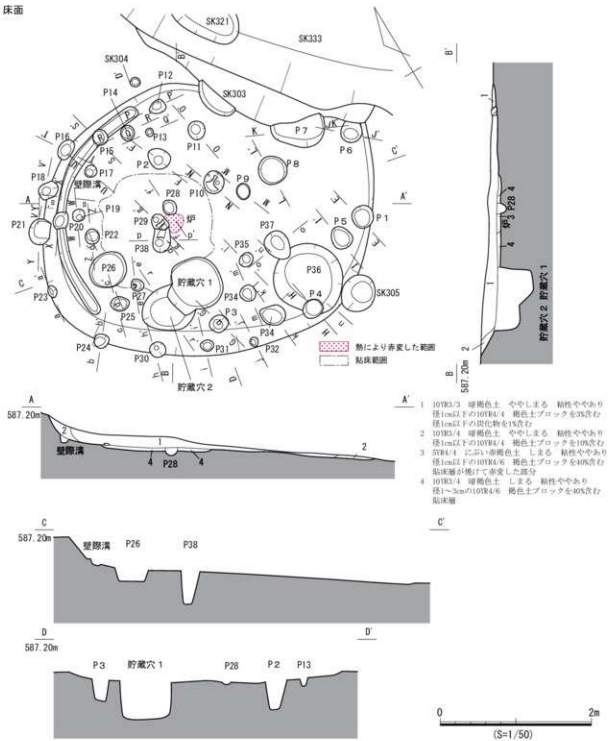


図 56　SI10 遺構図（1）

１層は北東の壁際から中央にかけて堆積し、褐色土ブロックを含む。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面は開く。壁の残存高は最大で0.18mである。

床面　ほぼ平滑であるが、南東方向に傾斜する。建物掘方底面中央のやや西寄りに貼床（４層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑38基、壁際溝１条、炉１基、貯蔵穴２基である。柱穴状の掘方で竪穴建物の掘方竪穴内の中央やや南東寄りを中心に同心円上に配置されるＰ１～Ｐ４と、同心円から外れるがＰ３とＰ４との間の距離とほぼ等間隔で柱状の掘方をもつP27を主柱穴とした。このうちＰ２・P27で柱痕跡を確認した。また、Ｐ５・P11・P24・P30・P37でも柱痕跡が認められる。壁際溝は竪穴掘方の西部底面に沿うように設置されていた。また、P16・P18・P21・P23・P24・P30～32は竪穴建物の掘方に沿って検出したことから、竪穴建物の上屋に関連する遺構の可能性がある。

貯蔵穴　竪穴床面南西寄りで貯蔵穴２基が重なり合う状況で検出した。重複関係は貯蔵穴１が新しい。

図57　SI10遺構図（２）

SI10の床面で検出した遺構の中では大きく、深さもあり、底面が平坦であることから貯蔵穴と判断した。貯蔵穴1の平面形は円形である。黒褐色土と褐色土が4層堆積する。貯蔵穴2の平面形は貯蔵穴1により一部が消失しているため、不明である。暗褐色土と褐色土が3層堆積する。

炉　建物の中央部西側に貼床の一部が赤変していることから、この部分を炉とした。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が出土した。1層でロ縁部から胴部まで残存した2個体分の土器（124・125）が、c層でロ縁部から胴部まで残存した1個体分の土器（121）が、いずれも外面を上にした状態で出土した。時期が特定できるものの中に中期初頭（127）のものがあるが、これ以外は前期後葉から末葉のものが多い。この他に貯蔵穴1から前期後葉の土器（119）が出土した。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

出土遺物　118はZ1群2c類である。波状口縁で外面に先端の細い施文具で刻目連続刺突文を施す。口縁端部は半截竹管状施文具により刻む。119はZ2群3a1類で外面の細い突帯上に先端の細い施文具で縦に短い刻みを施す。口縁端部は内外面ともに肥厚し、上端を棒状施文具の外側により刻む。120はZ2群3d類で外面に細い突帯を2条、内面に2条巡らせる。外面の突帯の口縁端部側には縦位の突帯を2条貼り付ける。121はZ2群9a類である。胴部は底部付近から直線的に開き、口縁部は短く外反する。外面に半截竹管状施文具による2本1単位の沈線を横位に4条巡らす。口唇部及び胴部上半は半截竹管状施文具による格子目文と山形文、胴部下半は半截竹管状施文具による沈線で縦位に区画し、その内側に格子目文を施す。122～125はZ2群12c類である。122・125は胎土や器厚や縄文が類似し、出土位置も同じことから、同一個体の可能性が高い。122・125は羽状縄文を地文とする。125は直線的に外形する器形で、口唇部には棒状施文具外側による刺突を施す。123は外面に斜縄文を施す。124は器厚が厚く、胎土に長石を多く含む。胴部は丸みをもち、口縁部は短く屈曲し内湾する。外面に斜縄文を施す。126はZ2群15類の複段内湾浅鉢の頸部で器厚が厚い。強く屈曲した頸部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線を浅く施す。127はC群4a類で波状の口縁部外面に3条の隆帯を貼り

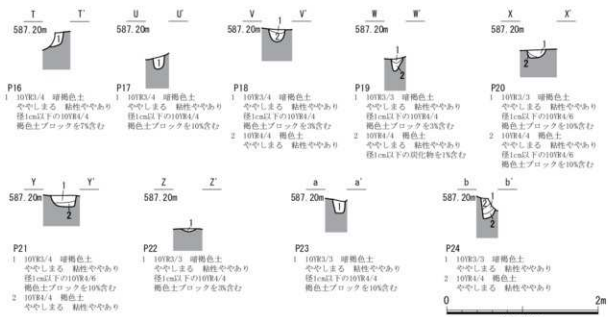


図58　SI10遺構図（3）

図59　SI10遺構図（4）

付け、その上に半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。128は棒状の石錐である。129は石匙で両面の丁寧な剥離調整後、縁辺下部に直線的な刃部を作り出す。130は磨石・敲石類で表裏面と側面に磨面が形成された後に、敲打を行う。

時期　縄文土器（121）が1個体分出土しているが、1層出土であり、竪穴建物の時期を特定できない。貯蔵穴1から前期後葉の土器（119）が出土していることや埋土から出土した土器から前期後葉の竪穴建物と判断した。

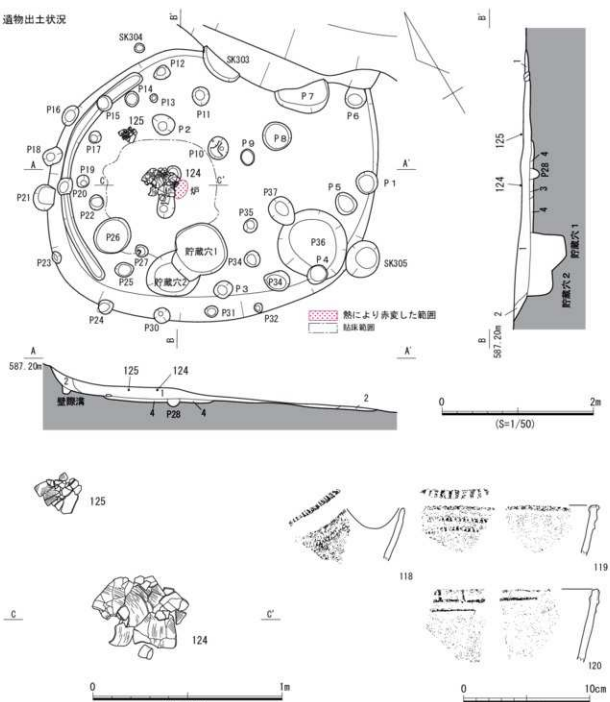


図60　SI10遺構図（5）・出土遺物（1）

図61　SI10出土遺物（2）

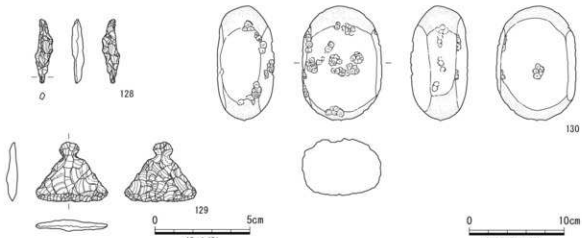


図 62　SI10 出土遺物（３）

SI11（図 63～図 69）

検出状況　AH16～17・AI16～18・AJ16～17 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北側で SI９、南東側で SI13 と先後関係があり、SI９より古く、SI13 より新しい。床面で検出した遺構を掘削後に貼床（５層）を除去し、整地土と思われる６層・７層掘削後に２面目の床面を確認した。１面目の床面（以下、「床面１」という。）と２面目の床面（以下、「床面２」という。）は掘方の規模・形状が変わらないことから、床面の貼り替えと判断した。掘り上がりの平面形は各辺がやや直線的で隅丸方形のように見えるが、床面２の壁際溝の配置から本来は円形の可能性がある。

埋土　床面１までの埋土は暗褐色土が４層堆積する。埋土中に１層は亜角礫、３層・４層は褐色土ブロックを含む。北西から南東方向に向かって傾斜する堆積が認められる。整地土は暗褐色土や褐色土が２層堆積する。６層は埋土中に褐色土ブロックや赤褐色土ブロックを含む。西壁際から南壁際にかけて７層、中央から東部にかけて６層が堆積する。

壁　Ⅲ層及び SI13 の埋土を掘り込む。壁面はやや開くが直線的である。壁の残存高は最大で 0.75m である。

床面　床面１はほぼ平滑である。掘方北部の床面に貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを多く含み、固くしまる。床面１で検出した遺構は土坑 14 基である。掘方が柱穴状で竪穴建物の掘方中央やや北寄りを中心に同心円上に配置されるＰ１・Ｐ５・Ｐ６と同心円からやや外れるが掘方が柱穴状であるＰ３を主柱穴とした。なお、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ６で柱痕跡を確認した。床面２はほぼ平滑である。掘方北西部に貼床（９層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを多く含み、固くしまる。床面２で検出した遺構は土坑 41 基、貯蔵穴３基、炉１基、壁際溝６条である。掘方が柱穴状で竪穴建物の掘方中央やや北寄りを中心に同心円上に配置されるＰ15・Ｐ18～Ｐ20 と、同心円から外れるが掘方が柱穴状であるＰ21 を主柱穴とした。また、Ｐ15・Ｐ17・Ｐ20・Ｐ21・Ｐ31・Ｐ34・Ｐ39・Ｐ46・Ｐ50 で柱痕跡を確認した。壁際溝は竪穴掘方内側に沿うように６条に分かれた状態で検出した。また、竪穴建物の掘方に沿うようにＰ35～Ｐ38・Ｐ45・Ｐ46 を検出した。これらの遺構は、掘方に沿って配置されていることから、竪穴建物の上部構造に関連する遺構の可能性がある。

貯蔵穴　床面２の南部で２基が重なり合う状況で検出した。また、北壁際で１基検出した。貯蔵穴１と貯蔵穴２の先後関係は貯蔵穴１が新しい。貯蔵穴１は平面形が楕円に近い形状である。暗褐色土が

３層水平に堆積し、埋土中に褐色土ブロックを含む。貯蔵穴２は平面形が不定な形状である。暗褐色土と褐色土が２層堆積し、１層は炭化物を含む。貯蔵穴３は平面形が不定な形状である。暗褐色土と褐色土が２層堆積し、１層は褐色土ブロックと炭化物、２層は褐色土ブロックを含む。

炉　床面１の南西寄りの床面で赤変した部分があり、この部分を炉とした。また、床面２のほぼ中央で床面を掘りくぼめた地床炉を確認した。掘方は浅い皿状で、にぶい赤褐色土が堆積する。掘方底面は熱による赤変はないことから埋土上面で火を焚いた可能性がある。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。ｅ・ｇ・ｉ・３・４・６層出土のものが多い。床面１までの埋土から出土した時期を特定できる土器は前期中葉から前期後葉までと中期前葉のものがあるが、前期後葉のものが多い。中期の土器（138・139）はａ層出土のもので２個体分まとまって出土した。床面１より下の整地土から床面２までの埋土から出土した時期を特定できる土器はすべて前期後葉のものである。

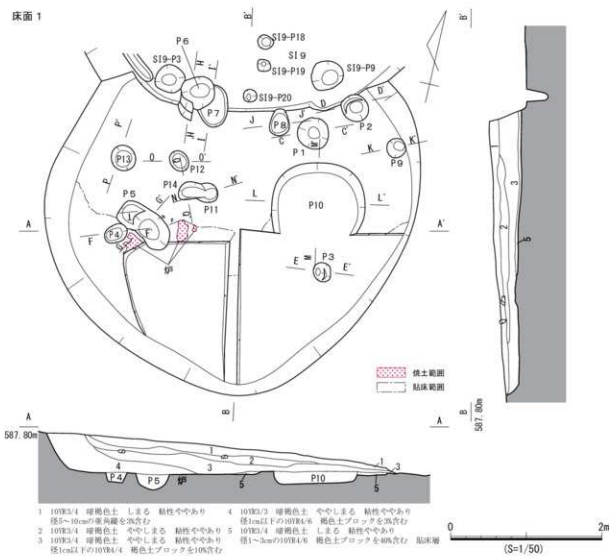


図 63　SI11 遺構図（１）

出土遺物　131～136 は床面１よりも上層で出土した土器である。131 はＺ１群４ｂ類で外面に櫛歯状施文具による刺突文と平行沈線文を施す。132 はＺ２群３ｃ類で外面の扁平な突帯に縄文を施す。口唇部には棒状施文具による連続刺突文を施す。133・134 はＺ２群５ｅ類である。133 は外面に半截竹管状施文具による肋骨文を施す。肋骨文は連続爪形文で描かれているが、１条のみコンパス文に近いものがある。134 はやや内湾する口縁部片で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を４条施す。135 はＺ２群７ｃ類で外面に半截竹管状施文具により集合沈線を施し、その上に浮線文を貼付する。136 はＺ２群 15 類の有稜浅鉢で稜部分の外面に先端の細い施文具による山形の刻みを入れ、胴部下半には

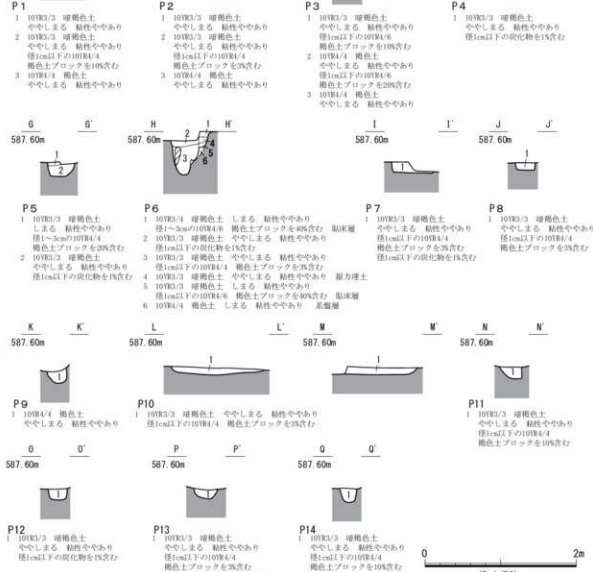
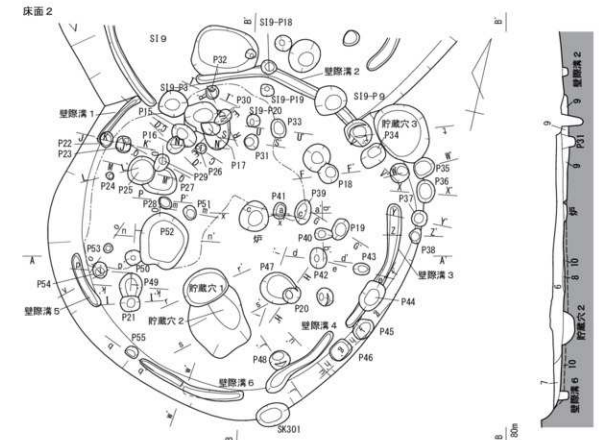


図 64　SI11 遺構図（２）



6　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり　径5cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを20%含む
　径1～3cmの5YR4/4　に占い赤褐色土ブロック（焼土）を3%含む　焼土
7　10YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　焼土
8　5YR4/4　に占い赤褐色土　しまりあり　粘性ややあり　焼土
9　10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを40%含む　貼床層
10　10YR4/6　褐色土　ややしまる　粘性ややあり　基盤層

図65　SI11遺構図（3）

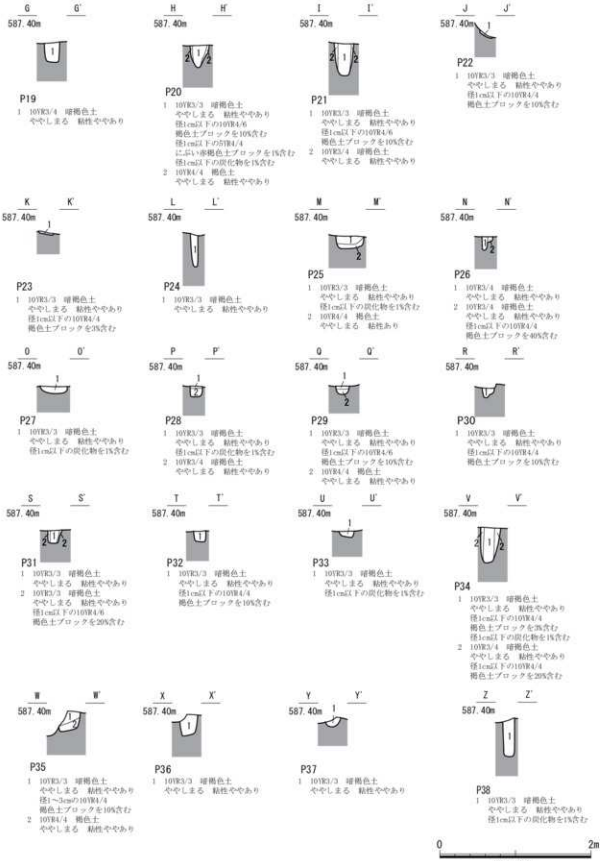


図66　SI11遺構図（4）

図 67　SI11 遺構図（5）

半截竹管状施文具による連続爪形文で木葉文を描く。137は整地土で出土した土器である。137はＺ２群６ａ類で幅広の半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。爪形文の条間には隆起線が作り出され、ここに先端の細い施文具で刺突文を施す。138はＣ群１ａ２類である。口縁部はキャリパー形で装飾的な突起が付く。口縁部及び胴部外面に隆帯による区画を施し、隆帯に沿う幅広の連続爪形文を充填する。頸部は半截竹管状施文具により縦方向の沈線を施す。底部に近い胴部は隆帯により楕円区画文を描き、その内側に沿って幅広の半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。139はＣ群８類で無文の鉢である。胴部は直線的で大きく外傾する。140は磨石・敲石類で表裏面に磨痕・線状痕が認められる。敲打は表裏面と下部に磨面形成後に行われている。

時期　床面１までの埋土から出土した時期を特定できる土器は、前期中葉から前期後葉のものと中期中葉のものがあるが、整地土で出土した時期を特定できる土器はすべて前期後葉のものであり、この時期に床面の貼り替えが行われた可能性が高いことから、前期後葉の竪穴建物と判断した。

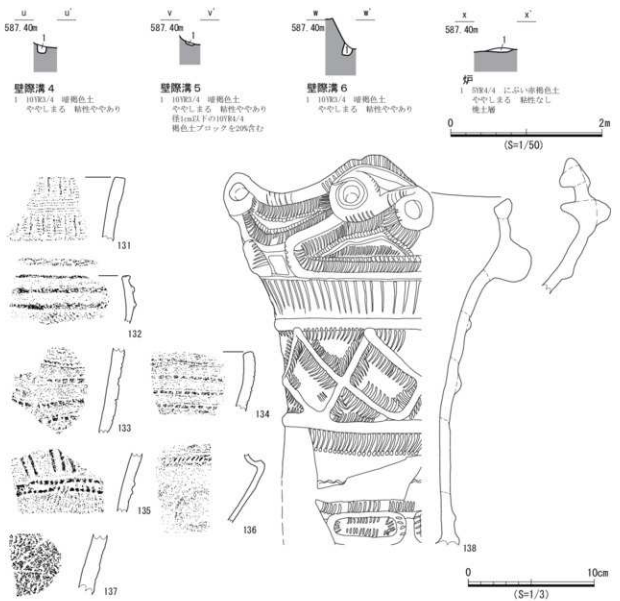


図68　SI11遺構図（６）・出土遺物（１）

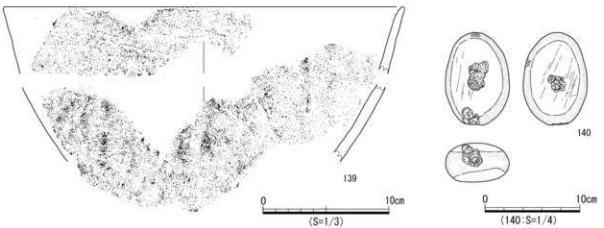


図 69　SI11 出土遺物（２）

SI12（図 70～図 79）

検出状況　AJ17 から AK18 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。東側で SI14、北側で SI13 と重複関係があり、これらよりも新しい。平面形は各辺が直線的であることから、方形に近い形状である。

埋土　黒褐色土と暗褐色土と褐色土が９層堆積する。１層から７層は黒褐色土及び暗褐色土、８層・９層は褐色土である。１層は掘方全体にかけて堆積し、亜角礫や炭化物を含む。１層は８～10 層を切るよう堆積するため別遺構の可能性がある。２層・３層は北部から南部にかけて堆積する。２層は亜角礫や炭化物、３層は亜角礫を含む。４層・５層は中央から南東部にかけて堆積し、４層は褐色土ブロック、５層は炭化物を含む。６層・９層は北壁際、８層は北壁際から西壁際に堆積し、６層・８層は褐色土ブロックを含む。７層は北西から南東方向に堆積し、褐色土ブロックや炭化物を含む。

壁　Ⅲ層及び SI13・SI14 の埋土を掘り込む。北壁面は緩やかに上がって２段になり、直線的に立ち上がり、ここでさらに段がある。西の壁面はやや開き、途中で緩やかになりながら皿状に開くため２段になり、その上は北壁と同様さらに１段テラス状になる。壁の残存高は最大で 1.08m である。

床面　ほぼ平滑であるが、中央部が窪む皿状になる。貼床（10 層）は床面やテラス部分や２段目のテラスの一部に認められる。貼床は暗褐色土が主体で、褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 28 基、貯蔵穴１基、炉１基である。柱穴状の掘方で竪穴建物の掘方床面及び１段目のテラスを含む床面のほぼ中央から同心円上に配置されるＰ１～Ｐ６を主柱穴としたが、五角形の配置の場合、Ｐ23 を含むＰ２～Ｐ５が主柱穴の可能性もある。なお、Ｐ９・Ｐ15・Ｐ16・Ｐ22・Ｐ23・Ｐ28 で柱痕跡を確認した。

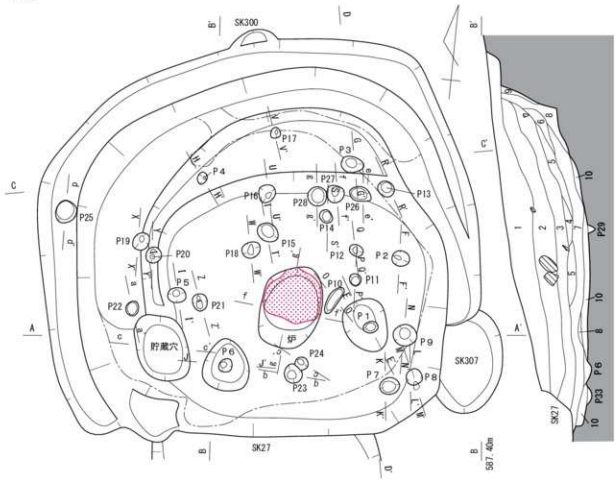
貯蔵穴　建物床面の南西寄りで貯蔵穴を検出した。竪穴建物内の遺構の中で大きい遺構で深さもあることから貯蔵穴とした。平面形は楕円に近い形状である。

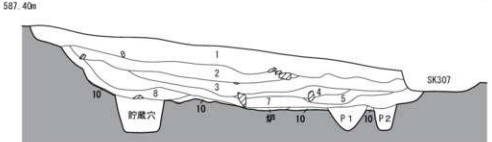
炉　建物床面のほぼ中央で炉を検出した。平面形は楕円に近い不定な形状である。床面を掘りくぼめた地床炉で、掘方は浅い皿状になる。暗褐色土・にぶい赤褐色土が２層堆積し、１層は炭化物を含む埋土、２層は焼土である。掘方底面と壁面は熱により赤変していた。

床下　貼床除去後、土坑 12 基、壁際溝３条を確検出し、Ｐ32・Ｐ35 では柱痕跡を確認した。壁際溝があるが柱配置は不明であるため、当初あった壁際溝が床の造り替えで埋められた可能性がある。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状況でａ～ｎ層、１・２・７・８層から出土した。埋土から出土した時期を特定できる土器は前期前葉から後葉のものであり、大半が後葉である。

床面





1　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径5～10cmの亜角礫を1%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
2　10YR2/3　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径5～20cmの亜角礫を7%含む　径1cm以下の炭化物を1%含む
3　10YR2/3　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径5～20cmの亜角礫を3%含む
4　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを10%含む
5　10YR2/2　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1cm以下の炭化物を1%含む
6　10YR3/3　暗褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを20%含む
7　10YR2/3　黒褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/6　褐色土ブロックを10%含む
　径1cm以下の炭化物を1%含む
8　7.5YR4/4　褐色土　ややしまる　粘性ややあり
　径1cm以下の10YR4/4　褐色土ブロックを10%含む
9　10YR4/6　褐色土　ややしまる　粘性ややあり
10　10YR3/3　暗褐色土　しまる　粘性あり
　径1～3cmの10YR4/6　褐色土ブロックを50%含む　貼床層

0　2m
(S=1/50)

図70　SI12遺構図（1）

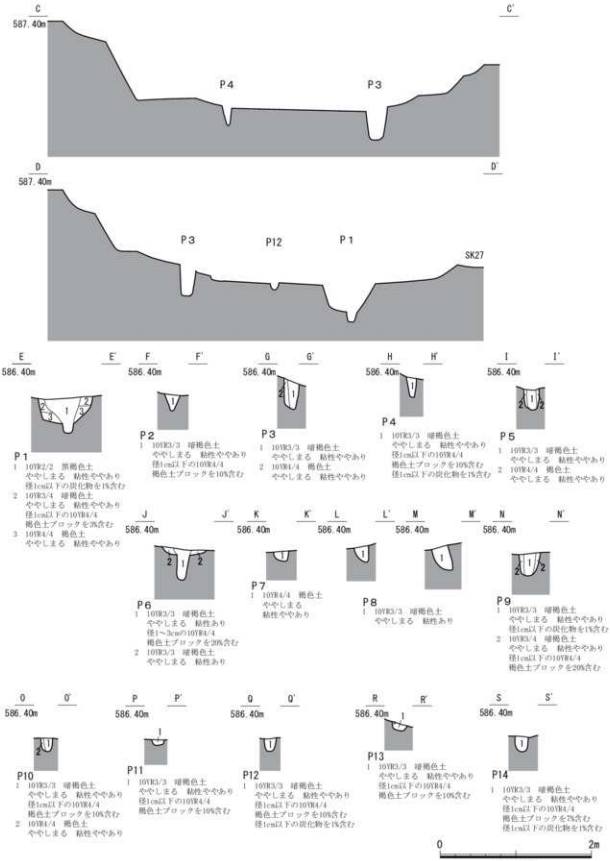


図71　SI12遺構図（2）

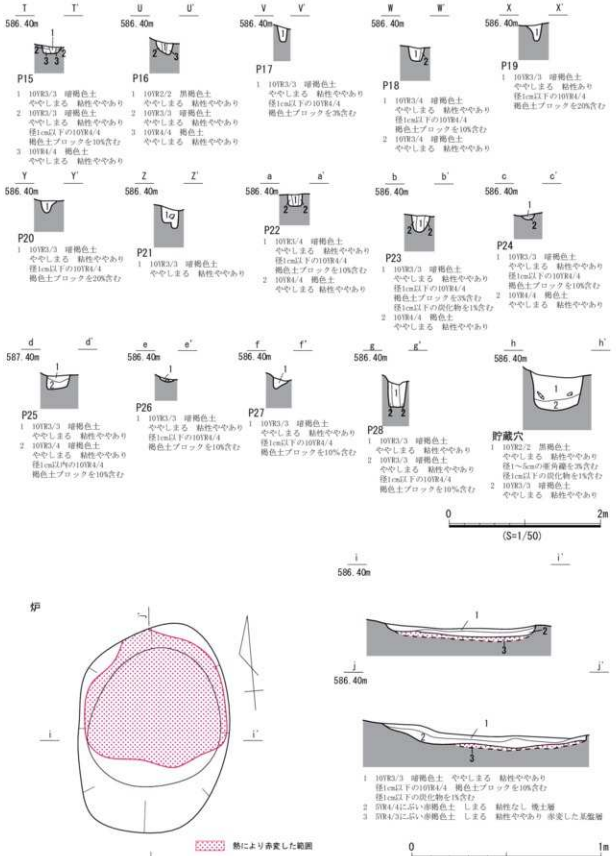


図 72　SI12 遺構図（3）

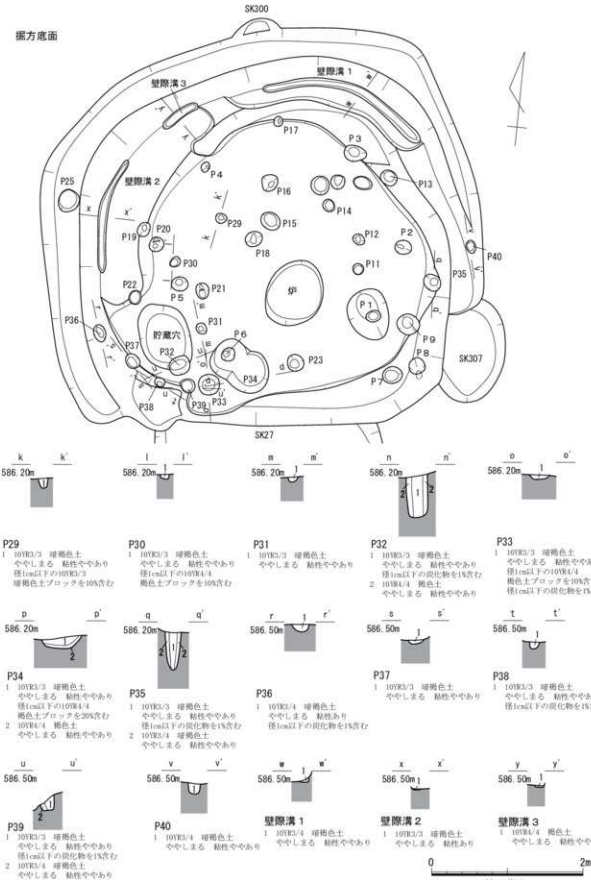


図 73　SI12 遺構図（4）

この他に貯蔵穴から 145・153、P34 から 166 といった前期後葉の土器が出土した。

出土遺物　141 はＺ１群１ｄ類の口縁部で胴部から直線的に開き、わずかに外反する。内外面を貝殻による条痕調整後、外面に幅広な半截竹管状施文具による逆Ｃ字状刺突文を３条施す。口唇部に棒状工具による刻みを入れる。142・143 はＺ２群１ａ類である。142 は外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を３条施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面にあたるため、列点状になる。143 は口縁部外面に半截竹管状施文具による鋸歯状文を施す。また、鋸歯状文より下に幅広の半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。144 はＺ２群２ａ類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を３条施す。口唇部に先端の細い施文具による縦の短い刻みを施す。145～149 はＺ２群３ａ１類である。145 は外面に細い突帯上に先端の細い施文具による縦の短い刻みを施す。口唇部には縦位の突帯を２条貼り付ける。146 は外面の扁平な突帯上に棒状の施文による縦の短い刻みを施す。147 の外面の扁平な突帯上に先端の細い施文具による縦の短い刻みを施す。148 はわずかに外反する口縁部の外面に横線文と一体化した枠線文を施す。扁平な突帯上には先端の細い施文具による縦の刻みを施す。149 は内湾する口縁部の外面に横線文を施す。扁平な突帯上には先端の細い施文具による縦の刻みを施す。150～152 はＺ２群３ａ２類である。150 は括れ部分の外面に横方向の突帯を２条貼り付け、突帯上に斜めの長い刻みを入れる。括れよりも上の部分には木葉文を施す。木葉文と横線文の間には赤彩が認められる。151 はやや内湾する口縁部の外面に横方向に２条突帯を貼り付け、突帯上に斜めの長い刻みをハの字状に入れる。口唇部は肥厚し、外面に半截竹管状施文具の内側により刻みを入れる。152 は外面に羽状縄文を施し、その上に横方向に低い突帯を貼り付け、突帯上に斜めの長い刻みを入れる。153・154 はＺ２群３ｂ類である。153 は内湾する口縁部の外面に２条単位の横線文と一体化した幅広の枠状文を施す。口唇部に近い１条の突帯には、半截竹管状施文具による押し引きを施す。154 は胴部の括れ部分の外面に３条の低い突帯を貼り付け、突帯には半截竹管状施文具による押し引きを施す。155～159 はＺ２群３ｄ類である。155 は内湾する口縁部の波頂部の外面に二条の横線文と一体化した縦位の突帯を貼り付ける。156 はやや内湾する口縁部の外面に縄文を施し、その上に３条の横線文を施す。157 は内湾する口縁部で、外面に３条の横線文と一体化した縦位・斜位・弧状の突帯を貼り付ける。158 はやや内湾する口縁部の外面に縄文を施し、その上に横線文と一体化した弧状の突帯を貼り付ける。159 は内湾する口縁部の外面に縄文を施し、その上に３条の横線文を施す。160 はＺ２群４ａ類で外面に扁平な突帯による２条の横線文を施し、その上を突帯よりの狭い半截竹管状施文具により押し引きする。口唇部には棒状施文具による刺突を施す。161 はＺ２群５ｂ類で外面に縄文と１条の突帯と円形竹管状施文具による円形刺突文を施す。162 はＺ２群５ｅ類で直線的に外傾する口縁部の外面に幅の狭い半截竹管状施文具による連続爪形文で多重縦区画菱形文を施す。163 はＺ２群５ｆ類である。胎土に雲母を多く含み、外面に半截竹管状施文具による浅い平行沈線で上孤肋骨文を施す。164～166 はＺ２群６ｃ類である。164 は直線的に外傾する口縁で外面に半截竹管状施文具による浅い平行沈線で菱形文・弧線文を施す。165 は波状口縁で口縁部が直線的に外傾する。胴部の括れ部分の外面に半截竹管状施文具により横線文を施す。口縁部には半截竹管状施文具による浅い平行沈線で菱形文・弧線文を施す。胎土や器厚や文様が 164 と類似することから、同一個体の可能性がある。166 は外面に４本の横線文を施し、その間に半截竹管状施文具による浅い平行沈線で横位矢羽根状文を入れる。167 はＺ２群 12ａ類で直線的に外傾する。外面に羽状縄文を施し、口唇部は半截竹管状施文具の内側で刻みを入れる。168・169

図 74　SI12 出土遺物（1）

はZ２群12ｃ類である。168は口縁部が内湾し、胴部上半は丸みをもつ。外面全体に羽状縄文を施す。口唇部の外面に棒状施文具か半截竹管状施文具の外側による刻みを入れる。169は外面に羽状縄文を施す。170はZ２群13ｃ類で斜縄文を施す。口唇部に細い粘土紐を貼り付け肥厚させ、上面に半截竹管状施文具による刻みを入れる。171～190はZ２群15類である。171は口縁部がやや内湾する浅鉢である。口唇部は肥厚し、短く内屈する。外面に半截竹管状施文具により連続爪形文で木葉文を描く。外面の木葉文の間と内面の口縁部に赤彩が認められる。172は口縁部がやや外反する浅鉢である。外面に

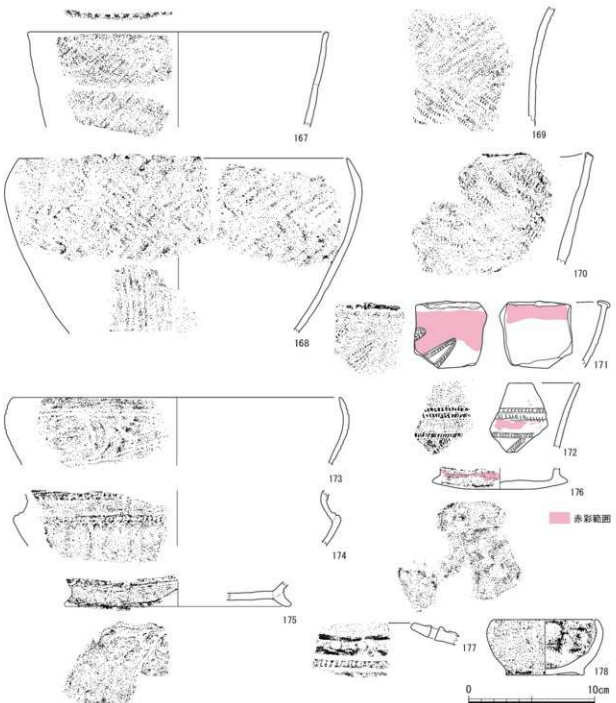


図75　SI12出土遺物（２）

半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文と木葉文を描く。外面の横線文と木葉文の間に赤彩が認められる。173 は口縁部が内湾する浅鉢で、外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で多重渦巻文を描く。174 は有稜浅鉢で外面の稜部分に先端の細い施文具による刻みを入れ、胴部下半に半截竹管状施文具による連続爪形文で木葉文を描く。175・176 は浅鉢の底部で接地部が外側に大きく張り出す。底部外面に指頭圧痕が残る。176 は外面に赤彩が認められる。177 は浅鉢の口縁部で外面の沈線内を穿孔する。沈線と沈線の間にある隆起線には半截竹管状施文具内側による斜めの長い刻みや縦の短い刻みを入れる。178 は小型の内湾浅鉢で底部の接地部が外側に張り出す。179・180 は複段内湾浅鉢で口縁部下に多孔円孔が巡る。器厚が薄く、底部は丸底となる。181 は内湾浅鉢で口縁部が屈曲し内傾する。口縁部の外面に屈曲した上下に突帯を貼り付け、半截竹管状施文具の内側による斜めに長い刻みを入れる。胴部の外面にも突帯を貼り付け、半截竹管状施文具内側による斜めに長い刻みを入れる。182 は複段内湾浅鉢の胴部で外面に木葉文を施す。内面の屈曲部付近には赤彩が認められる。183 は小型の内湾浅鉢である。外面に扁平な突帯による横線文や弧状文を施し、突帯上を縦の短い刻みを入れる。内面に扁平な突帯による横線文を施し、突帯上を鋸歯状の短い刻みを入れる。184・185 は有稜浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。沈線の内側は先の細い施文具で縦に短い刻みを入れる。186 は有稜浅鉢で外面に半截竹管状施文具による連続刺突文で横線文を施す。187 は内湾浅鉢で胴部上半は外面に突帯による横線文を２条巡らせ、胴部中央には半截竹管状施文具による

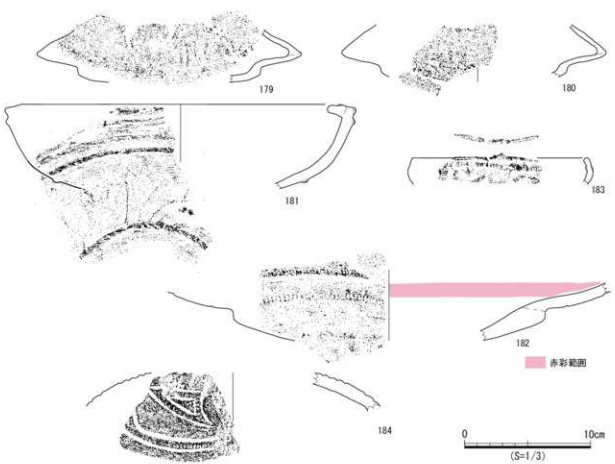


図 76　SI12 出土遺物（３）

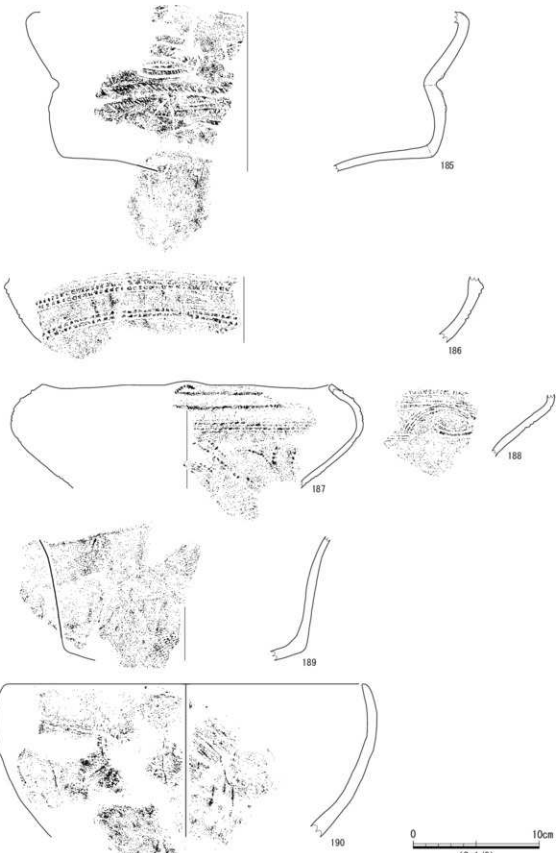


図 77　SI12 出土遺物（4）

3条の横線文、胴部下半は半截竹管状施文具による連続爪形文で蕨手文を描く。188は有稜浅鉢で外面に半截竹管状施文具により蕨手文を描く。189は有稜浅鉢で外面の稜よりも下半に縄文を施す。190は直立浅鉢で胎土に繊維を多く含む。内外面に横方向のナデ調整を施す。191は凹基無茎石鏃である。横長な剥片を素材とし、縁辺を剥離調整する。裏面に主要剥離面が大きく残る。192・193は石錐である。192は縁辺右部を直線的に剥離調整し、錐部作り出す。裏面に主要剥離面が大きく残る。193は全体を棒状に剥離調整する。摘み部は欠損している。194・195は石匙である。194は縦長剥片を素材とし、縁辺下部にやや外湾する刃部を作り出す。裏面に主要剥離面が大きく残る。195は原礫面を残す剥片を素材とし、縁辺下部に外湾する刃部を作り出す。196・197はスクレイパーである。196は縦長剥片を素材とし、縁辺右部に直線的な刃部を作り出す。表面に節理面が残る。197はやや横長の剥片全周に剥離調整を行い、直線的な刃部や外湾する刃部を作り出す。表面に原礫面が残る。198は打欠石錘である。楕円礫の長軸両端を敲打により抉り部を作り出す。199は短冊形の打製石斧である。刃部に近い縁辺を剥離により整形する。表裏面に大きく原礫面を残す。200～204は磨石・敲石類である。200は表面に敲打のよる凹部、裏面に磨痕・線状痕・敲打痕を残す。201～203は長楕円礫を利用する。

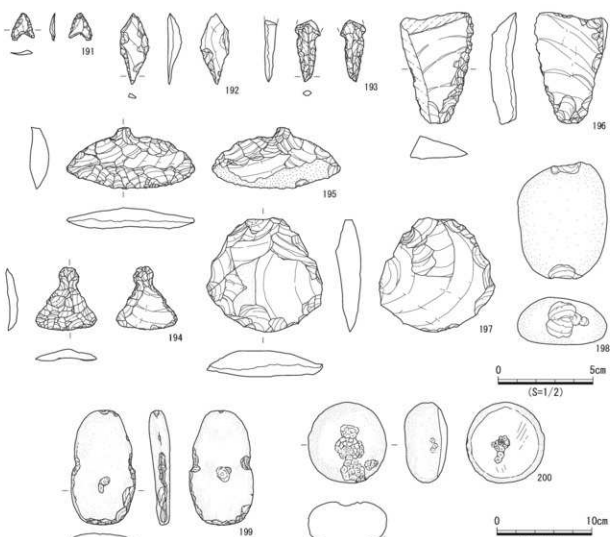


図78　SI12出土遺物（5）

201・202 は右側面に剥離痕・敲打痕・磨痕、203 は敲打痕・磨痕を残す。いずれも潰れた敲打痕も認められることから、敲打を繰り返すことで磨面が形成されたと考えられる。204 は長楕円礫を利用し、その左側面に磨痕を残す。潰れた敲打痕であることから、敲打を繰り返すことで磨面が形成されたと考えられる。裏面に敲打による凹部が認められる。205 は平板の石皿で表面に磨面を残す。

時期　貯蔵穴及びP32 から出土した土器（145・153）が前期後葉であることや竪穴建物の埋土から出土した土器の大半が前期後葉であることから、前期後葉の竪穴建物と判断した。

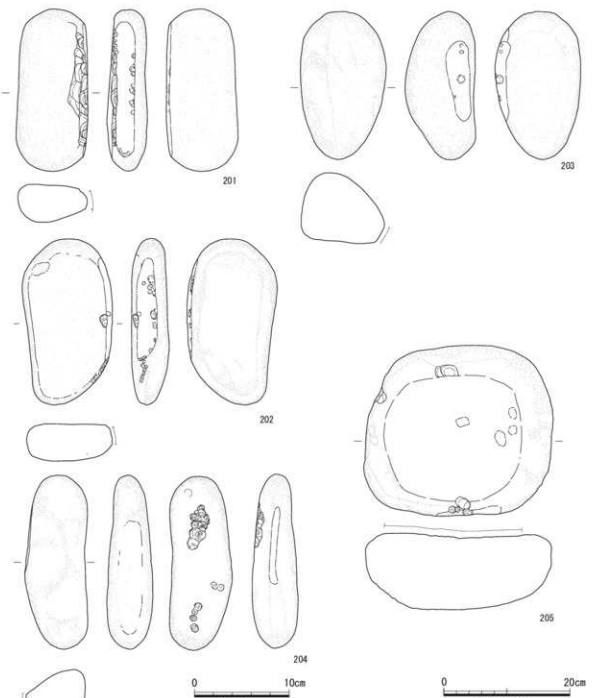


図 79　SI12 出土遺物（6）

SI13（図 80～図 82）

検出状況　AH17～AI18 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北東側で SI９・SI11、南側で SI12・SI14 と重複関係があり、いずれよりも古い。平面形は、残存する東辺の一部は直線的であるが、西辺の南部には丸みがあるため南北方向に長い不定な形状である。北東隅は段差がありテラス状になるが、その内側に沿う壁際溝は丸みがあるため、本来の建物の掘方については不明な点が多い。

埋土　暗褐色土が４層堆積する。１層は亜角礫、２層は亜角礫と褐色土ブロック、３層は褐色土ブロックを含む。テラスの北部と南壁際に４層、南部に３層、北壁際・西壁際から中央にかけて２層、テラスから南部にかけて１層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込み、壁面は開く。壁の残存高は最大で 0.50ｍである。

床面　ほぼ平滑であるが、東方向に傾斜する。建物の西側の一部に貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑８基、貯蔵穴１基、壁際溝２条である。竪穴内の位置関係や掘方の形状からＰ１～Ｐ３は主柱穴の可能性があるが、掘方の平面形状からは判断できない。Ｐ１・Ｐ３で柱痕跡を確認した。壁際溝は竪穴掘方内側に沿うように西側で確認した。

貯蔵穴　建物西部の壁際溝の外側のテラス部分で検出した。重複関係からテラス部分に貯蔵穴を作出後、壁際溝が掘られたと考えられる。平面形は不定形である。竪穴建物内の遺構の中で最も大きいことから貯蔵穴とした。暗褐色土と褐色土が３層堆積し、２層・３層は埋土中に褐色土ブロックを含む。

炉　確認できなかった。

床下　断ち割り部分以外の貼床を除去しなかったため、床下の構造は不明である。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器 57 点が散在した状況で出土した。埋土から出土した時期を特定できる土器は中期前葉のものと前期前葉から後葉のものがあるが、大半は前期後葉である。中期の土器（212～214）は３点出土したが、SI９・SI11・SI12・SI14 との重複関係から本遺構は前期の遺構と考えられるため、埋没過程で混入した可能性が高い。

出土遺物　206 はＺ１群４ｂ類の直線的に外傾する口縁部で外面に櫛歯状施文具による刺突列と波状の集合沈線を施す。また、口縁端部には櫛歯状施文具による刺突を施す。207 はＺ２群３ａ１類の胴部で括れよりも上方の外面に貼り付けた細く扁平な突帯に縦の短い刻みを入れ、括れの下方に粒の長い縄文を横位に施す。208 はＺ２群３ｄ類で内湾する口縁部の外面に扁平な突帯による横線文を施す。209 はＺ２群６ａ類の直線的に外傾する口縁部で外面に幅広の突帯による横線文を施し、突帯と突帯の間は半截竹管状施文具により連続爪形文を施す。210 はＺ２群６ｃ類で外面に縄文地に幅広の半截竹管状施文具による平行沈線を施す。211 はＺ２群 15 類で内湾浅鉢の口縁部で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線文を施す。横線文より上には多孔円孔が巡る。212・213 はＣ群３ａ２類である。212 は内湾する口縁部で外面に隆帯を貼り付け、その上に半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。213 は外面に渦巻状の隆帯に沿う半截竹管状施文具による平行沈線を器面全体に施す。214 はＣ群４ａ類でやや外反する口縁部の外面に扁平な隆帯を３本貼り付け、隆帯上を隆帯幅よりも狭い半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。215 は石錐である。縦長の剥片を素材とし、両面に丁寧な剥離調整により棒状に加工する。216 は石匙で縦長な剥片を素材とし、縁辺下部に直線的な刃部を作り出す。

時期　重複する SI９・SI11・SI12・SI14 より古いことから前期後葉以前と判断した。

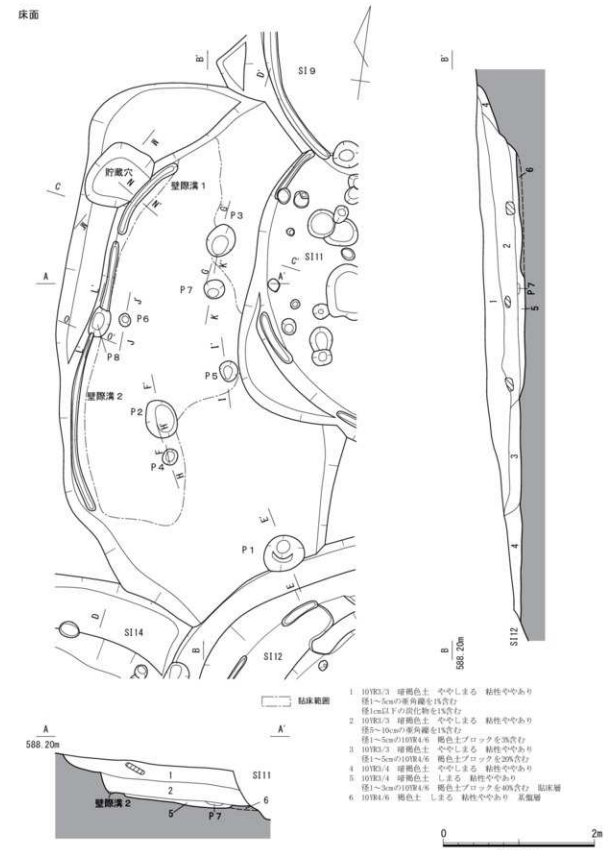


図80　SI13遺構図（1）

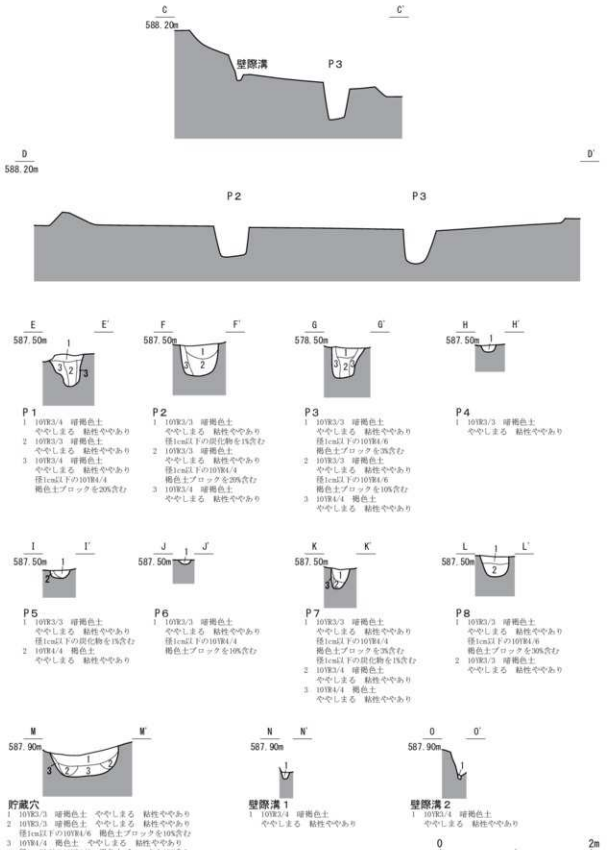


図81　SI13遺構図（2）

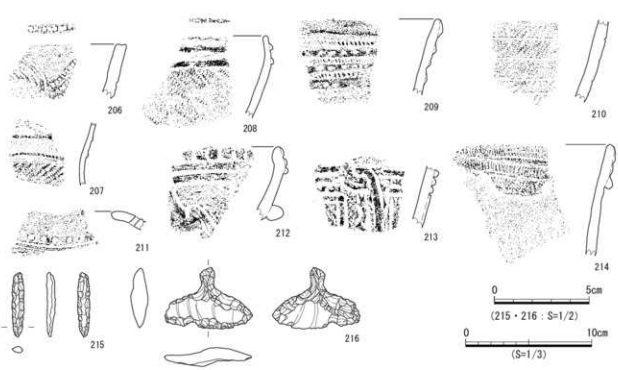


図 82　SI13 出土遺物

SI14（図 83～図 87）

検出状況　AJ16～AK17 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。東側で SI12、西側で SK33、南西側で SK291 と重複関係があり、いずれよりも古い。SI12 と重複するが、平面形は残存する各辺が直線的であることから方形に近い形状と考える。

埋土　暗褐色土が４層堆積する。１層・３層は炭化物、２層は褐色土ブロックや炭化物、４層は褐色土ブロックを含む。

壁　Ⅲ層を掘り込む。壁面は底面からやや開いて立ち上がり、途中で角度が変わり緩やかになりながら皿状に開くため２段となり、北西隅のみ３段となる。壁の残存高は最大で 0.60ｍである。

床面　ほぼ平滑で、南方向に傾斜する。竪穴掘方の北西部・中央部・南西部に貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で、褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 27 基、炉１基、貯蔵穴１基である。壁際溝は確認できなかった。柱穴状の掘方をもち竪穴建物の掘方床面と１段目のテラスの境に配置されるＰ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６、Ｐ４の炉を挟んだ反対側に設置されるＰ５、Ｐ４・Ｐ５の軸と直交するラインとなるＰ３―Ｐ２を含め主柱穴とした。なお、P11・P21・P27 で柱痕跡を確認した。

炉　建物ほぼ中央部南西寄りで炉を検出した。掘り込みのある地床炉で、掘方は浅い皿状になる。底面は熱による赤変した範囲が認められる。平面形は楕円に近い形である。黒色土・暗褐色土・赤褐色土・にぶい赤褐色土が５層堆積する。１層・５層は焼土を含む層である。３層は焼土である。

貯蔵穴　建物南西隅で貯蔵穴を検出した。平面形は不定形である。炉以外の竪穴建物の床面で検出した遺構の中では最も大きいことから貯蔵穴と判断した。黒褐色土が２層堆積し、２層中に褐色土ブロックを含む。

遺物出土状況　土器や石器のほとんどは散在した状態で出土したが、竪穴建物のほぼ中央の３層中で

浅鉢（227・228）が２個体分出土した。

出土遺物　217・218 はＺ２群２ｃ類である。216 は内湾する口縁部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線文や弧線文を施す。217 は直線的に外傾する口縁部の外面に半截竹管状施文具による平

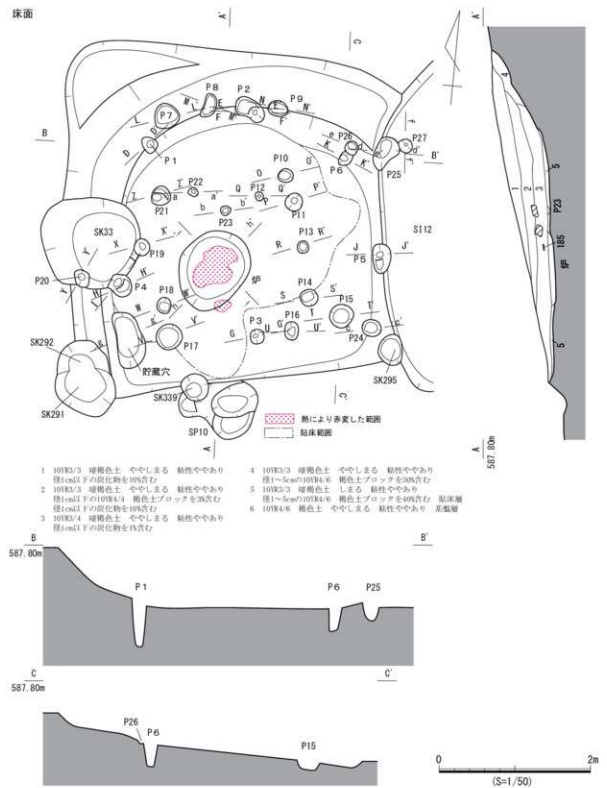


図 83　SI14 遺構図（１）

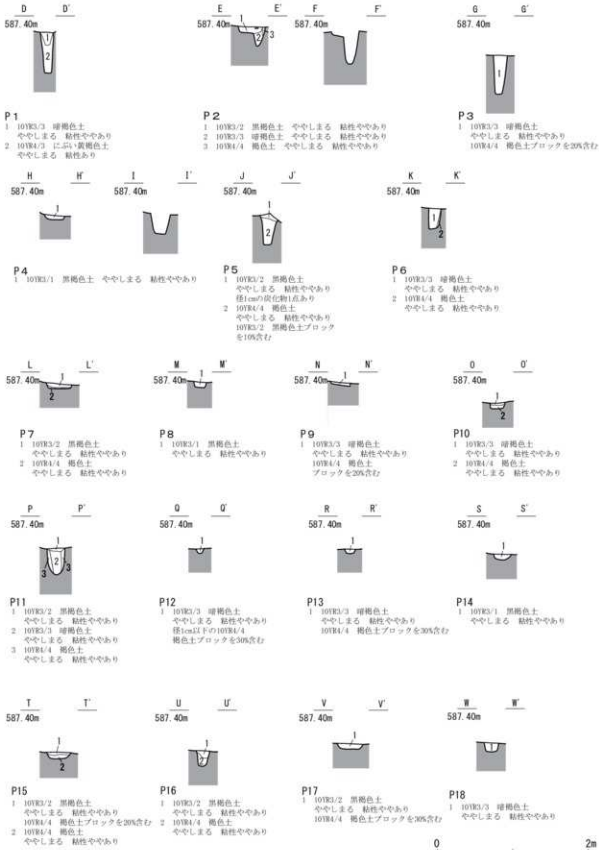


図84　SI14遺構図（2）

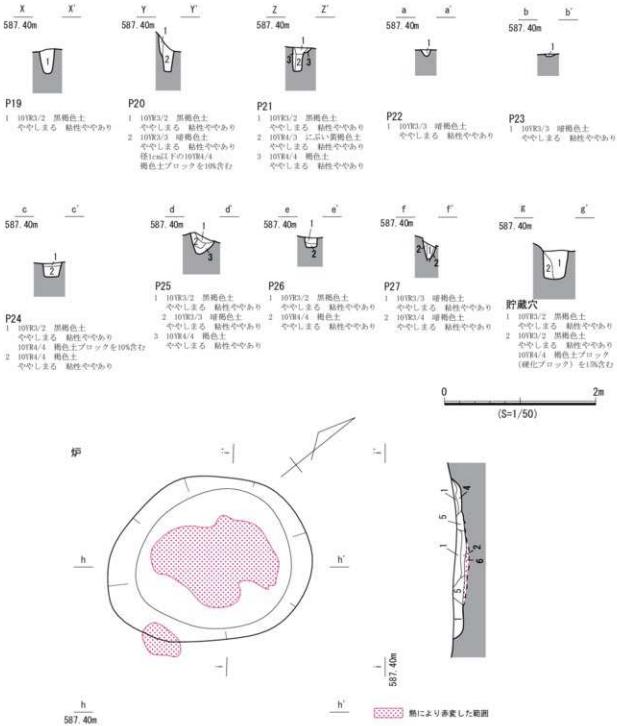


図 85　SI14 遺構図（３）

行沈線で横線文や弧線文を施す。219はＺ２群３ａ３類で内湾する口縁部の外面に突帯による横線文や蕨手文を施し、突帯上に半截竹管状施文具による刻みを入れる。胎土に雲母を多く含む。220～222はＺ２群３ｄ類である。220は直線的に外傾する口縁部の外面に細い突帯による横線文を施す。口唇部は短く内屈し、細い突帯を貼り付ける。221は直線的に外傾する口縁部の外面に細い突帯による２条の横線文を施す。内面に細い突帯による１条の横線文を施す。222は内湾する口縁部の外面に突帯による３条の横線文を施す。223はＺ２群６ｃ類で内屈する口縁部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線で

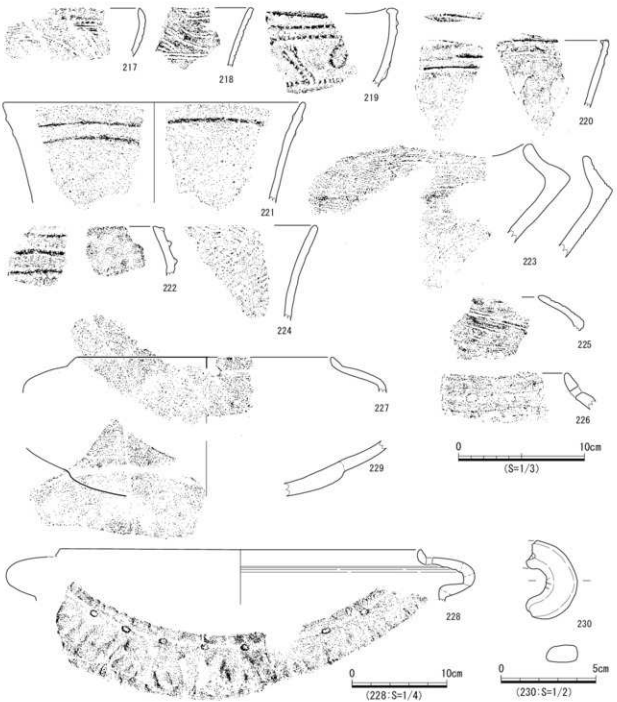


図 86　SI14 出土遺物（１）

横線文を施す。224 はＺ２群 12ｃ類で直線的に外傾する口縁部の外面に羽状縄文を施す。225～229 はＺ２群 15 類である。225 は複段内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で区画線付木葉文を施す。226・227 は複段内湾浅鉢で口唇部が短く屈曲する。屈曲部の外面に半截竹管状施文具による浅い沈線を施し、沈線内に多孔円孔が巡る。228 は複段内湾浅鉢で口唇部は短く屈曲し、直立する。屈曲部に多孔円孔が巡る。229 は複段内湾浅鉢で胎土に雲母を多く含む。230 は勾玉形の土製品である。231 は楔形石器で縁辺左部・上部・下部に階段状剥離が認められる。232～234 は石皿である。232・233 は有縁の石皿で表面に敲打痕・磨痕を残す。234 は平板の石皿で表面に磨痕を残す。

時期　竪穴建物の埋土３層中で出土した土器（227・228）及びSI12 より古いことから、前期後葉以前と判断した。

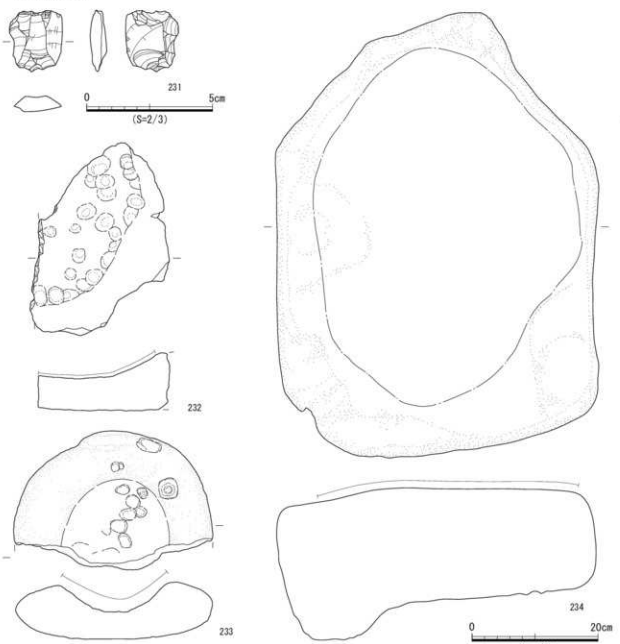


図 87　SI14 出土遺物（２）

SI15（図 88～図 92）

検出状況　AI15～AJ16 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北側で SK210 と重複関係があり、SK210 よりも新しい。また、北西側で SK202・SK350、南東側で SK28・SK290、南西側で SZ１の周溝と重複関係があり、これらよりも古い。平面形は北東の隅から東にかけては直線的であるが、それ以外は丸みを帯びる不定な形状をとる。

埋土　暗褐色土が４層堆積する。１層・４層は褐色土ブロック、２層・３層は褐色土ブロックと炭化物を含む。東部に１層・４層、北部から中央にかけて２層、南西隅以外の残存する掘方全体に３層が堆積する。

壁　Ⅲ層を掘り込む。壁面は北壁・西壁は直立し、東壁は浅く、外に開く。壁の残存高は最大で 0.45 mである。

床面　ほぼ平坦である。竪穴掘方の南東部を除く部分に貼床（５層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 43 基、壁際溝２条、炉１基である。この他に SK288 底面で検出したＰ４・Ｐ44～Ｐ46 を SI15 に関連する遺構として掲載した。竪穴建物の掘方中央を中心とした同心円上に配置されるＰ１～Ｐ４を主柱穴と判断した。また、主柱穴を６本と想定した場合はＰ１～Ｐ４とＰ35・Ｐ43 またはＰ38・Ｐ20 が主柱穴の可能性がある。なお、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ21・Ｐ23・Ｐ26・Ｐ28・Ｐ35・Ｐ37・Ｐ43 で柱痕跡を確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

炉　建物のほぼ中央で炉を検出した。石組の平面形は、西辺は丸みをもち、北辺・東辺・南辺は直線的である不定な形状である。円形に浅く掘り込んだ掘方の西辺に長楕円礫１つを置き、北・南辺には亜角礫１つを直線的に、東辺には亜角礫２つを若干弧状になるように置いて石囲いを形成する。炉石の内側は熱により赤変が認められた。石囲い内の埋土は暗褐色土が１層堆積する。２層は掘方埋土が赤変した焼土層、３層は炉石を固定するための掘方埋土である。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。埋土から出土した時期を特定できる土器は中期前葉から中葉のものと前期後葉のものがあるが、中期の土器は８点と少なく、大半は前期後葉のものである。そのため、中期の土器は中期の遺構の見落としか、埋没過程で混入した可能性が高い。この他にＰ48 の３層から土器（240・241・243）がまとまって出土した。

出土遺物　235 はＺ２群１ａ類で外面に幅広の半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。236～238 はＺ２群２ａ類である。236・237 は直線的に外傾する口縁部の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を口縁部に並行する方向に間隔を空けて２条施す。238 は外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を間隔を空けて２条施す。239 はＺ２群３ｃ類で外反する口縁部の外面に突帯を貼り付け、突帯上に縄文を施す。240・241 はＺ２群 12ｂ類である。240・241 は胎土に繊維を含む。口縁部と胴部の外面に縄文を横位に施した後に、口縁部と胴部の間の縄文を横方向のナデ調整により消す。内面には横方向の条痕調整を施す。240・241 は接合しないが、いずれもＰ34 から出土していることや胎土や器厚や調整が類似していることから同一個体の可能性が高い。242 はＺ２群 12ｃ類で外面に地文として無節の縄文を転がす。243 はＺ２群 14 類で胴部外面に羽状縄文を施す。244 はＣ群１ａ３類で波状部の外面に鶏冠状の隆帯を貼り付ける。245 はＣ群１ａ２類で外面に隆帯による区画の内側を先端の細い施文具により刻む。246・247 は石匙である。246 は横長な剥片を素材とし、両面を丁寧に剥離調整し縁辺下

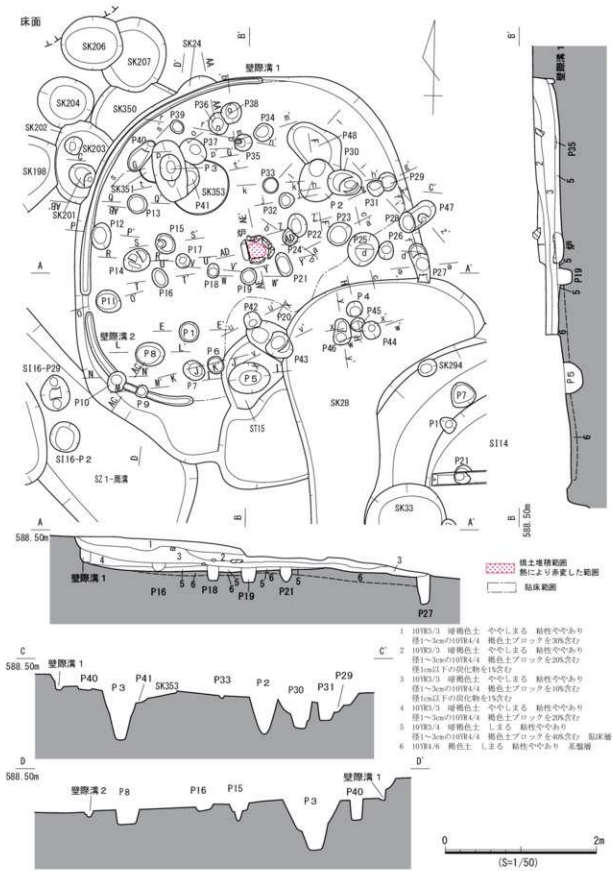


図88　SI15遺構図（1）

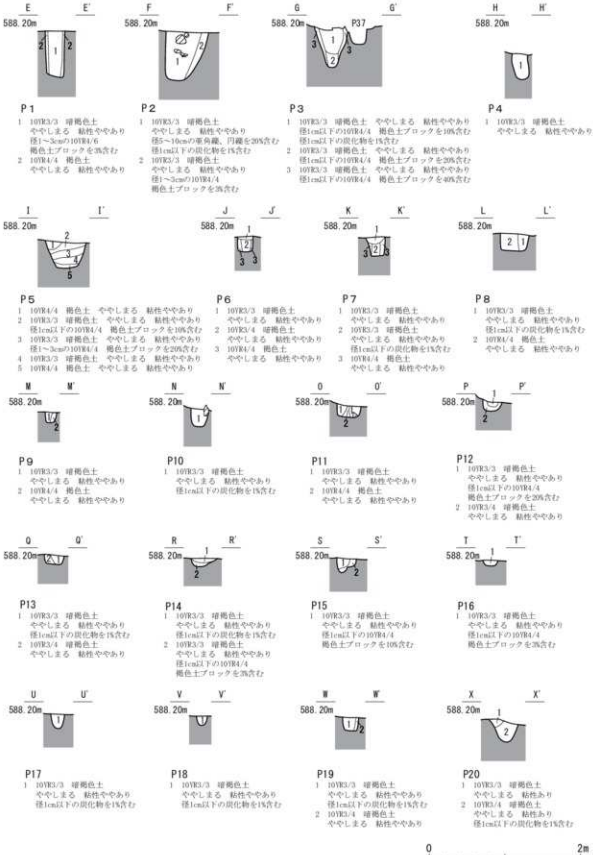


図 89　SI15 遺構図（2）

部に直線的な刃部を作り出す。247は横長な剥片を素材とし、表面を粗めに整形し縁辺下部に直線的な刃部を作り出す。248・249は磨製石斧である。248は小型の定角式磨製石斧で基部が欠損する。249は定角式磨製石斧で刃部に使用による刃こぼれが残る。250は平板状の石を利用した砥石である。表裏面に磨痕・線状痕を残す。

図90　SI15遺構図（3）

時期　埋土出土土器の大半が前期後葉であることや南東部で重複するSK28より古いSI14が前期後葉であることから、前期後葉の竪穴建物と判断した。

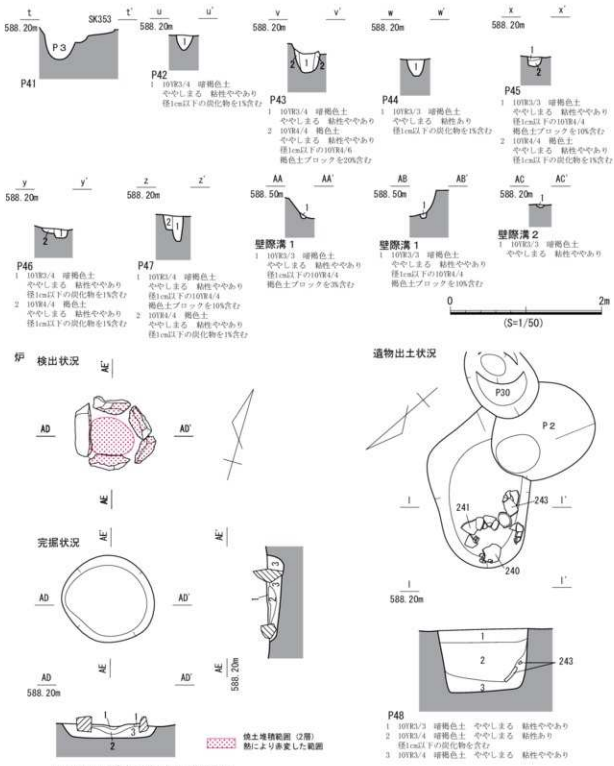


図91　SI15遺構図（4）

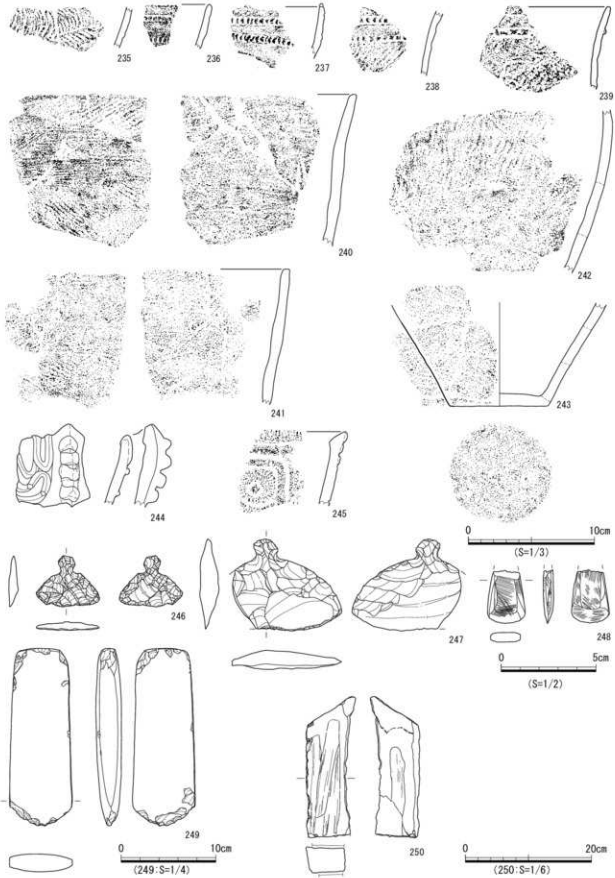


図 92　SI15 出土遺物

SI16（図 93～図 96）

検出状況　AJ14～AK15 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北西側で SI17、北東側で SZ１の周溝、西側で SZ１の主体部と SI18、南側で SK280・SK281 と重複関係があり、いずれの遺構よりも古い。平面形は遺構の重複で各辺が消失しているため、不明である。

埋土　黒褐色土と暗褐色土が２層堆積する。２層に褐色土ブロックを多く含む。

壁　Ⅲ層を掘り込む。残存部分では壁面は開く。壁の残存高は最大で 0.32m である。東辺はＳＺ１と重複する。わずかに竪穴建物の壁面を確認できたが、竪穴建物の掘方掘削時に誤認して掘り過ぎたため図化できなかった。

床面　ほぼ平滑で、南方向に傾斜する。主柱穴の内側に貼床（３層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 32 基、溝２条、壁際溝１条、炉１基である。柱穴状の掘方で竪穴建物の掘方中央を中心とした同心円上に配置されるＰ１～Ｐ６を主柱穴と判断した。Ｐ１－Ｐ２－Ｐ４－Ｐ６はほぼ等間隔であるが、Ｐ３・Ｐ６は主柱穴との間隔が狭い。この間隔で考えた場合、P32 も主柱穴の可能性がある。Ｐ１・Ｐ７・Ｐ９・P13・Ｐ25・Ｐ27・P30

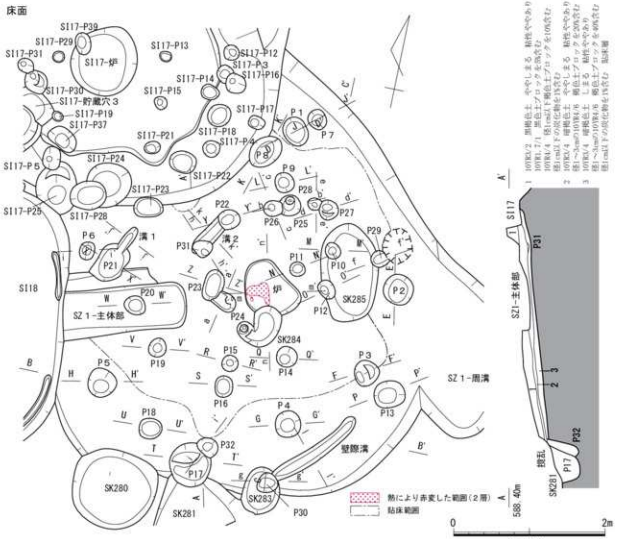


図 93　SI16 遺構図（１）

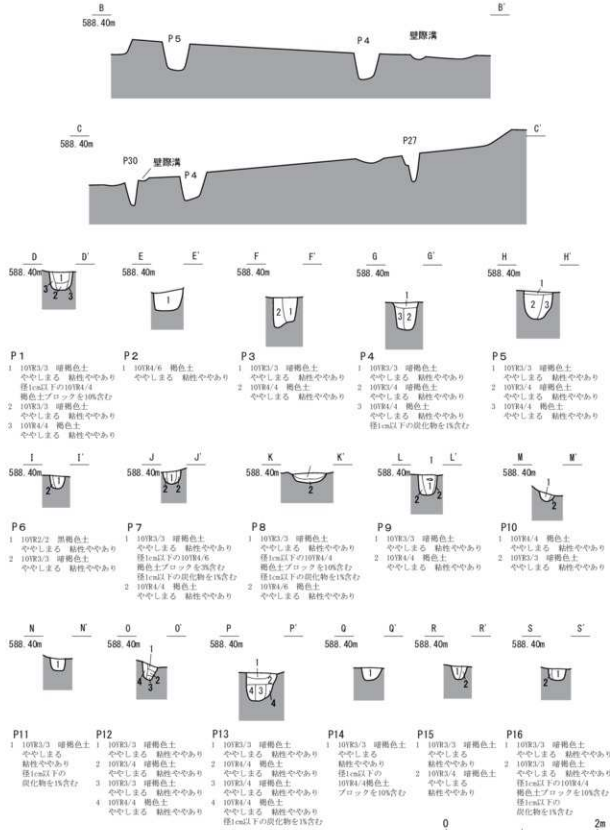


図94　SI16遺構図（2）

で柱痕跡を確認した。また、南東隅で壁際溝、北西部のP21の北東側、P22とP31の間で性格不明の溝を確認した。

貯蔵穴　確認できなかった。

図95　SI16遺構図（3）

炉　建物中央部やや東寄りで炉を検出した。不整形に浅く掘り込んだ土坑である。１層は焼土を多く含む層である。底面は、熱による赤変は認められなかったことから、２層は３層上面で火が焚かれたことにより、赤変した３層と考えられる。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。時期を特定できる土器は前期後葉のものである。

出土遺物　251・252 はＺ２群３ａ２類である。251 は外面に細い突帯による横線文を２条施し、突帯間と突帯よりも下位に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文を２条施す。突帯上に斜めの刻みを入れる。口唇部には半截竹管状施文具の内側で刺突を施す。252 は外面に突帯による横線文を２条施す。突帯上に斜めの刻みを入れる。253 はＺ２群２ｃ類で外面に半截竹管状施文具による平行沈線を施す。内面には赤彩が認められる。254 はＺ２群８類でほぼ直立する口縁の外面に結節浮線文を施す。255 は磨石・敲石類で楕円礫を利用し、その左側面に敲打痕・磨痕を残す。256 は有縁の石皿で窪んだ部分に磨痕を残す。

時期　重複する SI17 が前期後葉であることから前期後葉以前であり、竪穴建物の埋土から出土した土器から、SI17 とそれほど時期差はないと考えられる。

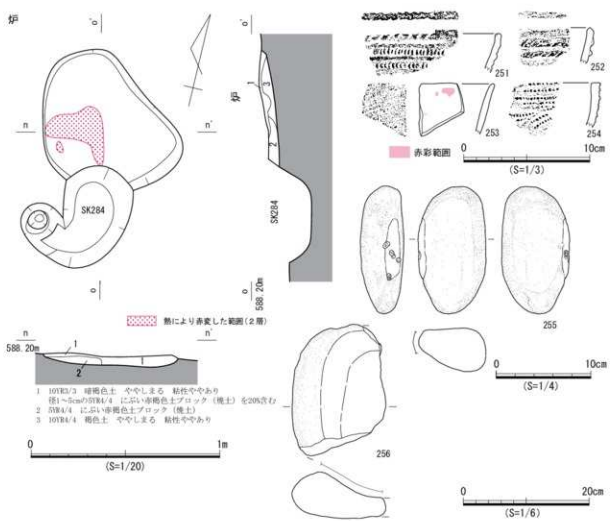


図 96　SI16 遺構図（４）・出土遺物

SI17（図 97～図 103）

検出状況　AI14～AJ15 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。西辺から東辺にかけて SZ１の周溝に切られるため埋土の上層がない部分がある。また、北側で SK189、南西側で SI18・SK276、南東側で SI16 と重複関係があり、SK276 より古く、SK189・SI16 よりも新しい。検出時は SI18 より SI17 の方が新しいとして先行して掘削したが、SI18 は石囲炉をもつ中期の竪穴建物であることが判明したことから、SI17 と SI18 の先後関係が誤りと判断し図の修正を行った。平面形は各辺が直線的な方形に近い形状をとる。

埋土　黒褐色土と暗褐色土が６層堆積する。１・４・５層は褐色土ブロック、３層は赤褐色ブロック、２・６層は炭化物を含む。中央から南部にかけて１・４層、北部から中央にかけて５層、西部から中央にかけて６層、中央の一部に２・３層が堆積する。

壁　Ⅲ層及び SI16 の埋土を掘り込む。壁面はやや開き、北壁・南壁は途中で緩やかになりながら皿状に開き、部分的にテラス状になる。壁の残存高は最大で 0.65m である。

床面　ほぼ平滑であるが、皿状になる。建物の中央に貼床（７層）が残る。貼床は暗褐色土が主体で、褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は土坑 34 基、貯蔵穴３基、壁際溝１条、炉１基である。このうち、Ｐ３・Ｐ18・Ｐ30～Ｐ32 で柱痕跡を確認した。柱穴状の掘方で竪穴建物の掘方中央を中心として同心円上に配置されるＰ１～Ｐ６を主柱穴と判断した。これらは貼床の外周に沿って配置される点が共通する。この点でＰ30 をはじめとする他の土坑についても建て替えに伴い移動した主柱穴が含まれている可能性がある。壁際溝は北西隅から西辺にかけて１条確認した。

炉　建物床面のほぼ中央部で炉を検出した。平面形は西辺を除いて直線的な方形に近い形状で床面を掘りくぼめた地床炉で、掘方は浅い皿状になる。底面は熱により赤変していた。黒色土・暗褐色土が２層堆積する。１層は炭化物を多く含む層である。

貯蔵穴　建物床面の南西寄りで貯蔵穴１から貯蔵穴３が重なり合う状況で検出した。新旧関係は貯蔵穴１＞貯蔵穴２＞貯蔵穴３である。いずれの貯蔵穴も平面形は不整に近い形状である。埋土は暗褐色土の単層で褐色土ブロックや炭化物を含む。

床下　貼床除去後、柱穴３基（Ｐ35～Ｐ37）を確認したが、このうちＰ35 で柱痕跡を確認した。

遺物出土状況　埋土中から縄文土器・石器が出土した。ほとんどが散在した状態で出土したが、竪穴建物の炉に近い６層中から１個体分の土器（284）が底面を上にした状態で出土した。埋土から出土した時期を特定できる土器は中期と前期中葉から後葉のもので大半が前期後葉である。中期の土器は重複を誤認した SI18 に近い位置で出土しているため、SI18 の土器が混入した可能性が高い。

出土遺物　257 はＺ２群３ａ２類で外面に細い突帯による横線文を２条施し、突帯間と突帯よりも下位に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文を２条施す。突帯上に斜めの刻みを入れる。口唇部には半截竹管状施文具の内側で刺突を施す。口縁部の内外面に赤彩が認められる。258・259 はＺ２群３ａ１類である。258 は内湾する口縁部の外面に低い突帯による横線文と一体化した弧状文を施す。突帯上には縦に短い刻みを入れる。259 は直線的に外傾する口縁部の外面に突帯による横線文を５条施す。突帯上には半截竹管施文具の内側による刻みを入れる。260～262 はＺ２群３ａ２類である。260 は外面に突帯による横線文と一体化した文様を施す。突帯上には斜めの刻みを入れる。口唇部にはボタン状の突起が付く。261 は外面に突帯による梯子状文と一体化した弧状文を施す。突帯上に斜めの刻みを入れる。262 は外面に突帯による梯子状文と一体化した弧状文を施す。突帯上に斜めの刻みを入れる。

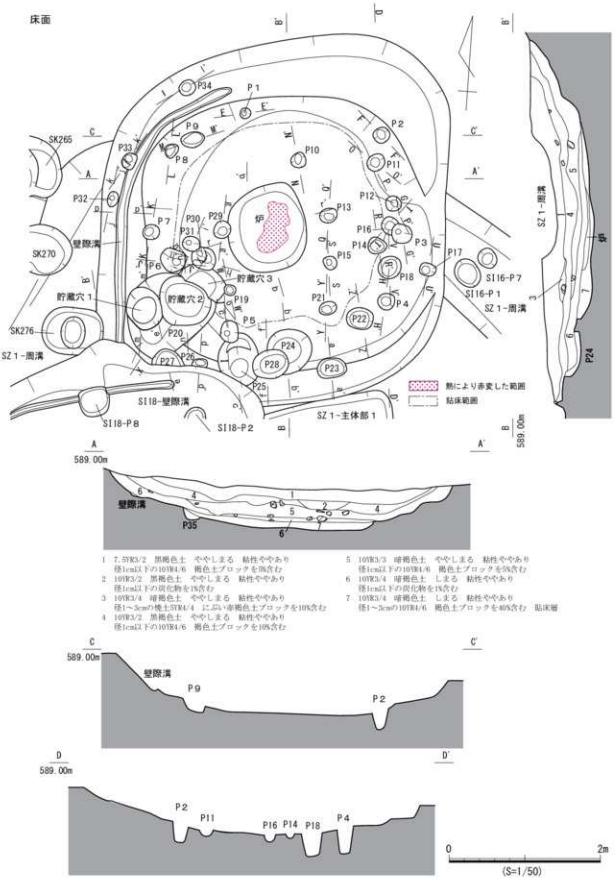


図 97　SI17 遺構図（１）

図 98　SI17 遺構図（2）

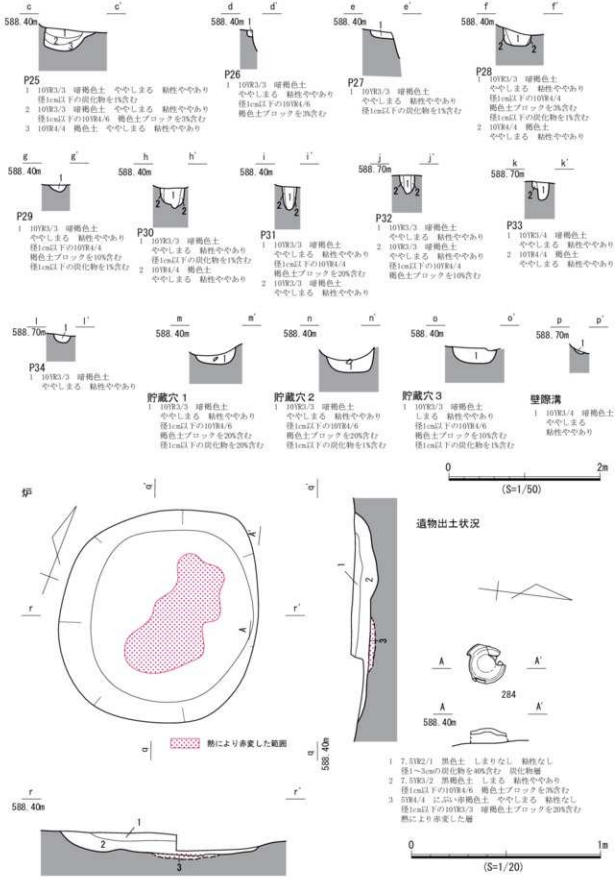


図99　SI17遺構図（3）

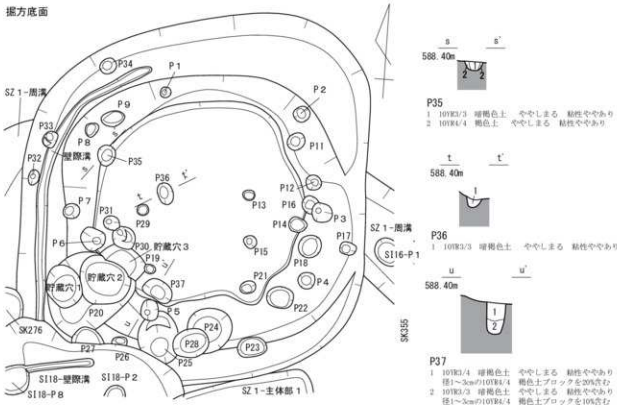


図 100　SI17 遺構図（４）

263・264 はＺ２群３ｃ類である。263 は直線的に外傾する口縁部の外面に幅広な突帯による横線文と枠状文を施す。突帯上に縄文を施す。264 は内湾する波状の口縁部の外面に幅広な突帯による横線文を３条施す。突帯上に縄文を施す。口唇部には半截竹管状施文具の内側による刻みを入れる。265 はＺ２群４ａ類で内湾する口縁部の外面に細い突帯による横線文と枠状文を施す。突帯は突帯幅より狭い半截竹管状施文具でナデ引きをする。266・267 はＺ２群６ｃ類である。266 は強く内湾する口縁部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で蕨手文を施す。267 は波状口縁で、内湾する口縁部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で横線文を施す。口唇部には棒状施文具による刻みを入れる。268～270 はＺ２群７ｂ類である。268・269 は内湾する口縁部の外面に地文として集合沈線文を施し、その上に円形や短線状の浮文を貼付する。270 は直線的に外傾する口縁部の外面に地文として縄文を施し、その上に短線状の浮文を貼付する。271 はＺ２群８類で外面に地文として縄文を施し、その上に結節浮線文を施す。272～274 はＺ２群 12ａ類である。272・273 は胴部片で外面に羽状縄文を施す。274 はやや外反する口縁部の外面に地文として羽状縄文を施す。外面に赤彩が認められる。275 はＺ２群 12ｃ類で胴部外面に羽状縄文を施す。276～287 はＺ２群 15 類である。276 は有穂浅鉢で胴部の括れ部分の外面に突帯による梯子状文を施し、下方に半截竹管状施文具による木葉文を施す。突帯には先端の細い施文具による斜めの刻みを入れる。277 は有穂浅鉢で胴部の括れ部分に突帯による梯子状文を施し、上方に半截竹管状施文具による弧線文を施す。278 は有穂浅鉢で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文を施す。279 は有穂浅鉢で外面に半截竹管状施文具の内側で穂部分に山形文を施す。280 は有穂浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で多重木葉文を施す。281 は有穂浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線文を施し、横線上を先端が細い施文具により矢羽根状に

刻む。胴部下半は半截竹管状施文具による連続爪形文で木葉文を施す。282は有稜浅鉢で口縁部が短く内屈する。内屈する口縁部の外面に波状文を施す。283は複段内湾浅鉢で口縁部が短く屈曲し直立する。

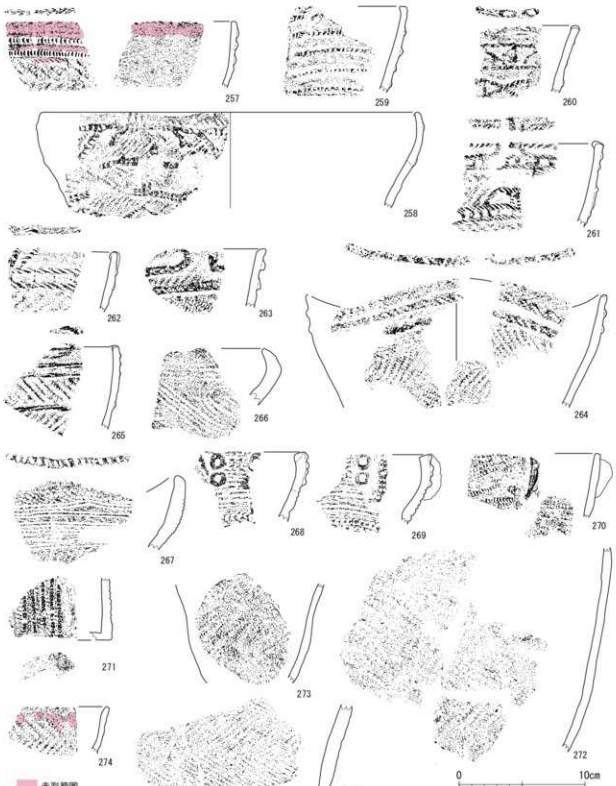


図 101　SI17 出土遺物（1）

口縁部の外面に半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。284は複段内湾浅鉢で、底部は丸底である。胴部の外面に半截竹管状施文具よる平行沈線で木葉文を施す。285は内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具よる連続爪形文で蕨手文を施し、その内側に縄文を充填する。内外面に赤彩が認められる。286・287は内湾浅鉢で半截竹管状施文具よる連続爪形文で横線文や木葉文を施す。288～290は凹基無茎石鏃である。288・289は基部の抉りが丸く深い。290は基部の抉りが「く」字状で深い。291～293

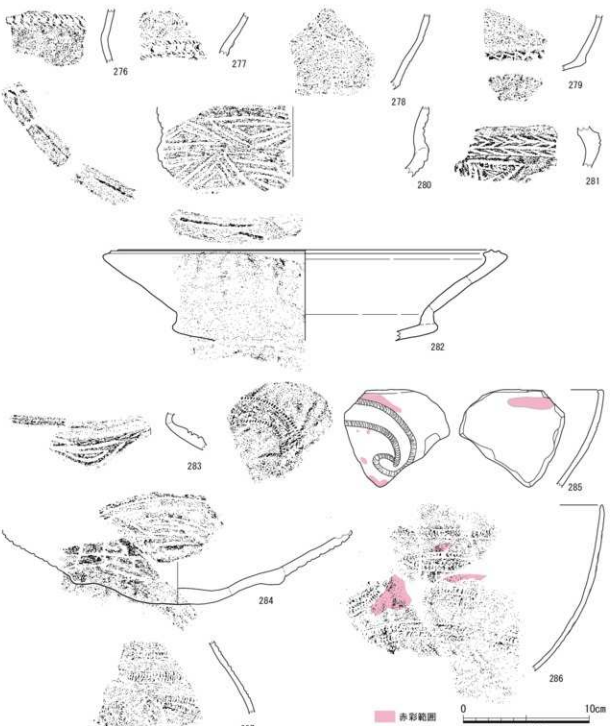


図102　SI17出土遺物（2）

は石錐である。291 は全体を棒状に剥離調整する。292・293 は横長な剥片を素材とし、錐部を棒状に剥離調整する。294～296 は石匙である。294 は両面を丁寧に剥離調整し、縁辺下部に直線的な刃部を作り出す。295 は縦長の剥片を素材とし、やや外湾する刃部を作り出す。296 は縦長の剥片を素材とし、縁辺左部・右部に直線的な刃部を作り出す。297・298 はスクレイパーである。297 は縦長の剥片を素材とし、縁辺左部に外湾する刃部を作り出す。298 は縦長の剥片を素材とし、縁辺左部の一部に外湾する刃部、縁辺右部に直線的な刃部を作り出す。299 は磨石・敲石類で長楕円礫を利用し、左側面に敲打痕・磨痕を残す。300 は管玉である。円孔内部は穿孔時の工具回転による線条痕が残る。穿孔部分にずれがないため片側穿孔と考えられる。

時期　重複する SI16 の所属時期から前期後葉より新しいが、284 などの出土土器から大きな時期差はないと考えられる。

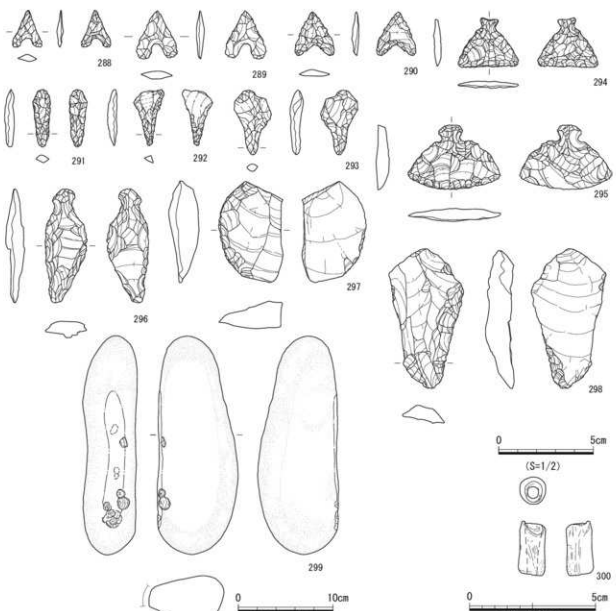


図 103　SI17 出土遺物（3）